大府市文化財調査報告書　第７集

深廻間Ｂ古窯跡群

～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ～

２００６年

大府市教育委員会

大府市文化財調査報告書　第７集

深廻間Ｂ古窯跡群

ふかはざま　こようせきぐん

～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ～

２００６年

大府市教育委員会

巻頭１　調査区遠景　南から

巻頭２　調査区近景　１号窯　南西から

巻頭３　調査区近景　２号窯・３号窯　西から

序

大府市を含む知多半島は、現在も常滑焼に代表される焼き物の一大生産地であります。その歴史は、古代に遡ると言われ、中世には、緩やかな丘陵地を利用した窯が各地で築窯され、多くの焼き物が生産されてきました。窯に利用された丘陵地は名古屋市南部から東部そして瀬戸・猿投山山麓まで続き、古代に操業を開始したと言われる猿投窯の窯もこの丘陵地に点在しています。大府市は、古代の猿投窯と常滑焼の影響を受けた地域ととらえられており、現在約１４０箇所の窯業遺跡が確認されております。

大府市は名古屋市に南接した都市で、区画整理事業・道路建設・民間開発事業が展開され、それに重なるように埋蔵文化財の発見・調査が増加しています。埋蔵文化財は歴史的にも文化的にも貴重な人類共通の遺産で、それを後世に伝えていくことは国民の義務であると考えます。

本市では、ここ１２年間各地で発掘調査が実施され、海陸庵古窯群（平成６）・神明古窯群（平成７）・円通寺古墓（平成７）・森岡第１号窯（平成８）・ガンジ山Ａ古窯群（平成９）・深廻間Ａ古窯群（平成９）・羽根山古窯群（平成１０）・深廻間Ｂ古窯群（平成１１）・深廻間Ｃ古窯群・砂原古窯・石亀戸古窯群（以上平成１５）・奥谷古窯・瀬戸Ｂ古窯群・瀬戸Ｃ古窯群（以上平成１６）・久分古窯群（平成１７）など、着々と窯業遺跡調査が実施され、多くの成果が得られています。

今回の深廻間Ｂ古窯跡群の発掘調査は、平成１１年１１月から行ったもので、ここに報告書として上梓いたしました。

最後になりましたが、発掘調査に指導された調査員の方々のご苦労とご協力に心から感謝いたします。また調査に際して、ご指導とご援助を賜りました愛知県教育委員会、大府市役所都市開発部区画整理課（現産業建設部都市整備課）、株式会社花井組、発掘調査作業にご参加された方々、この事業に対して、特別なご理解とご高配をいただきました大府深廻間特定土地区画整理組合理事長小島久夫氏（故人）はじめ役員の方々には厚くお礼を申し上げます。

平成１８年３月吉日

大府市教育委員会

教育長　梶　谷　　修

例　言

1．本書は愛知県大府市長草町深廻間２８番地、同１５番地の１９７他に所在した深廻間Ｂ古窯跡群の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は大府深廻間特定土地区画整理事業にともなう事前調査として大府市教育委員会の委託を受けた朝日航洋株式会社名古屋支店が支援した。現場の体制は安田幸市・村井志高（以上朝日航洋株式会社名古屋支店）が担当した。
3．調査期間は平成８年３月２７日に範囲確認調査を、平成１１年１１月１日から平成１１年１２月２１日まで本調査を行った。なお遺物洗浄作業は調査現場で実施した。平成１３・１４年度に出土品整理作業とその図化作業を、その後随時原稿の執筆をしながら、平成１７年度に報告書編集作業を実施した。
4．発掘調査にあたっては、次の各機関をはじめ多くの方々からのご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
　愛知県教育委員会文化財課、株式会社花井組、大府深廻間特定土地区画整理組合、大府市役所都市開発部区画整理課の各関係機関
5．出土品整理（マーキング・接合・仕分など）と実測図作成は平成１３・１４年度に緊急地域雇用対策基金などを利用して、アイシン精機株式会社新規事業企画室に委託した。
6．発掘調査と整理作業には以下の方々が参加協力された。お名前は以下のとおりである。
　現場作業および洗浄作業２９名
木下信雄、村野實、前田美江、舟崎千春、澤山昭八、児玉五市、真島知恵、井上純子、相木千津子、浅田レイ子、土井シズ、上飯坂日出美、牧野みゆき、児玉五市、酒向正三、榊原則夫、政時久、大川恵三、長谷川敏朗、石田素美子、井村米孝、大橋乃理江、田中信也、柘植幹子、土工久美子、藤澤尚代、間瀬澄恵、松原敬子、山田恒美（以上作業員）、鈴木智恵
　出土品整理作業９名
木下信雄、村野實、前田美江、石田尚子、石田由紀、井上純子、大橋乃理江、山田恒美、白木公子（以上アイシン精機株式会社新規事業企画室）
　出土品図化作業８名
岸本勝江、伊藤菜知子、垣見実架、岩月栄理香、越野恵美子、古川笑子、渡辺恵美子、近藤恵子（以上アイシン精機株式会社新規事業企画室）
7．手書きによる地層断面図のデジタルトレースを平成１４年度にアイシン精機株式会社委託した。
8．熱残留磁気測定と炭化物分析はそれぞれ富山大学理学部教授広岡公夫氏と株式会社パレオ・ラボ　植田弥生氏に依頼し、それぞれ玉稿を賜った。
9．本書の編集は古田功治が総括し、事務を鈴木智恵が行なった。執筆の分担は第２章と第３章を鈴木が、第５章を近藤英正が、それ以外を古田が行った。また第４章の熱残留磁気測定は富山大学理学部教授広岡公夫氏（当時）が、炭化物分析は、株式会社パレオ・ラボ植田弥生氏の執筆したものである。
10．窯体と調査区の測量および図化は愛知玉野情報システム株式会社が行い、座標は国土座標第Ⅶ系に準拠する。
11．土色には、小林正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』を使用した。
12．調査記録および出土遺物は大府市歴史民俗資料館で保管している。

目　次

第１章　　調査概要

第１節　　位置と地形 …… 2
第２節　　歴史的環境 …… 5
第３節　　発掘調査に至る経緯と調査過程等 …… 8

第２章　　遺　構

第１節　　窯体について …… 12
第２節　　前庭部と灰原について …… 30

第３章　　遺　物

第１節　　器形分類 …… 34
第２節　　窯内と灰原などの遺物 …… 38
第３節　　考察 …… 70

第４章　　科学分析

第１節　　深廻間Ｂ古窯跡群の考古地磁気 …… 74
第２節　　深廻間Ｂ古窯跡群の出土炭化材の樹種同定 …… 91

第５章　　総　論

遺構について …… 98
遺物について …… 98
炭化材について …… 99
築窯年代について …… 99

報告書抄録 …… 100

挿図目次

第 1 図　遺跡位置図（国土地理院　1/5 万地形図「名古屋南」）…… 3
第 2 図　大府市の表層地質図 …… 4
第 3 図　調査地点地形図 …… 6
第 4 図　周辺遺跡分布図（1/1.3 万）…… 6
第 5 図　調査前地形図 …… 9
第 6 図　遺構配置図 …… 13
第 7 図　1 号窯窯体実測図 …… 15
第 8 図　1 号窯断割セクション図 1 …… 16
第 9 図　1 号窯断割セクション図 2 …… 17
第 10 図　2 号窯窯体実測図 …… 20
第 11 図　2 号窯断割セクション図 1 …… 21
第 12 図　2 号窯断割セクション図 2 …… 22
第 13 図　2 号窯断割セクション図 3 …… 23
第 14 図　3 号窯窯体実測図 …… 26
第 15 図　3 号窯断割セクション図 1 …… 27
第 16 図　3 号窯断割セクション図 2 …… 28
第 17 図　3 号窯断割セクション図 3 …… 29
第 18 図　SK01･SK02 平面図･セクション図 …… 31
第 19 図　灰原セクション図 …… 32
第 20 図　部位等名称図 …… 34
第 21 図　碗類･皿類器形分類図 …… 35
第 22 図　鉢類器形分類図 …… 36
第 23 図　1 号窯碗類遺物実測図 …… 38
第 24 図　1 号窯皿類器形分類別組成図 …… 39
第 25 図　2 号窯碗類器形分類別組成図 …… 40
第 26 図　2 号窯碗類遺物実測図 …… 41
第 27 図　2 号窯皿類器形分類別組成図 …… 42
第 28 図　2 号窯皿類遺物実測図 …… 42
第 29 図　2 号窯焼台遺物実測図 …… 44
第 30 図　2 号窯灰原皿類遺物実測図 …… 46
第 31 図　2 号窯灰原土師質埚遺物実測図 …… 46
第 32 図　3 号窯碗類器形分類別組成図 …… 47
第 33 図　3 号窯碗類遺物実測図 …… 47
第 34 図　3 号窯碗類特殊品遺物実測図（その 1）…… 48
〃　3 号窯碗類特殊品遺物実測図（その 2）…… 49
第 35 図　3 号窯皿類器形分類別組成図 …… 54
第 36 図　3 号窯皿類遺物実測図 …… 54

第37図　3号窯床面上碗類遺物実測図 …… 57
第38図　3号窯床面上皿類遺物実測図 …… 58
第39図　3号窯鉢類遺物実測図 …… 59
第40図　3号窯焼台遺物実測図 …… 60
第41図　3号窯灰原碗類器形分類別組成図 …… 60
第42図　3号窯灰原碗類遺物実測図 …… 61
第43図　3号窯灰原皿類器形分類別組成図 …… 61
第44図　3号窯灰原皿類遺物実測図 …… 62
第45図　3号窯灰原鉢類遺物実測図 …… 62
第46図　SK01碗類器形分類別組成図 …… 63
第47図　SK01碗類遺物実測図 …… 63
第48図　SK01皿類器形分類別組成図 …… 65
第49図　SK01皿類遺物実測図 …… 65
第50図　SK02碗類遺物実測図 …… 66
第51図　SK02皿類器形分類別組成図 …… 67
第52図　SK02皿類遺物実測図 …… 67
第53図　SK03碗類遺物実測図 …… 68
第54図　SK03皿類遺物実測図 …… 68
第55図　表採碗類遺物実測図 …… 69
第56図　過去2,000年間の西南日本版考古磁気永年変化（細線）（広岡、1977）
および西暦500～1550年の東海版永年変化（太線）（広岡・藤澤、1998）と深廻間B古窯群の
考古磁気測定結果 …… 78

表目次

第1表　大府市遺跡一覧表 …… 7
第2表　発掘調査に伴う法的手続き …… 10
第3表　1号窯碗類観察表 …… 38
第4表　1号窯碗類器形分類別組合せ表 …… 39
第5表　1号窯皿類観察表 …… 39
第6表　1号窯灰原碗類観察表 …… 39
第7表　1号窯灰原皿類観察表 …… 39
第8表　2号窯出土碗類器形分類別組合せ表 …… 40
第9表　2号窯碗類観察表（その1） …… 40
〃　2号窯碗類観察表（その2） …… 41
第10表　2号窯出土皿類器形分類別組合せ表 …… 42
第11表　2号窯皿類観察表（その1） …… 43
〃　2号窯皿類観察表（その2） …… 44

第12表　2号窯焼台観察表 …… 44
第13表　2号窯床面下碗類観察表 …… 45
第14表　2号窯床面下皿類観察表 …… 45
第15表　2号窯灰原碗類観察表 …… 46
第16表　2号窯灰原皿類観察表 …… 46
第17表　2号窯灰原土師質埚観察表 …… 46
第18表　3号窯出土碗類器形分類別組合せ表 …… 47
第19表　3号窯碗類観察表（その1） …… 49
〃　3号窯碗類観察表（その2） …… 50
〃　3号窯碗類観察表（その3） …… 51
〃　3号窯碗類観察表（その4） …… 52
〃　3号窯碗類観察表（その5） …… 53
第20表　3号窯重ね碗類観察表 …… 53
第21表　3号窯出土皿類器形分類別組合せ表 …… 54
第22表　3号窯皿類観察表（その1） …… 55
〃　3号窯皿類観察表（その2） …… 56
〃　3号窯皿類観察表（その3） …… 57
第23表　3号窯重ね皿類観察表 …… 57
第24表　3号窯床面上碗類観察表（その1） …… 57
〃　3号窯床面上碗類観察表（その2） …… 58
第25表　3号窯床面上皿類観察表 …… 58
第26表　3号窯鉢類観察表 …… 59
第27表　3号窯焼台観察表 …… 60
第28表　3号窯灰原出土碗類器形分類別組合せ表 …… 60
第29表　3号窯灰原碗類観察表 …… 61
第30表　3号窯灰原出土皿類器形分類別組合せ表 …… 61
第31表　3号窯灰原皿類観察表 …… 62
第32表　3号窯灰原重ね皿類観察表 …… 62
第33表　3号窯灰原鉢類観察表 …… 62
第34表　SK01出土碗類器形分類別組合せ表 …… 63
第35表　SK01碗類観察表 …… 64
第36表　SK01出土皿類器形分類別組合せ表 …… 65
第37表　SK01皿類観察表 …… 65
第38表　SK02碗類観察表 …… 66
第39表　SK02出土皿類器形分類別組合せ表 …… 67
第40表　SK02皿類観察表 …… 67
第41表　SK02重ね皿類観察表 …… 67
第42表　SK03碗類観察表 …… 68

第43表　SK03皿類観察表 …… 68
第44表　南北トレンチ碗類観察表 …… 69
第45表　南北トレンチ皿類観察表 …… 69
第46表　表採碗類観察表 …… 69
第47表　表採皿類観察表 …… 69
第48表　表採鉢類観察表 …… 69
第49表　碗類皿類の法量比較表 …… 70
第50表　碗類器形分類別組合せ表 …… 71
第51表　皿類高台別法量平均表 …… 71
第52表　皿類器形分類別組合せ表 …… 72
第53表　深廻間B古窯第1・2・3号窯で採取した考古磁気試料番号 …… 79
第54表　深廻間B古窯第1号窯のNRMの磁化測定結果 …… 79
第55表　深廻間B古窯第1号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 80
第56表　深廻間B古窯第1号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 80
第57表　深廻間B古窯第1号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 81
第58表　深廻間B古窯第1号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 81
第59表　深廻間B古窯第1号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 82
第60表　深廻間B古窯第1号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 82
第61表　深廻間B古窯第2号窯のNRMの磁化測定結果 …… 83
第62表　深廻間B古窯第2号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 83
第63表　深廻間B古窯第2号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 84
第64表　深廻間B古窯第2号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 84
第65表　深廻間B古窯第2号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 85
第66表　深廻間B古窯第2号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 85
第67表　深廻間B古窯第2号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 86
第68表　深廻間B古窯第3号窯のNRMの磁化測定結果 …… 86
第69表　深廻間B古窯第3号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 87
第70表　深廻間B古窯第3号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 87
第71表　深廻間B古窯第3号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果 …… 88
第72表　深廻間B古窯第3号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 88
第73表　深廻間B古窯第3号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 89
第74表　深廻間B古窯第3号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果 …… 89
第75表　深廻間B古窯第1・2・3号窯の考古磁気測定結果 …… 90
第76表　深廻間B古窯群出土炭化材樹種同定結果一覧 …… 94

写真目次

巻頭　1　調査区遠景　南から …… i
巻頭　2　調査区近景　1号窯　南西から …… ii
巻頭　3　調査区近景　2号窯・3号窯　西から …… ii
写真　1　調査区とその周辺　南から …… 2
写真　2　作業風景 …… 10
写真　3　作業風景 …… 10
写真　4　1号窯全体　西から …… 14
写真　5　1号窯断割全体　西から …… 14
写真　6　1号窯焼成室埋土（d－d′）　西から …… 14
写真　7　1号窯燃焼室埋土（b－b′）　西から …… 14
写真　8　1号窯焼成室北壁　南西から …… 14
写真　9　1号窯分焔柱断割（B－B′）　西から …… 14
写真10　2号窯全体　西から …… 19
写真11　2号窯断割全体　西から …… 19
写真12　2号窯焼成室埋土（b－b′）　西から …… 19
写真13　2号窯焼成室遺物出土状況　西から …… 19
写真14　2号窯煙道部付近の床面状況　西から …… 19
写真15　2号窯分焔柱のダンパー部分　西から …… 19
写真16　3号窯全体　西から …… 25
写真17　3号窯断割全体　西から …… 25
写真18　3号窯焼成室埋土（c－c′）　西から …… 25
写真19　3号窯分焔柱部分（b－b′）　西から …… 25
写真20　3号窯焼成室断割（D－D′）　西から …… 25
写真21　3号窯焼成室遺物出土状況　南から …… 25
写真22　1号窯灰原全体　西から …… 30
写真23　3号窯灰原全体　西から …… 30
写真24　SK01・SK02・SK03全体　西から …… 31
写真25　SK01　西から …… 31
写真26　SK02　南から …… 31
写真27　SK03（前庭部）　北から …… 31
写真28　1号窯碗類 …… 38
写真29　2号窯碗類 …… 41
写真30　2号窯皿類（その1） …… 42
〃　2号窯皿類（その2） …… 43
写真31　2号窯焼台 …… 44
写真32　2号窯灰原皿類 …… 46
写真33　2号窯灰原土師質堝 …… 46

写真34　3号窯碗類 …… 48
写真35　3号窯碗類特殊品 …… 49
写真36　3号窯皿類（その1） …… 54
〃　3号窯皿類（その2） …… 55
写真37　3号窯床面上碗類 …… 57
写真38　3号窯床面上皿類 …… 58
写真39　3号窯鉢類 …… 59
写真40　3号窯焼台 …… 60
写真41　3号窯灰原碗類 …… 61
写真42　3号窯灰原皿類 …… 62
写真43　3号窯灰原壺類 …… 63
写真44　SK01碗類 …… 63
写真45　SK01皿類 …… 65
写真46　SK02碗類 …… 66
写真47　SK02皿類 …… 67
写真48　SK03碗類 …… 68
写真49　SK03皿類 …… 68
写真50　表採碗類 …… 69
写真51　出土炭化材樹種1 …… 95
写真52　出土炭化材樹種2 …… 96

第1章　調　査　概　要

調査前全景　西から

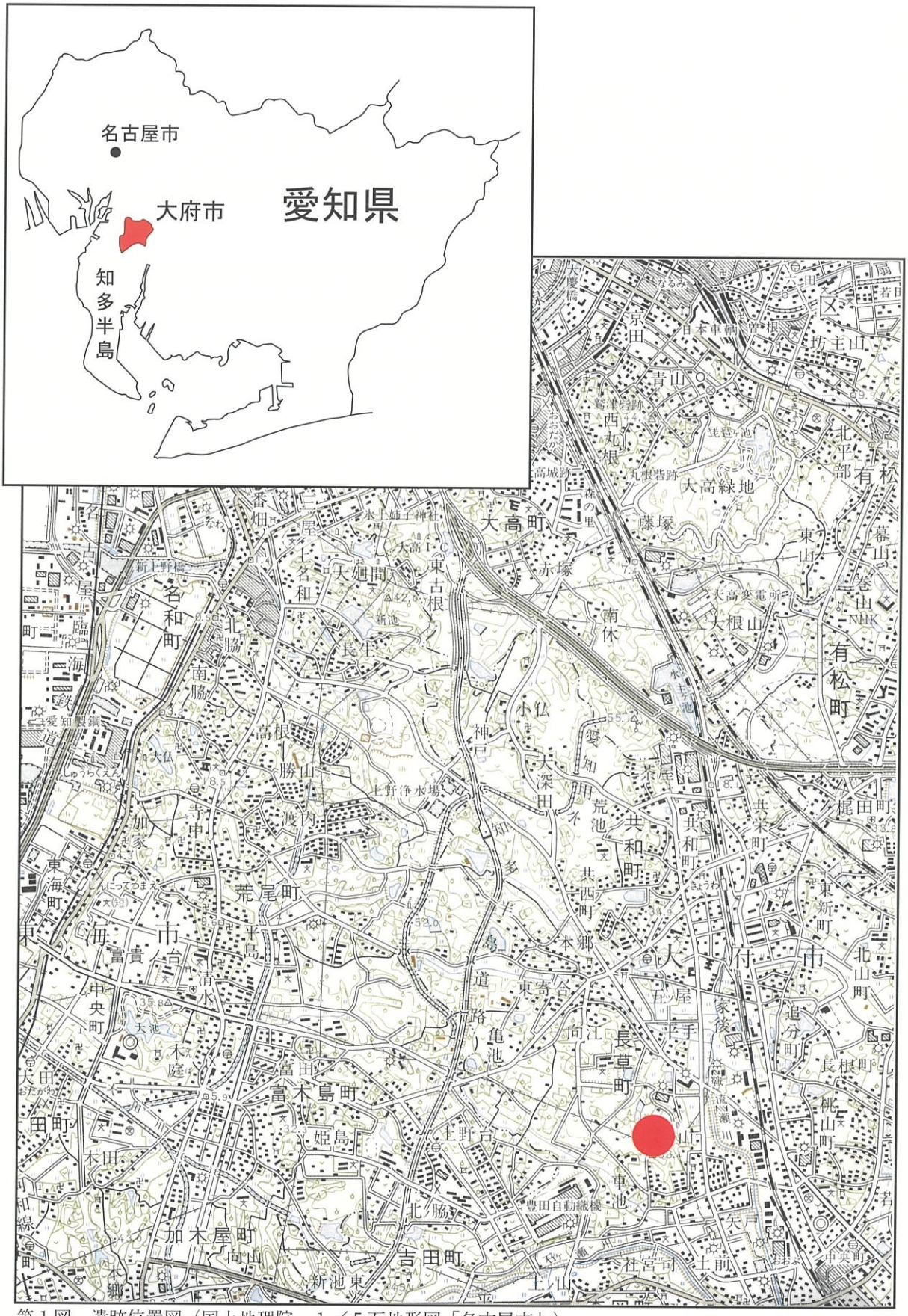
第１節　位置と地形

大府市は知多半島の基部に位置し、南西の端を頂点とする二等辺三角形の市域を形成する。面積は33.68㎢である。市域は主に丘陵地から成るが、中央部には丘陵地を二分する北西－南東方向の低地があり、そこをＪＲ東海道線が通っている。東部は尾張丘陵と総称される名古屋市の東部の丘陵につながっている。西部は大府丘陵と呼ばれている。これらの丘陵は北東－南西方向に標高を下げ、市域では丘陵の最も高いところで40～50ｍとなっている。このため大府丘陵の方がややなだらかな地形となっている。丘陵は常滑層群と呼ばれる地層からなり、礫層、砂層、シルト層から構成される。常滑累層は下部から上部にかけて構成粒子が大きくなり、上部層の表出している尾張丘陵では礫層が多く挟まるようになる。このような地層的な特徴を有する大府丘陵に深廻間Ｂ古窯跡群は立地している①。

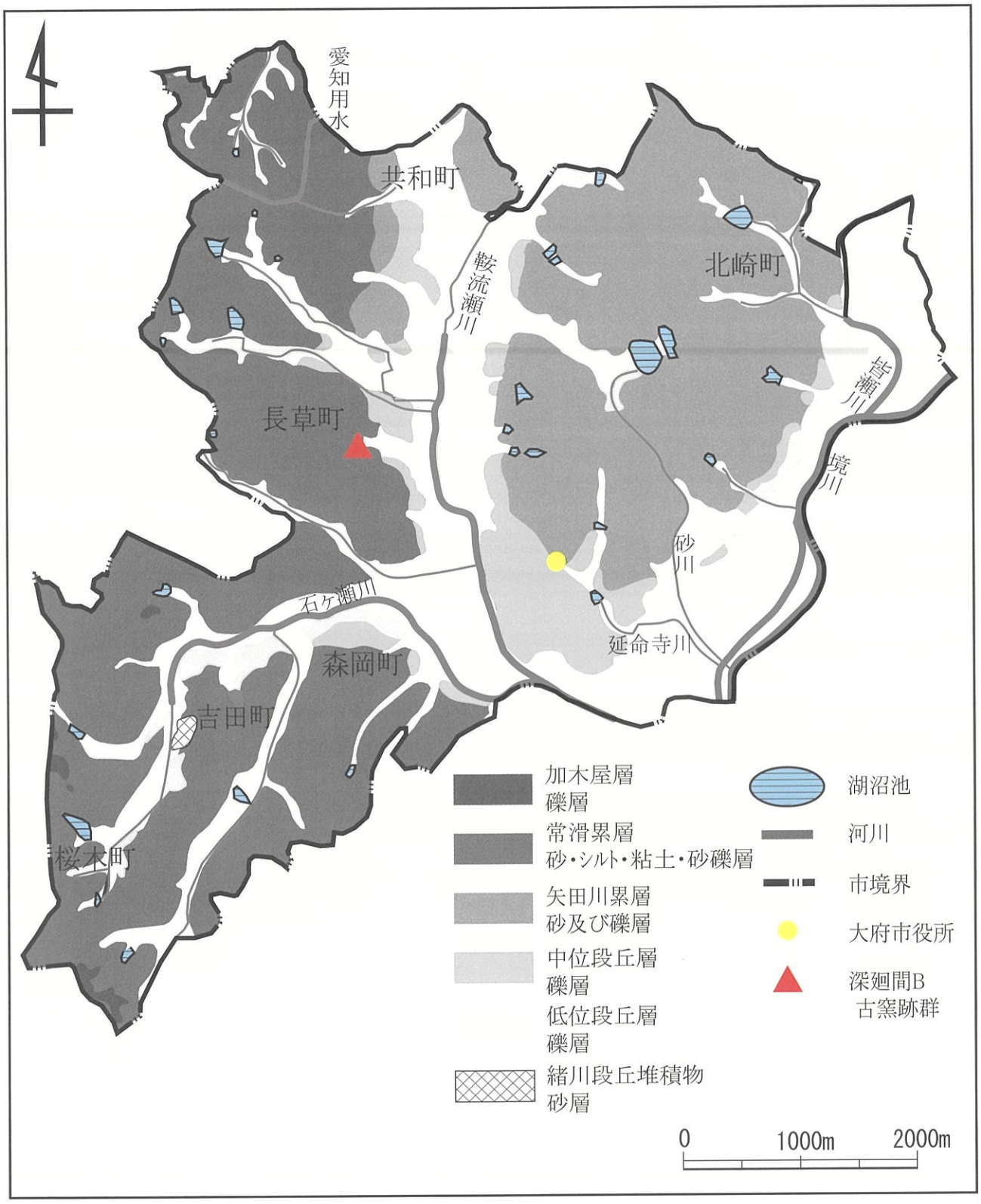
本古窯跡群は市道東浦共和線に隣接しており、西へ約100ｍ程入った北西方向にゆるやかに傾斜した畑に位置していた。当地はほとんどが丘陵を人力で開墾したところで、周辺は雑木林にかこまれた畑であった。発見時は窯体の一部が畑と雑木林の境界を画する削りだされた崖に露出していた。発見時はどの程度残存していたのかは不明であったが、範囲確認調査により３基の存在を確認し、しかもかなり良好な状態であることが明らかとなった。

註①『大府市誌』資料編　自然　3～18頁（1988年刊、大府市役所）

写真１　調査区とその周辺　南から



第１図　遺跡位置図（国土地理院　１／５万地形図「名古屋南」）



第２図　大府市の表層地質図

引用文献：『日本地質図体系』（名古屋南部、知多半島より加筆・修正）

第２節　歴史的環境

深廻間Ｂ古窯跡群は市中心部に近接し、市庁舎やＪＲ大府駅のある市中心街から直線距離にして北西約1.2㎞の場所である。ここは前述したように大府丘陵の一角であるが、地形的には境川に注ぐ鞍流瀬川水系域の丘陵地のやや奥まった所である。北東側に緩やかに傾斜した斜面に立地し、標高約25～30ｍである。

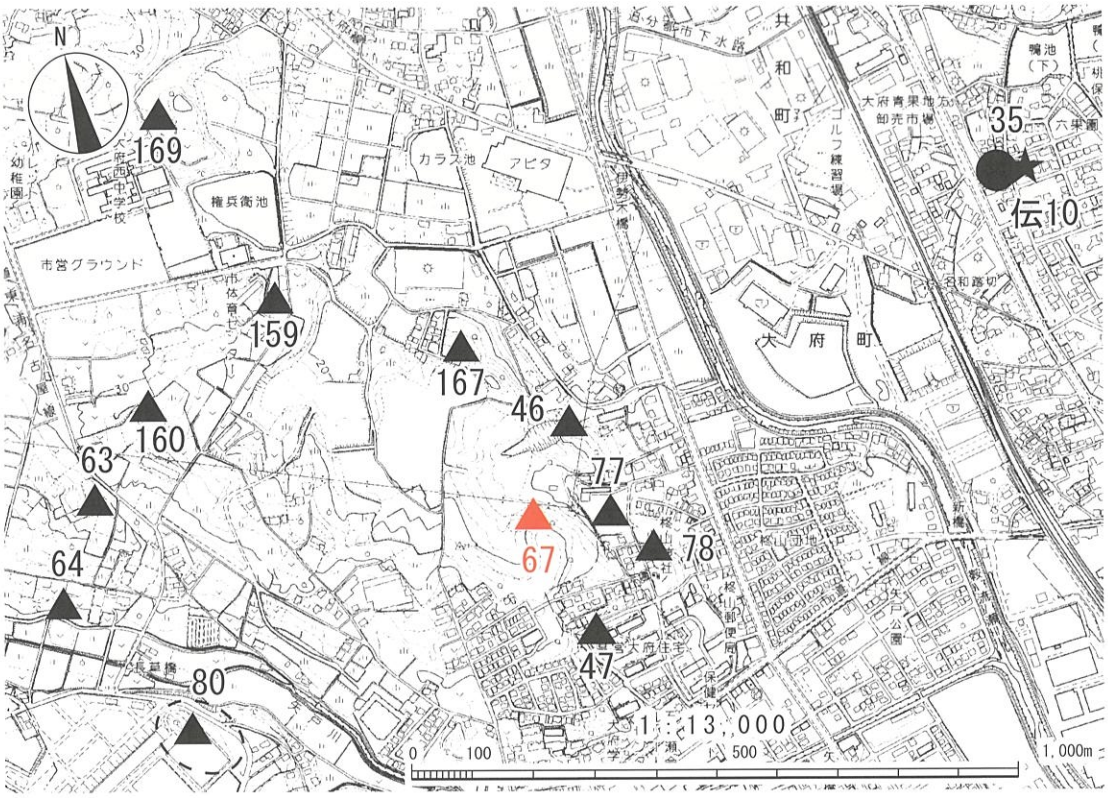
周辺には縄文から古代までの遺跡は発見されていない。中世に入る頃より古代（５世紀）から焼き物生産が始められた流れを受け継いだ、猿投山山麓における灰釉陶器窯（いわゆる猿投山西南麓古窯群）が進出し、その系譜を引くと言われる中世山茶碗窯が丘陵地で生産を開始する。成立は１２世紀初頭といわれ、常滑古窯群とも知多古窯群とも称される。大府市はいずれの古窯群とも境を接する地区で、尾野善裕氏は猿投山西南麓古窯群と知多古窯群との境を市の中心を通る東海道本線で分けている②。この想定でいけば、深廻間Ｂ古窯跡は後者に含まれる。これが妥当かどうかは調査遺跡の増加と新発見の古窯から、検討の余地があると思われるが今は従っておくことにする。

平安時代になると、猿投山西南麓古窯群と目される灰釉陶器系の野々宮古窯跡や高根山Ｃ古窯群を最古の事例としてこの地域でも窯業生産が丘陵地に登場し、その流れを汲むと思われ、碗と皿を中心に焼成した中世山茶碗窯が市内全域で展開する。代表的な遺跡として１２世紀代に鳥羽離宮安楽寿院の瓦を生産した吉田第１・第２号窯（吉田町1968・69市教委調査）、大量の広口長頸瓶を焼いた神明古窯群（吉田町1995市教委調査）やへら描文をもつ壺が出土した森岡第１号窯群（森岡町1996県埋文セ調査）がある。これらは石ヶ瀬川水系の丘陵地で、年代的に古い窯跡が多く、大府市での窯業生産の故知となすこともできる。一方鞍流瀬川水系の深廻間Ｂ古窯跡群周辺には平安時代の遺跡は知られていないが、同古窯群から西に伸びる丘陵地には深廻間Ａ古窯群（長草町1997市教委調査）・深廻間Ｃ古窯群（2004市教委調査）、柊山Ａ古窯・柊山Ｂ古窯・柊山Ｃ古窯、車池Ａ古窯・車池Ｂ古窯（以上長草町）などの窯業遺跡が確認でき、いずれも丘陵地に存在している。時代的には１２世紀末期から１４世紀頃と想定される、いわゆる中世山茶碗窯である。

大府市では現在までに１７４カ所の遺跡を確認しているが、そのうち１４９カ所が窯業関連遺跡で、85.6％に及んでいる。遺跡の分布をみると、空白地帯が存在するが、ほぼ市内全域に古窯が確認され、その立地はすべて丘陵地である。すべての古窯跡の築窯年代が解明されているわけではないが、焼成品や調査結果から推測すると、この地は平安時代末期から鎌倉時代末期の約２００年間ほどに集中している。つまり、この時期当地は一大窯業地帯だったのではないかと想像される。今後、遺跡分布調査が進展すれば、さらに多くの窯跡が発見され、この仮説が裏付けされると確信される。

註②　尾野善裕編『ＮＮ３３０号窯発掘調査報告書』137頁（1994年刊、名古屋市教育委員会）

第３図　調査地点地形図



第４図　周辺遺跡分布図（１／1.3 万）

平成１７年３月９日現在

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	子安神社遺跡	弥生～中世	59	海陸庵古窯群	鎌倉中期	117	山中遺跡	古代～中世
2	共栄遺跡	縄文	60	円通寺古墓	近世	118	児子廻間A遺跡	古代
3	東光寺経塚	江戸	61	上入道古窯	中世	119	児子廻間B遺跡	古代
4	賢聖院貝塚	中世	62	長根山A古窯群	中世	120	下入道子窯	中世
5	惣作遺跡	弥生～鎌倉	63	立根B古窯群	中世	121	坊主山A古窯群	中世
6	桟敷貝塚	縄文晩期	64	立根C古窯群	中世	122	井田B古窯	中世
7	高山古墳	古墳後期	65	立根D古窯群	中世	123	梶田B古窯群	中世
8	正官墳	中世	66	立根E古窯	中世	124	石亀土古窯群	中世
9	南島貝塚	不明	67	深廻間B古窯群	中世	125	箕手C古窯群	中世
10	石丸遺跡	中世	68	西浜田遺跡	不明	126	古井戸A古窯	中世
11	源吾遺跡	古墳	69	二ツ池東古窯	中世	127	長峰北A古窯	中世
12	野々宮古窯	平安中期	70	藤井宮御酒瓶子出土地	中世	128	長峰北B古窯	中世
13	森岡第１号窯群	12世紀中	71	平子古窯	中世	129	長峰北C古窯群	中世
14	森岡第２号窯	13世紀	72	鴨池北古窯群	中世	130	篭染西古窯	古代
15	北向古窯	13世紀	73	鴨池東古窯	中世	131	井戸場古窯群	中世
16	旧中部病院第１号窯	12世紀	74	下北山古窯群	中世	132	西定保根A古窯群	中世
17	旧中部病院第２号窯	不明	75	川池西古窯	不明	133	高根山B古窯群	古代～中世
18	旧中部病院第３号窯	不明	76	石亀土古窯	不明	134	高根山C古窯群	古代
19	ハンヤ古窯	13世紀	77	柊山B古窯	不明	135	山手C古窯群	中世
20	吉田第１号窯	12世紀	78	柊山C古窯	中世	136	上り坂古窯	中世
21	吉田第２号窯	12世紀	79	雨兼池西古墳	古墳	137	山之神社北古窯	中世
22	律粉古窯	13世紀	80	山口古窯群	不明	138	八代山A古窯	中世
23	篭染第１号窯	13世紀	81	大高山古窯	不明	139	八代山B古窯	中世
24	篭染第２号窯	不明	82	篭染第３号窯	中世	140	八代山C古窯	中世
25	大日古窯	不明	83	円通寺経塚	江戸中期	141	西定保根B古窯群	古代～中世
26	外輪第１号窯	不明	84	大廻間古窯	中世	142	箕手D古窯	中世
27	外輪第２号窯	不明	85	みどり公園古窯	中世	143	箕手E古窯群	中世
28	外輪第３号窯	不明	86	高根山西古窯	中世	144	上東山A古窯	中世
29	外輪第４号窯	不明	87	口無池西古窯	中世	145	上東山B古窯	中世
30	骨田末古窯	12世紀	88	北崎大池北古窯	平安	146	立合池東古窯群	中世
31	吉川城跡	室町	89	箕手A古窯	中世	147	立合池西A古窯群	中世
32	横根城跡	戦国	90	箕手B古窯	中世	148	立合池西B古窯群	中世
33	追分城跡	室町	91	ガンジ山A古窯群	13世紀	149	古井戸B古窯	中世
34	石ヶ瀬古戦場跡	室町	92	律粉東古窯	中世	150	脇ノ畑A古窯	中世
35	大清水井戸跡	室町	93	上徳古窯群	中世	151	脇ノ畑B古窯	中世
36	おしも井戸跡	不明	94	丸根城跡	不明	152	脇ノ畑C古窯	中世
37	芦沢井戸跡	中世	95	大深田古窯	12世紀	153	馬池東古窯	中世
38	福池古窯	中世	96	荒池古窯群	中世	154	東端B古窯	中世
39	大根古窯	中世	97	砂原古窯	中世	155	毛分田A古窯	中世
40	高根山古窯群	中世	98	木根A古窯群	中世	156	毛分田B古窯	中世
41	梶田古窯	中世	99	木根B古窯群	中世	157	家下古窯	中世
42	別岨古窯群	中世	100	久分古窯群	中世	158	上家下古窯	中世
43	権兵衛池古窯	中世	101	瀬戸B古窯群	中世	159	車池A古窯	中世
44	名高山古窯群	中世	102	奥谷古窯	中世	160	車池B古窯	中世
45	立根A古窯群	中世	103	瀬戸A古窯	中世	161	森東古窯	中世
46	深廻間A古窯群	鎌倉	104	北山古窯	中世	162	前田A古窯	中世
47	柊山A古窯群	中世	105	石原古窯群	中世	163	前田B古窯	中世
48	石ヶ瀬古窯	中世	106	長草城跡	不明	164	前田C古窯	中世
49	江端古窯	中世	107	長根山B古窯	中世	165	森前古窯	中世
50	延命寺貝塚	不明	108	普門寺遺跡	中世	166	骨田池南古窯	中世
51	割木A古窯群	中世	109	寺田遺跡	中世	167	深廻間C古窯群	中世
52	東端古窯	中世	110	大高山西古窯群	中世	168	子安古窯	古代～中世
53	才田A古窯	中世	111	影清屋敷跡	不明	169	上田ノ松古窯	中世
54	才田B古窯	中世	112	外輪南古窯	中世	170	瀬戸C古窯群	中世
55	山手A古窯	不明	113	炭焼遺跡	中世	171	中村遺跡	古代～中世
56	山手B古窯	不明	114	上り戸古窯	中世	172	ウドA古窯	古代
57	羽根山古窯群	中世	115	井田古窯群	中世	173	ウドB古窯	古代
58	神明古窯群	平安末期	116	池之分古窯	不明	174	森岡平子古窯	中世

第１表　大府市遺跡一覧表

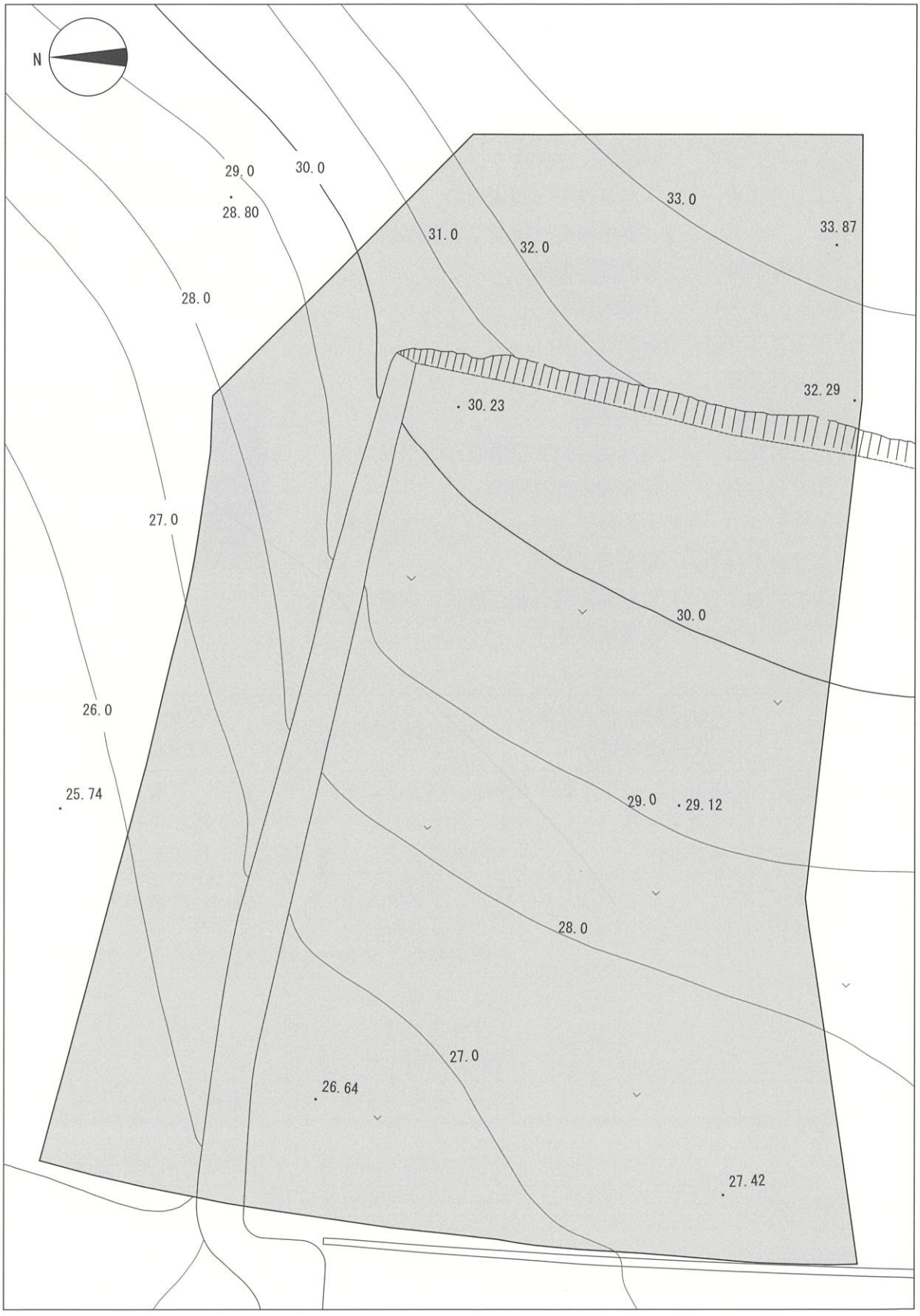
第３節　発掘調査に至る経緯と調査経過等

深廻間Ｂ古窯跡群は、当地区で区画整理事業が行なわれることに先行して、遺跡分布調査の実施により新たに確認された遺跡である。この窯跡は、地主以外は知られていない場所であった。

市内での区画整理事業立案が活発であった１９８０年代後半には長草町深廻間地区でも計画があり、平成７年９月には区画整理組合が設立され、大府深廻間特定土地区画整理事業として事業化された。組合設立前後から大府市役所区画整理課から愛知県教育委員会へ提出された「埋蔵文化財の有無の照会」により、愛知県教育委員会文化財課（現文化財保護室）と協力して区域内における埋蔵文化財の把握するための分布調査を実施した。それにより、２箇所の遺跡を確認または発見するに及び、それぞれ深廻間Ａ古窯群と深廻間Ｂ古窯群と命名し、埋蔵文化財包蔵地をして「大府市遺跡等分布図」に掲載した。その後、造成計画が決まり、造成工事前の事前調査として調査に着手した。本調査に先立ち、平成８年３月２７日に範囲確認調査（遺跡の範囲・規模・残存状況などを確認）を実施し、畑の中と雑木林との境界とにトレンチを設定し、その結果、３基の窯体を確認した。

平成１１年１０月に本調査の準備に入り、１０月２０日から草刈と樹木の伐採、同２６日から表土剥ぎ、１０月２９日に国土座標Ⅶ系に基づいて5m×5mのグリッドを設定後、本調査を開始した。調査は、市から発掘調査の業務委託を受けた朝日航洋株式会社名古屋支店が行い、市歴史民俗資料館と愛知県教育委員会が調査進行を監督する形で行った。調査面積は約1000㎡である。

抜根と表土剥ぎの段階で窯跡が３基と灰原２箇所であることが再確認された。調査の通例として、灰原の検出を優先し、その後窯体掘削に移行する手順で調査を開始した。灰原はほとんど消滅した状態であったが、窯体はほぼ全体が残り、３基が平行して並んでいた。区別するために窯に対面して左から順に１号窯・２号窯・３号窯と名付けることにした。窯内には縦方向（窯体と平行）１本と横方向（窯体と直交）３本ベルトを設定した上でそこを残す形で掘削し、断層図面作成後、１２月２日に窯内掘削は完了した。１２月４日の午前には空撮を行い、窯体構造解明のための床面の断割作業に移行した。１２月７日には富山大学による熱残留磁気測定調査のサンプリングが行なわれた後、各窯の床面断割作業に進んだが、いずれの窯の焼成室にも床面下施設と呼ばれる人工的な排水施設は施されていなかったため、これが存在しないことを確認したところで、すべての作業を終え、１２月２１日に調査が終了した。その後２４日には出土品・作業道具・機器や事務所を調査区から搬出して、現場撤収が終了した。



第５図　調査前地形図

1：200

0 1 5 10m

調査日誌抄

平成１１年　１０月２０日　調査区設定および伐採作業開始
　　１０月２６日　表土剥ぎ
　　１０月２９日　基準および杭打ち、調査打合せ
　　１１月２日　作業員投入と調査開始
　　（遺構検出と灰原等掘削開始）
　　１１月５日　窯内掘削開始
　　１１月１８日　調査区拡張
　　１１月３０日　調査打合せ
　　１２月２日　窯内完掘
　　１２月４日　空撮測量
　　１２月７日　熱残留磁気測定調査サンプリング
　　１２月８日　窯体断割作業開始
　　１２月９日　大府西中学校生徒（４５名）見学
　　１２月２０日　調査完了検査
　　１２月２１日　出土品を資料館へ搬入、調査終了
　　１２月２４日　現場撤収完了

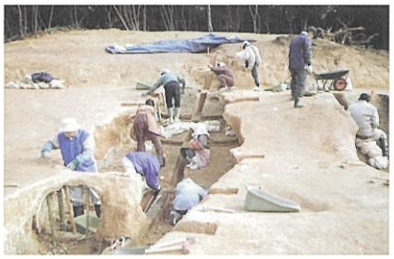


写真２　作業風景

写真３　作業風景

区　分	大府深廻間特定土地区画整理組合	大府市教育委員会	愛知県教育委員会（愛知県警）
文化財保護法第５７条の２（旧法）	届出、平成１１年９月２４日第２８号	進達、平成１１年１０月２５日大教生発第１７０－１号	通知、平成１１年１０月２５日１１教文第６３－３３１号
文化財保護法第９８条の２（旧法）		通知、平成１１年１１月２５日大教生発第１８５－１号	通知、平成１１年１２月７日教文第６２－５０号
終了届		届出　平成１１年１２月２２日大教生発第１９３号	
遺失物法第１条による届出		届出　平成１１年１２月２４日大教生発第１９４号	（受理　平成１１年１２月２４日愛知県東海警察署）
埋蔵文化財保管証		平成１１年１２月２２日大教生発第１９３号	

第２表　発掘調査に伴う法的手続き

第2章　遺　構

調査区全景　西から

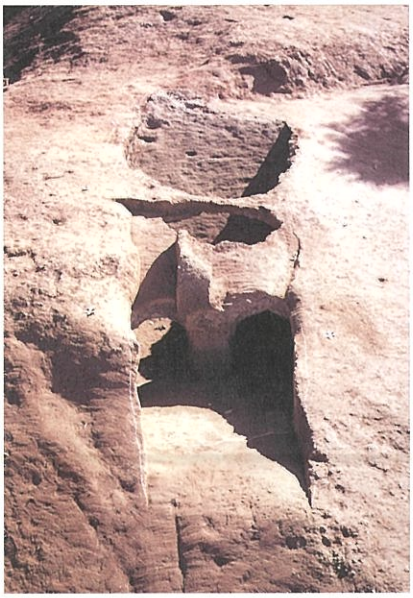


写真４　１号窯全体　西から

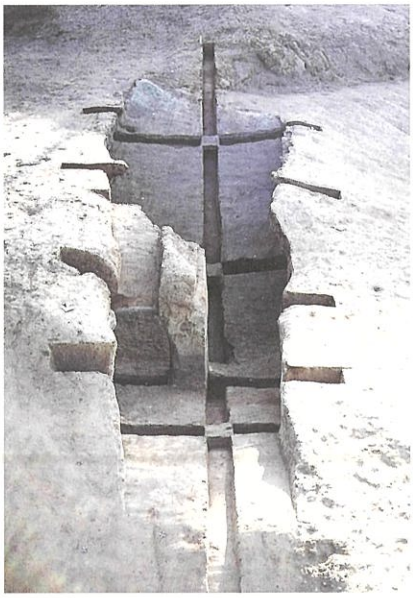


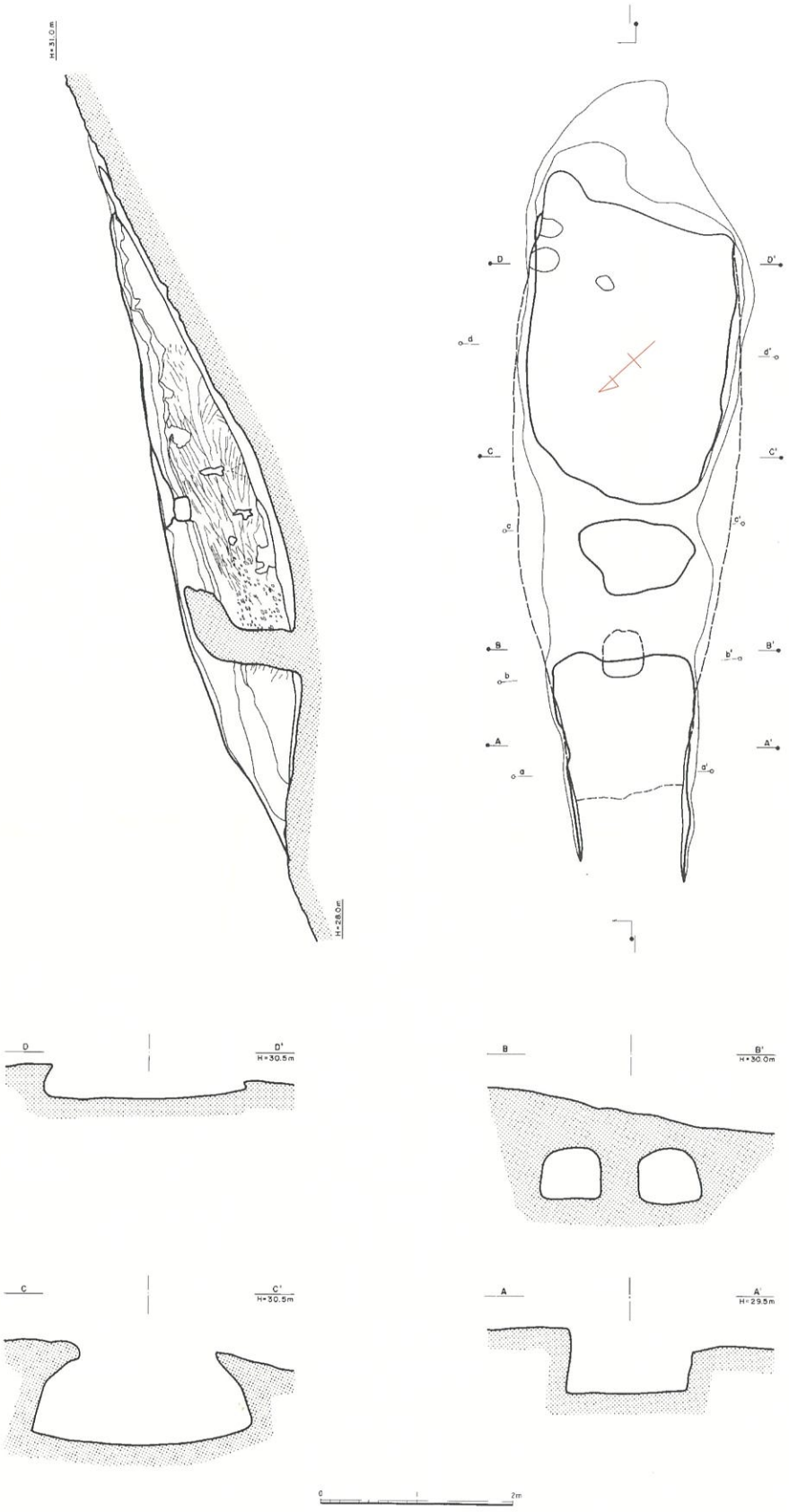
写真５　１号窯断割全体　西から

写真６　１号窯焼成室埋土（ｄ－ｄ′）　西から

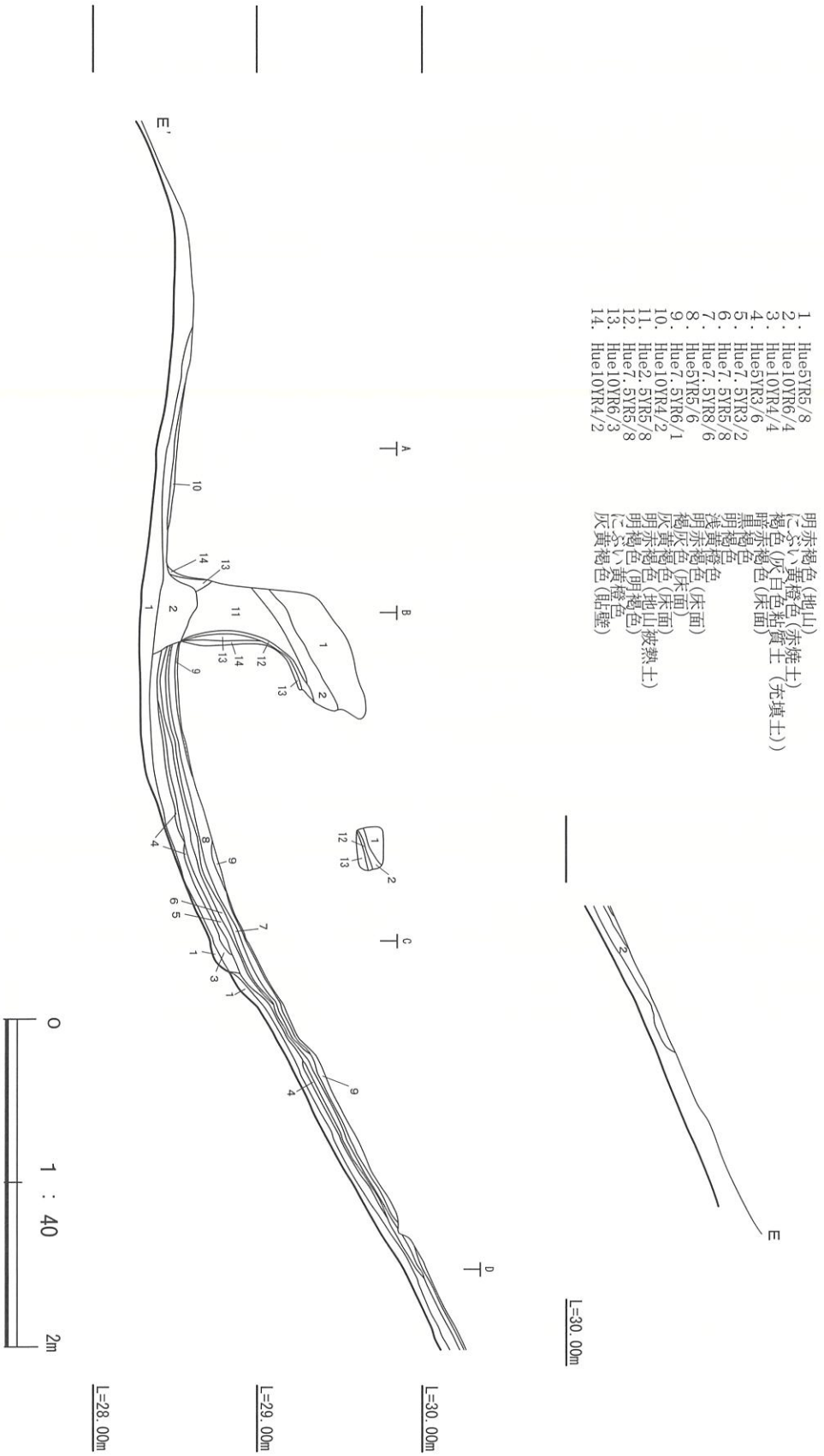
写真７　１号窯焼成室埋土（ｂ－ｂ′）　西から

写真８　１号窯焼成室北壁　南西から

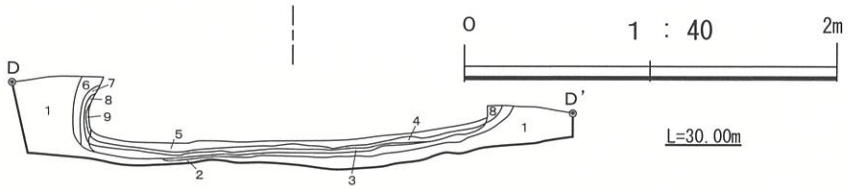
写真９　１号窯分焔柱断割（Ｂ－Ｂ′）　西から



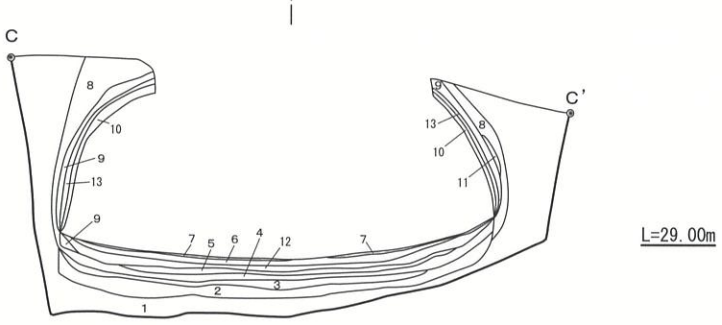
第７図　１号窯窯体実測図



第８図　１号窯断割セクション図１

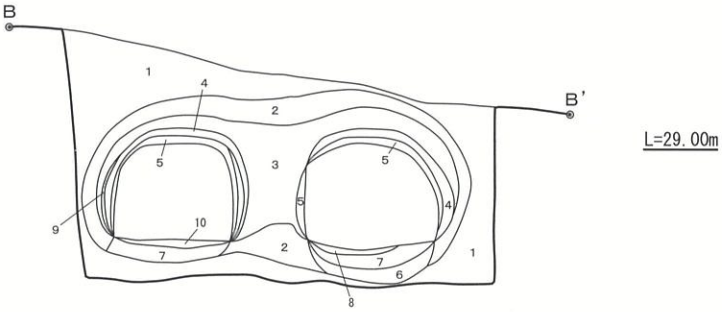


1．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山）
2．Hue10YR6/4　にぶい黄橙色（赤焼土）
3．Hue7.5YR3/2　黒褐色
4．Hue7.5YR8/6　浅黄橙色
5．Hue7.5YR6/1　褐灰色（床面）
6．Hue2.5YR4/6　オリーブ褐色（地山被熱土）
7．Hue7.5YR8/6　浅黄橙色（壁裏）
8．Hue7.5YR8/1　灰白色（壁裏）
9．Hue7.5YR5/1　褐灰色（貼壁）



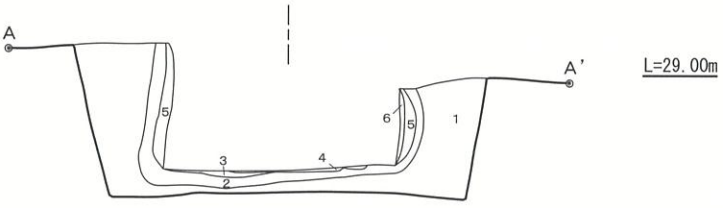
1．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山）
2．Hue10YR4/4　褐色（灰白色充填土（炭混り））
3．Hue5YR3/6　暗赤褐色（茶色の焼けた土・床面）
4．Hue7.5YR3/2　黒褐色（炭層（黒灰））
5．Hue7.5YR5/8　明褐色（黄）
6．Hue5YR5/6　明赤褐色（橙（固く締まっている・床面））
7．Hue7.5YR6/1　褐灰色（床面）
8．Hue10R4/6　赤色（地山被熱）
9．Hue7.5YR6/4　にぶい黄橙色（黄）
10．Hue10YR5/1　褐灰色（青灰（貼壁））
11．Hue10YR4/4　褐色
12．Hue7.5YR8/6　浅黄褐色（薄茶）
13．Hue7.5YR8/1　灰白色（白）

＊最初の床面をはがした後に新しい床面を張り直している。
また、その上にもう一面床が構築されている。



1．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山）
2．Hue10YR6/4　にぶい黄橙色（地山被熱（壁裏））
3．Hue2.5YR5/8　明赤褐色（地山被熱（壁裏））
4．Hue10YR7/3　にぶい黄橙色（白（壁裏））
5．Hue7.5YR5/3　にぶい褐色（青灰（貼壁））
6．Hue10YR5/3　にぶい黄褐色（灰白（粘質・炭混り））
7．Hue10YR1.7/1　黒色（黒（炭層））
8．Hue10YR4/2　灰黄褐色（床）
9．Hue7.5YR6/6　橙色
10．Hue10YR5/3　にぶい黄褐色（床）

＊３は地山堀り残し部分。
壁裏は赤く焼けているが、分炎柱中央部は黄や白くなっている。
（同じ層とする）



1．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山）
2．Hue10YR6/4　にぶい黄橙色（赤焼土）
3．Hue10YR6/6　明黄褐色
4．Hue10YR4/2　灰黄褐色（床）
5．Hue5YR6/8　橙色
6．Hue7.5YR7/3　にぶい橙色

第９図　１号窯断割セクション図２

２号窯

２号窯は、３基の窯体の真中に位置し、全体の残存状態は良好な窯体である。焚口・燃焼室・分焔柱・焼成室と煙道部の床面が一部残っていた。天井も一部存在するがほとんどが崩落している。

窯体の主軸方向はＳ－52.5°－Ｅで、残存長は11.5mである。焚口付近の標高は28.6mで窯体高は3.0m（標高31.6m）である。

燃焼室は焚口から分焔柱に向かって徐々に開くように広がり、焚口入口の幅が1.1mで分焔柱手前の幅は1.6mである。床面の傾斜は-10°で緩やかに下っている。床面の被熱部分も合わせた深さは最大で32cmである。側壁は床面から直立するように立ち上がり、高さが60cmで天井は崩落している。

分焔柱は１号窯同様に地山を掘り残して表面に粘土を施している。分焔柱左側の天井は残存するが右側の天井は崩落していた。分焔柱の焼成室側は、床面を貼り直した際に大きく修築した痕が見受けられる。通焔孔の両方ともに全体を粘土で補修している。分焔柱の平面形は楕円で、窯と同じ南東方向に楕円であった。大きさは縦軸方向に74cm、これと直交する幅が64cmである。通焔孔は左側が88cmで高さが84cm、右側は76cmで高さは天井が崩落していて不明である。

通焔孔左側の燃焼室と焼成室の境目床面にはダンパーが作られていた。ダンパーの機能については、窯内に効率よく火を送るための風を調節する説と同様の役割をするものだと考えられる。ここでは床面に焼台を２段に重ねたものを６列並べ、その周りを粘土で固めている。その残存状態は良好で、高さは15cmあり、床面と接触する部分の幅は40cmであった。このダンパーは分焔柱を貼り土で一度修復した横に設置されていた。

焼成室は全長が6.5mで高さが2.3mである。床面の平面形は分焔部の所から緩やかに広がる。床面の最大幅は分焔柱より1.5m上がった所で2.8m、そこから徐々に狭くなる。床面の傾斜は、ほとんど屈折しない弧を描く形である。焼成室上部の煙道部に近い床面には、ナデではなく押し当てた手の跡が付着し、そこには焼台が並べられた形跡は無かった。焼成室の幅が一番広い部分から入口にかけて、所々抜けて無くなってはいたが、焼台がそのままの位置に多く残されていた。

また分焔柱中心点から3m上がった所の床面下では、大きく掘り込まれて改修した痕が見受けられる。一次面の床面を20cm掘り込んで二次面を築き、その上に最終床面を形成している。灰白色粘土層を敷いているが床面を貼る時ほどの丁寧さはなく、いくつかの塊のブロックで床下を整えているように見える。床下を何故このように深く掘り込まれているのかは不明である。

煙道部の残りは悪く、床面のほんの一部被熱した部分が薄く残っているだけである。焼成室と煙道部の境目部分から大きく削平されているため詳細は不明である。床面は赤く焼け締まっている程度でその他のこのとは確認出来なかった。

写真10　２号窯全体　西から

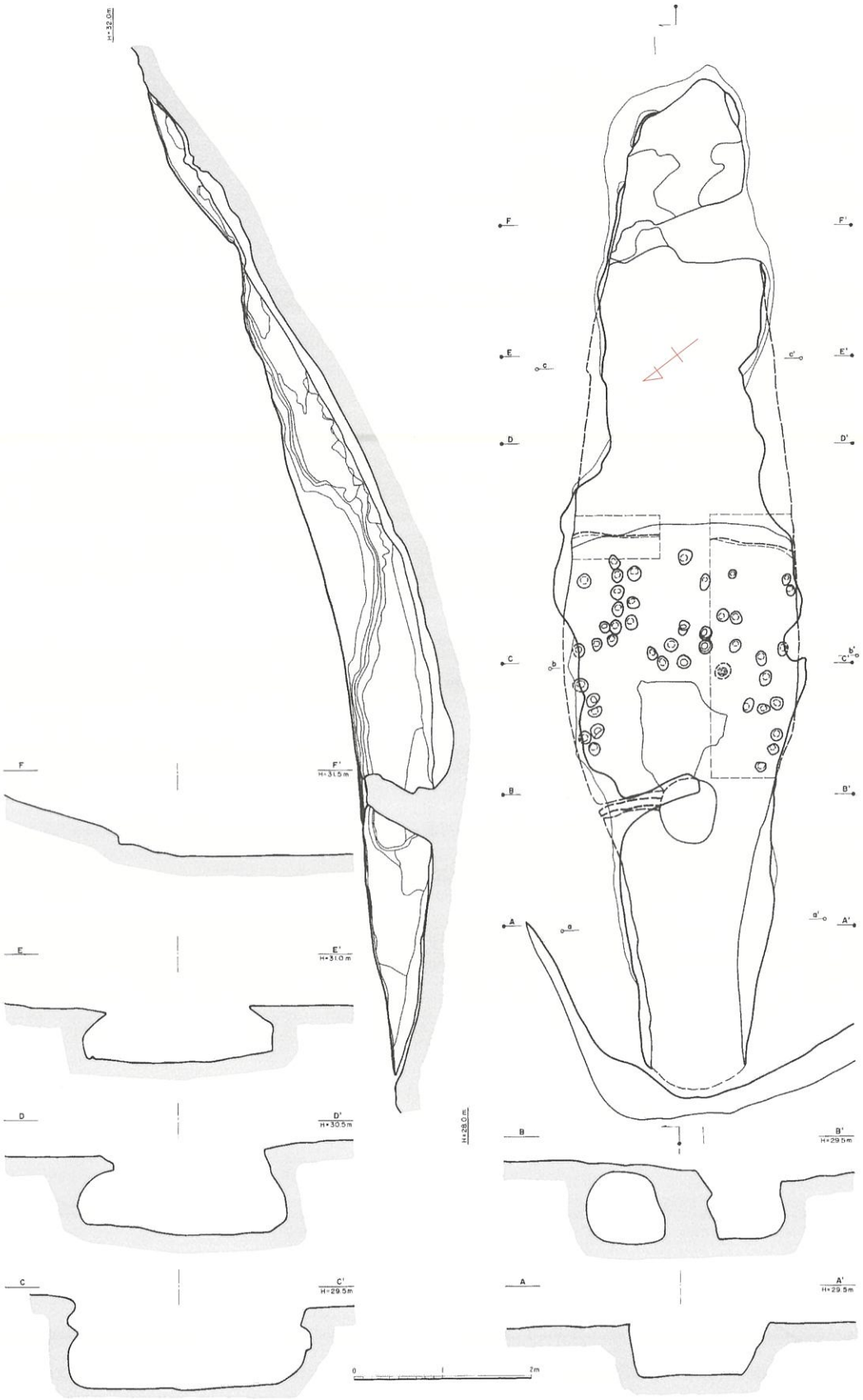
写真11　２号窯断割全体　西から

写真12　２号窯焼成室埋土（ｂ－ｂ′）　西から

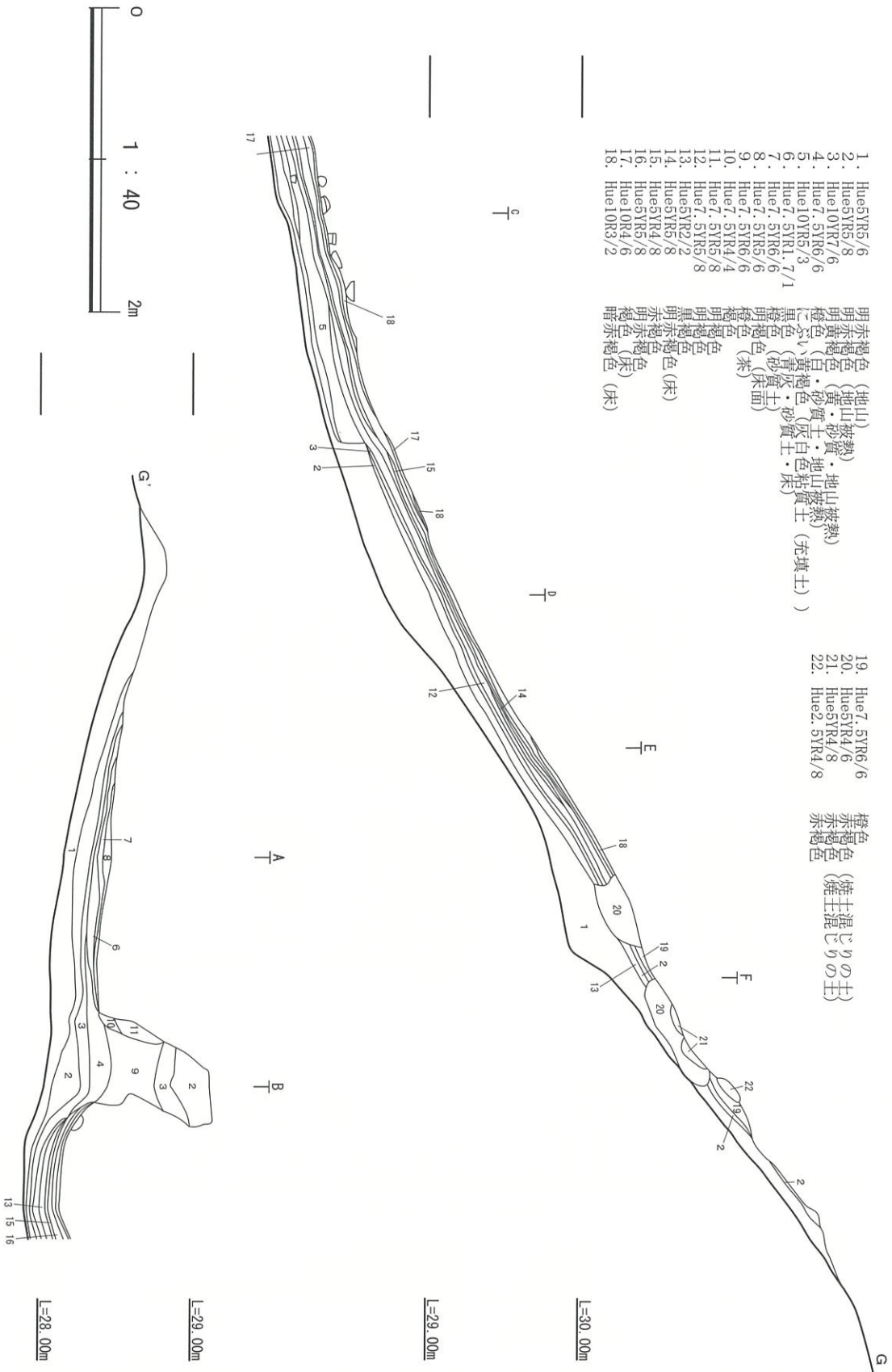
写真13　２号窯焼成室遺物出土状況　西から

写真14　２号窯煙道部付近の床面状況　西から

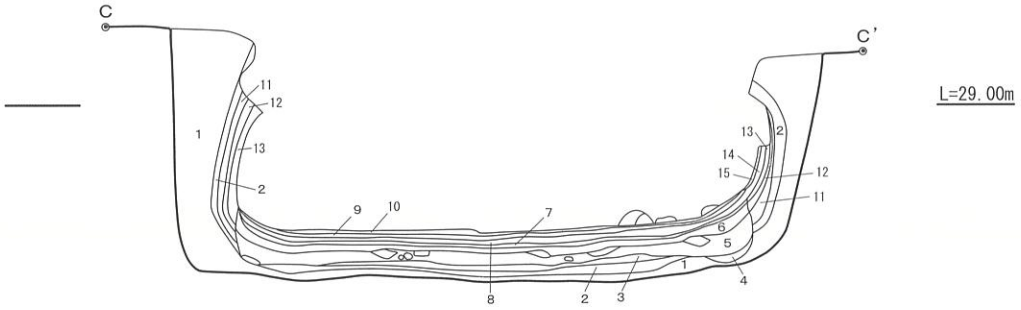
写真15　２号窯分焔柱のダンパー部分　西から



第10図　２号窯窯体実測図

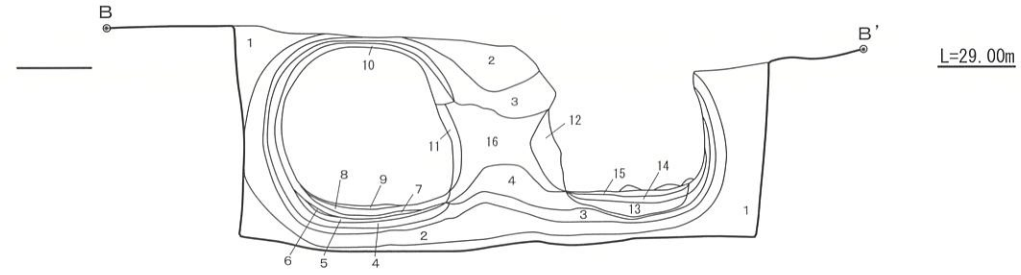


第11図　２号窯断割セクション図１



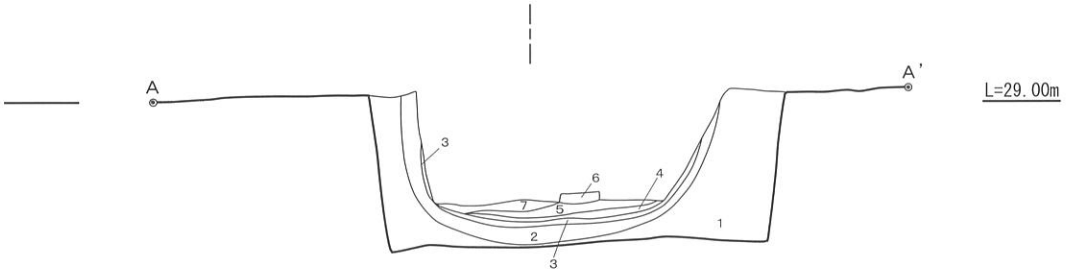
1．Hue5YR5/6　明赤褐色（地山）
2．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山被熱（赤））
3．Hue10YR7/6　明黄褐色（地山被熱（黄）伏碗有）
4．Hue7.5YR5/6　明褐色（天井の崩れ落ちたもの？）
5．Hue10YR5/3　にぶい黄褐色（灰白粘質土（充填土））
6．Hue5YR2/2　黒褐色（黒（灰・床面））
7．Hue5YR4/8　赤褐色（黄）
8．Hue5YR5/8　明赤褐色（橙）
9．Hue10R4/6　赤色（赤（床面））
10．Hue10R3/2　暗赤褐色（青（床面））
11．Hue10YR6/6　明黄褐色（黄）
12．Hue10YR6/4　にぶい黄橙色（白）
13．Hue10YR4/3　にぶい黄褐色（壁）
14．Hue10YR3/3　明褐色（黄）
15．Hue7.5YR3/3　暗褐色（壁（２回目の壁））

＊１度床をはがし張り直している。



1．Hue5YR5/6　明赤褐色
2．Hue5YR5/8　明赤褐色
3．Hue10YR7/6　明黄褐色
4．Hue7.5YR6/6　橙色
5．Hue10YR4/3　にぶい黄褐色
6．Hue7.5YR3/4　暗褐色
7．Hue10YR2/2　黒褐色
8．Hue7.5YR5/6　明褐色
9．Hue5YR5/6　明赤褐色
10．Hue5YR4/1　褐灰色
11．Hue7.5YR5/6　明赤褐色
12．Hue5YR8/4　淡橙色
13．Hue10YR3/1
14．Hue10YR5/4
15．Hue5YR8/4　淡橙色
16．Hue7.5YR6/6　橙色

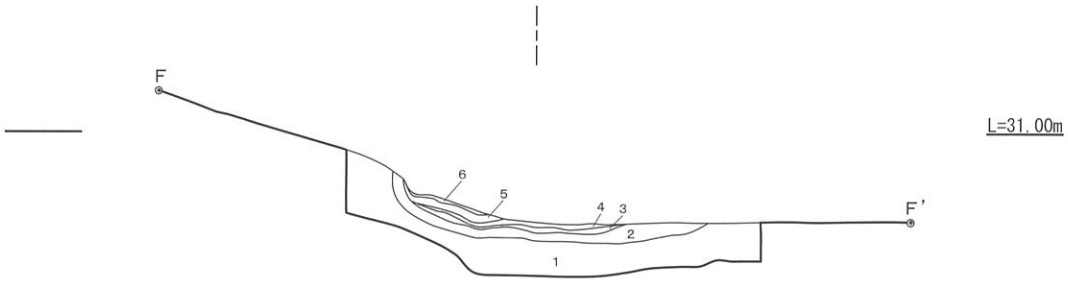
＊貼壁が最終床面の下に入り込んでいる。
床は２面みられる。
分炎柱は掘り残して造られ、その周りに貼壁をしている。



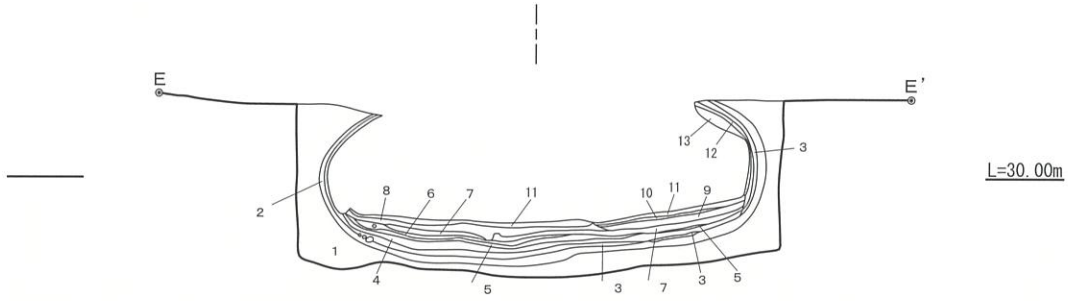
1．Hue5YR5/6　明赤褐色（地山）
2．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山被熱）
3．Hue10YR7/6　明黄褐色（砂質土・地山被熱）
4．Hue7.5YR1.7/1　黒色（青灰・砂質土・床）
5．Hue7.5YR6/6　橙色（砂質土）
6．Hue10YR4/3　にぶい黄褐色
7．Hue7.5YR5/6　明褐色（床面）

0　1：40　2m

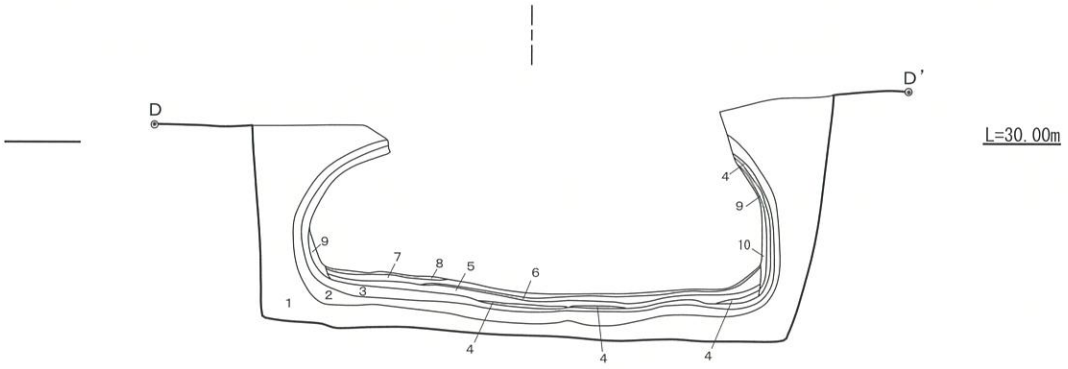
第12図　２号窯断割セクション図２



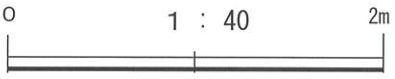
1．Hue5YR5/6　明赤褐色（地山）
2．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山被熱）
3．Hue5YR2/2　黒褐色
4．Hue7.5YR6/6　橙色
5．Hue5YR5/6　明赤褐色
6．Hue5YR2/4　極暗赤褐色



1．Hue5YR5/6　明赤褐色（地山）
2．Hue5YR5/8　明赤褐色（地山被熱）
3．Hue10YR7/6　明黄褐色
4．Hue7.5YR5/8　明褐色
5．Hue5YR5/8　明赤褐色（床）
6．Hue5YR2/2　黒褐色（黒灰）
7．Hue5YR4/8　赤褐色
8．Hue5YR5/8　明赤褐色
9．Hue5YR4/6　赤褐色
10．Hue10R4/6　褐色
11．Hue10R3/2　明赤褐色（床）
12．Hue7.5YR8/1　灰白色
13．Hue10YR5/1　褐灰色（貼壁）



1．Hue5YR5/6　明赤褐色
2．Hue5YR5/8　明赤褐色
3．Hue10YR7/6　明黄褐色
4．Hue7.5YR5/8　明褐色
5．Hue5YR2/2　黒褐色
6．Hue5YR4/8　赤褐色
7．Hue5YR5/8　明赤褐色
8．Hue10Y4/1　灰色
9．Hue7.5YR8/1　灰白色
10．Hue10YR5/1　褐灰色（壁）



第13図　２号窯断割セクション図３

3号窯

3号窯は、3基の内一番南に位置し、全体の残存状態は良好で、前庭部に唯一3つの作業用と思われる土坑（SK）を伴う窯体である。焚口・燃焼室・分焔柱・焼成室の半ばまで残存し、その上部は1号窯同様に土取りにより滅失していた。天井は、分焔柱付近以外の所は崩落し消滅している。

窯体の主軸方向は、S－70°－Eで残存長は7.95mである。焚口付近の標高は28.65mで、窯体高は2.35m（標高31.0m）である。

燃焼室は焚口から奥へ直線的に開き幅に大きな変化は見られない。焚口入口の幅は1.2mで分焔柱手前では幅が1.36mである。床面の傾斜は入口で－12°、入口から分焔柱側へ1m行った所で22.5°に傾斜が変化している。他の窯体で床面下が直線的で緩やかであったのに対し、3号窯の床面はやや急な作りになっている。側壁は床面から直立するように立ち上がっている。

分焔柱は、後に大きく改修され、焼成室側の分焔柱は深くはないが削り採られて壁を貼り、それに伴って両通焔孔の側壁・天井も貼り壁で補修されている。分焔柱の平面形はほぼ楕円であるが、窯内センターラインを中心として45°傾いた窯体に直交しない形である。最大幅は1mで最小幅は80cmである。通焔孔の左幅は80cmで高さが80cmである。右幅は85cmで高さが90cmである。3基の中で一番大きな通焔孔である。燃焼室までの床面は直線的であったが、分焔柱部分に差し掛かると屈曲し、断面図B－B′部分では幅が1.8mに広がっている。

焼成室は分焔柱中心点からセンターライン上に5m残存し、高さが2.4mである。床面の深さは6cmである。床面の平面形は分焔柱手前付近から緩やかに広がり、最大幅は分焔柱中心点から2m上がった所で2.8mである。床面の残存状態は悪く、剥離した部分が多く見られる。特に中央部が激しく痛み露出した被熱層をさらに掘り下げている。床面傾斜は分焔柱直後から1.5m付近までは平坦であるが、そこから弧を描くように傾斜している。

また、焼成室下半分には焼台がきれいに整然と並べられた状態で、1列あたりの個数は12個であった。入口付近の焼台の中には、小皿だけを乗せた焼台も一部見受けられた。また、焼台の上には遺物も多く残されていた。床面は改修されており、一次面を取り除いた後に二次面を築いている。他の2基とは異なり焼成室の上半分が大きく改修されており、下半分には改修痕が見られなかった。床面は少なくとも2回以上築かれたと考えられる。

側壁は燃焼室の時とは違い丸く立ち上がる。最大で1.3mの高さまで残る所がある。また、天井の崩落は焼成室内に遺物が存在することから、焼成中に崩落したものと思われる。床面下には排水溝などの施設は見受けられなかった。

写真16　３号窯全体　西から

写真17　３号窯断割全体　西から

写真18　３号窯焼成室埋土（ｃ－ｃ′）　西から

写真19　３号窯分焔柱部分（ｂ－ｂ′）　西から

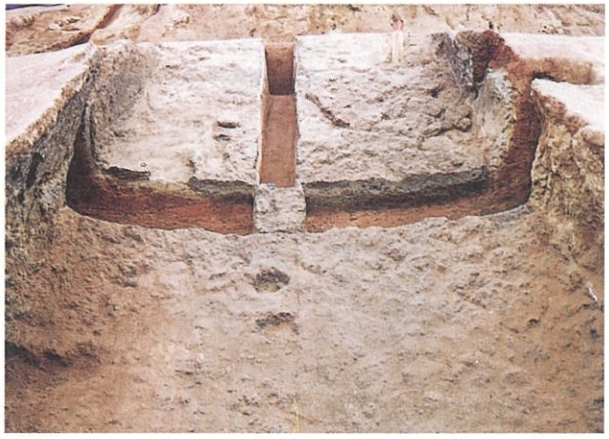
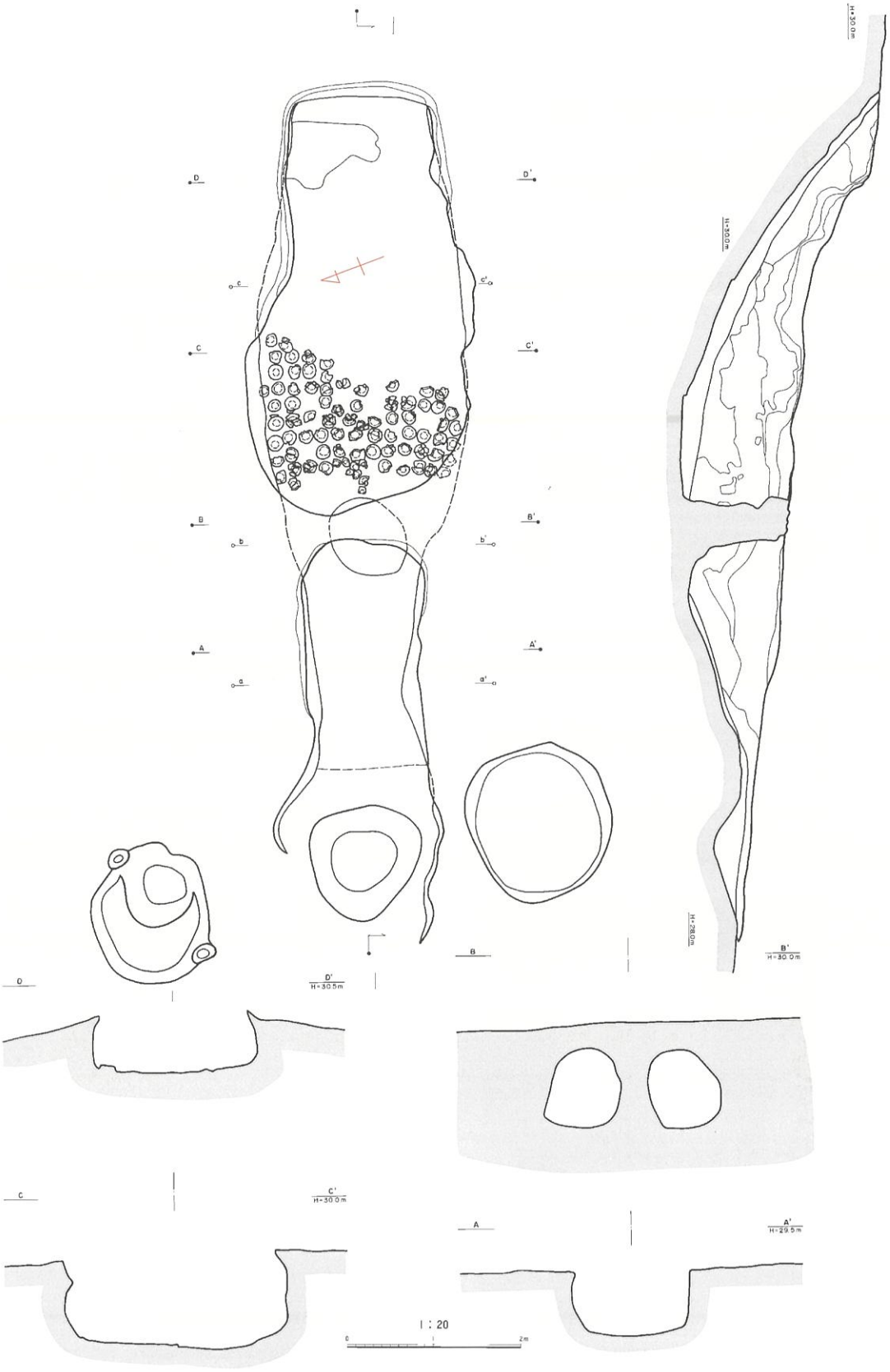
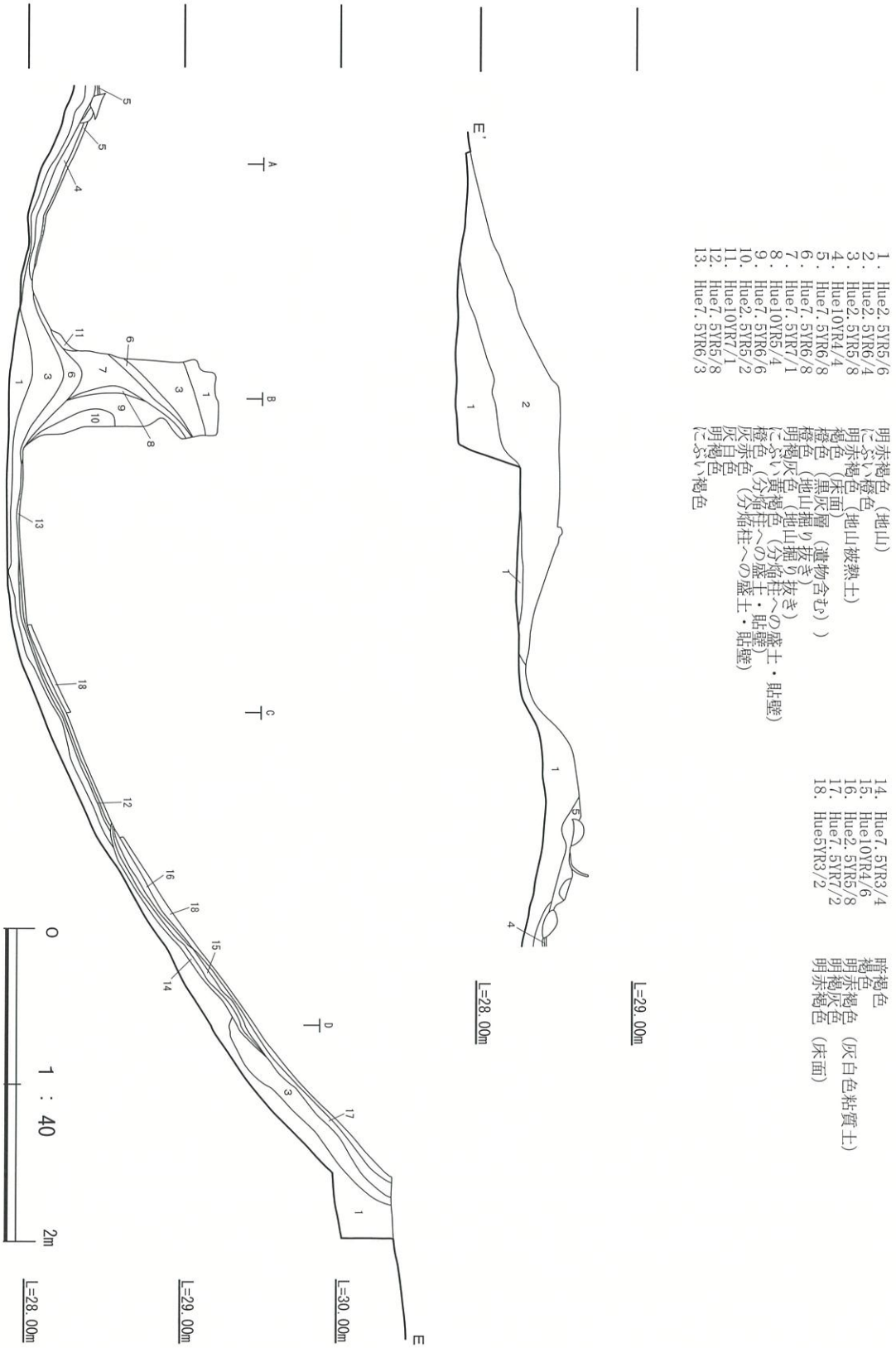


写真20　３号窯焼成室断割（Ｄ－Ｄ′）　西から

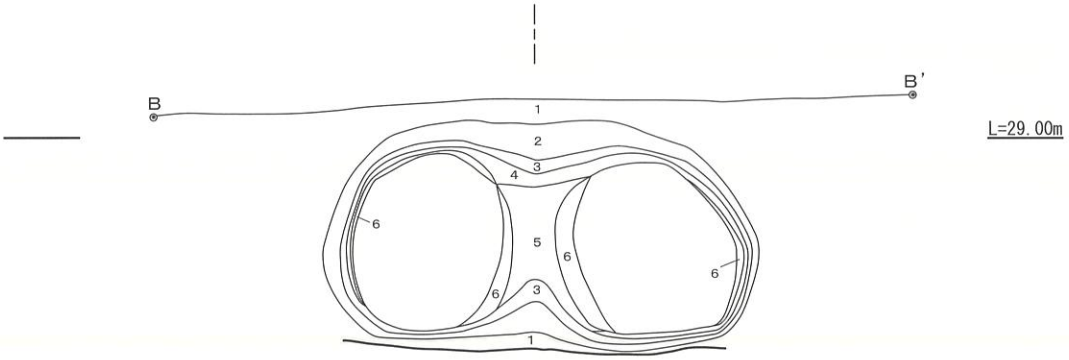
写真21　３号窯焼成室遺物出土状況　南から



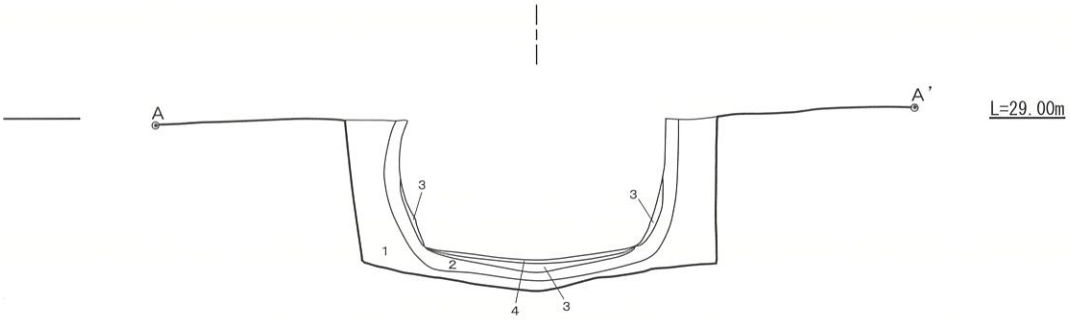
第14図　3号窯窯体実測図



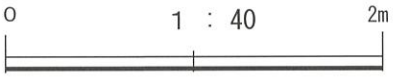
第15図　3号窯断割セクション図1



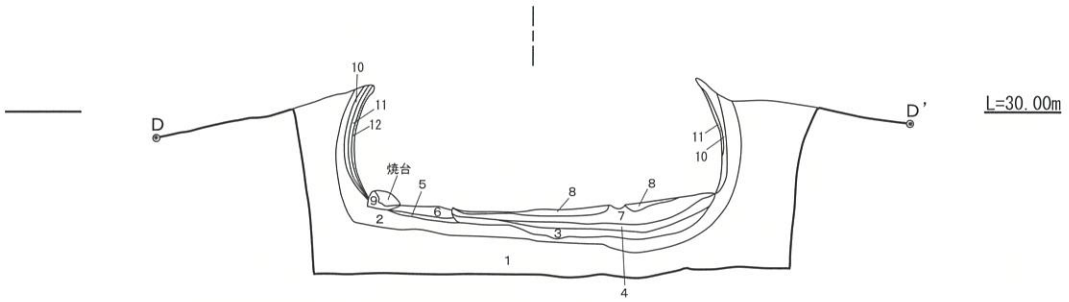
1．Hue2.5YR5/6　　明赤褐色（地山・砂質土）
2．Hue2.5YR5/8　　明赤褐色（赤焼土）
3．Hue7.5YR6/8　　橙色（地山掘り抜き）
4．Hue7.5YR7/1　　明褐灰色（地山掘り抜き）
5．Hue7.5YR6/6　　橙色（分焔柱への盛土）
6．Hue7.5YR2/1　　黒色（貼壁）



1．Hue2.5YR5/6　　明赤褐色（地山）
2．Hue2.5YR5/8　　明赤褐色（赤焼土）
3．Hue10YR4/4　　褐色（床面）
4．Hue7.5YR6/8　　橙色（黒灰層（遺物含む））

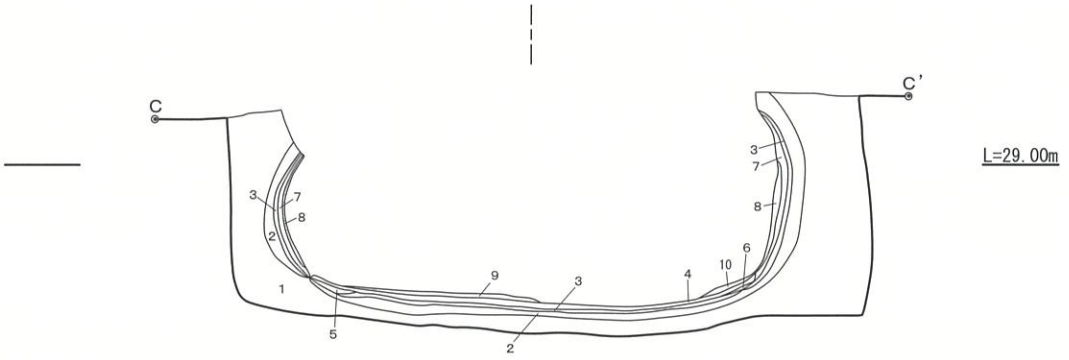


第16図　３号窯断割セクション図２

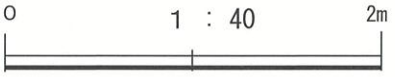


1．Hue2.5YR5/6　明赤褐色(地山)
2．Hue2.5YR5/8　明赤褐色(赤焼土)
3．Hue7.5YR3/4　明褐色(炭混じりの土・４の方が多く含む)
4．Hue10YR4/6　褐色(炭混じりの土・４の方が多く含む)
5．Hue10YR6/6　明黄褐色
6．Hue10YR7/4　にぶい黄橙色
7．Hue7.5YR7/2　明褐灰色（灰白色粘質土）
8．Hue5YR3/2　暗赤褐色（床面）
9．Hue7.5YR4/6　褐色（３によく似た土だが、炭はみられない）
10．Hue10YR7/6　明黄褐色
11．Hue10YR7/2　にぶい黄橙色
12．Hue10YR5/2　灰黄褐色

＊床面を一度貼り直している



1．Hue2.5YR5/6　明赤褐色（地山・砂質土）
2．Hue2.5YR5/8　明赤褐色（赤焼土・砂質土）
3．Hue7.5YR5/8　明褐色（砂質土）
4．Hue7.5YR6/3　にぶい褐色（灰白色粘質土）
5．Hue7.5YR4/3　褐色
6．Hue10YR4/2　（炭層）
7．Hue7.5YR8/1　灰白色
8．Hue7.5YR2/1　黒色（壁）
9．Hue5YR3/2　暗赤褐色（床面）



第17図　３号窯断割セクション図３

第２節　前庭部と灰原について

今回調査した３基の窯体の中で前庭部を伴う窯体は３号窯のみであった。斜面の上方向及び、１号窯・２号窯焚口の入口直後から灰原があったと思われる部分は後に削平されたため、１・２号窯の前庭部を確認することは出来なかった。

３号窯の前庭部は、焚口から直線上に少し下りた所に一つと、その両脇に一つずつの土坑で合計３基の遺構を検出した。焚口直線上の遺構の略称を、SK03とし、窯左側（北側）を、SK01、窯右側（南側）を、SK02とした。なお、SKは土坑をさす。

SK01の遺構は、長径が1.63m、短径が1.30m、深さを30cmとする楕円形の遺構である。埋土は炭化物混じりの土で、遺物を多く含んでいる。上層からは比較的形のある遺物が出土している。下層からは細かい破片の方が多く出土した。

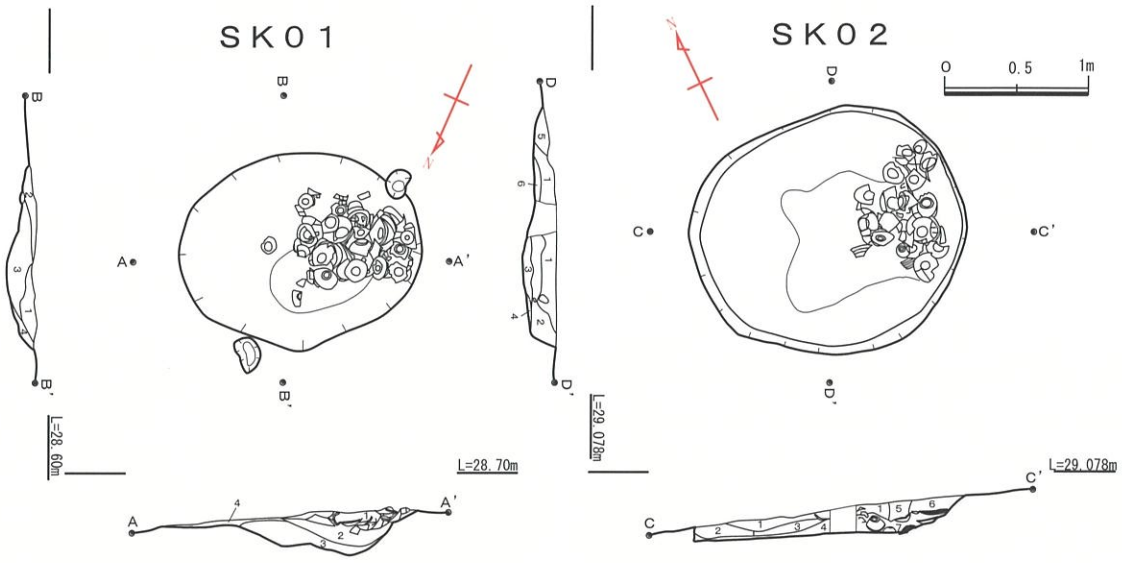
SK02の遺構は、長径が1.85m、短径が1.60m、深さを2.2cmとする楕円形の遺構である。埋土はSK01同様に炭化物混じりの土で遺物を多く含み、上層には比較的形のある遺物が出土している。下層には細かい破片の遺物を多く含む。

SK03の遺構は、焚口から30cm下った直下に作られた長径が1.35m、短径が1.20m、深さを30cmとする楕円形の遺構である。埋土は他の遺構と同様に炭化物混じりの土で、遺物を多く含む。上層からも他と同じように比較的形のある遺物が出土し、下層からは細かい破片の方が多く出土している。

灰原と確認できたのは１号窯と３号窯の２ヶ所であるが、ほとんどが消滅していて残りが悪く２号窯の灰原と思われる範囲を確認することは出来なかった。１号窯の灰原は焚口入口から約5m下の斜面に位置し、範囲は直径5mほどの茶褐色灰層で、厚さは薄く10～20cmで遺物を多く含んでいる。位置は１号窯のセンターラインからまっすぐ下った所で、灰原の上には耕作土は堆積しておらず、ほぼ現状の表土層であった。３号窯の灰原は、焚口から10mほど離れた下の斜面に位置し、厚みと範囲はどちらも１号窯と同様で遺物も多く含んでいる。なお、灰原は、窯の主軸に対して左側に寄っている。

写真22　１号窯灰原全体　西から

写真23　３号窯灰原全体　西から



A
1．Hue2.5YR6/6　橙色　(砂質・粘土層)
2．Hue5Y2/1　黒色　(遺物含む)
3．Hue7.5YR5/6　明褐色
4．Hue5BG4/1　暗青灰色

B
1．Hue5Y2/1　黒色　(遺物含む)
2．Hue2.5YR6/6　橙色　(砂質)
3．Hue7.5YR5/6　明褐色
4．Hue2.5YR5/8　明赤褐色　(地山)

C
1．Hue5Y2/1　黒色　(殆ど灰のみ)
2．Hue2.5Y3/3　暗オリーブ褐色　(壁片(細)含む・上坑の意図不明・遺物多く含む)
3．Hue2.5Y3/2　黒褐色　(遺物多く含む)
4．Hue10YR3/1　黒褐色　(遺物多く含む)
5．Hue2.5Y3/2　黒褐色
6．Hue2.5Y4/2　暗灰黄色
7．Hue7.5YR2/1　黒色　(遺物多く含む)
・遺物は斜面上側にのみ出土

D
1．Hue5Y2/1　黒色
2．Hue2.5Y3/2　黒褐色
3．Hue2.5Y3/1　黒褐色
4．Hue2.5Y2/1　黒色
5．Hue2.5Y2/1
6．Hue7.5YR7/1

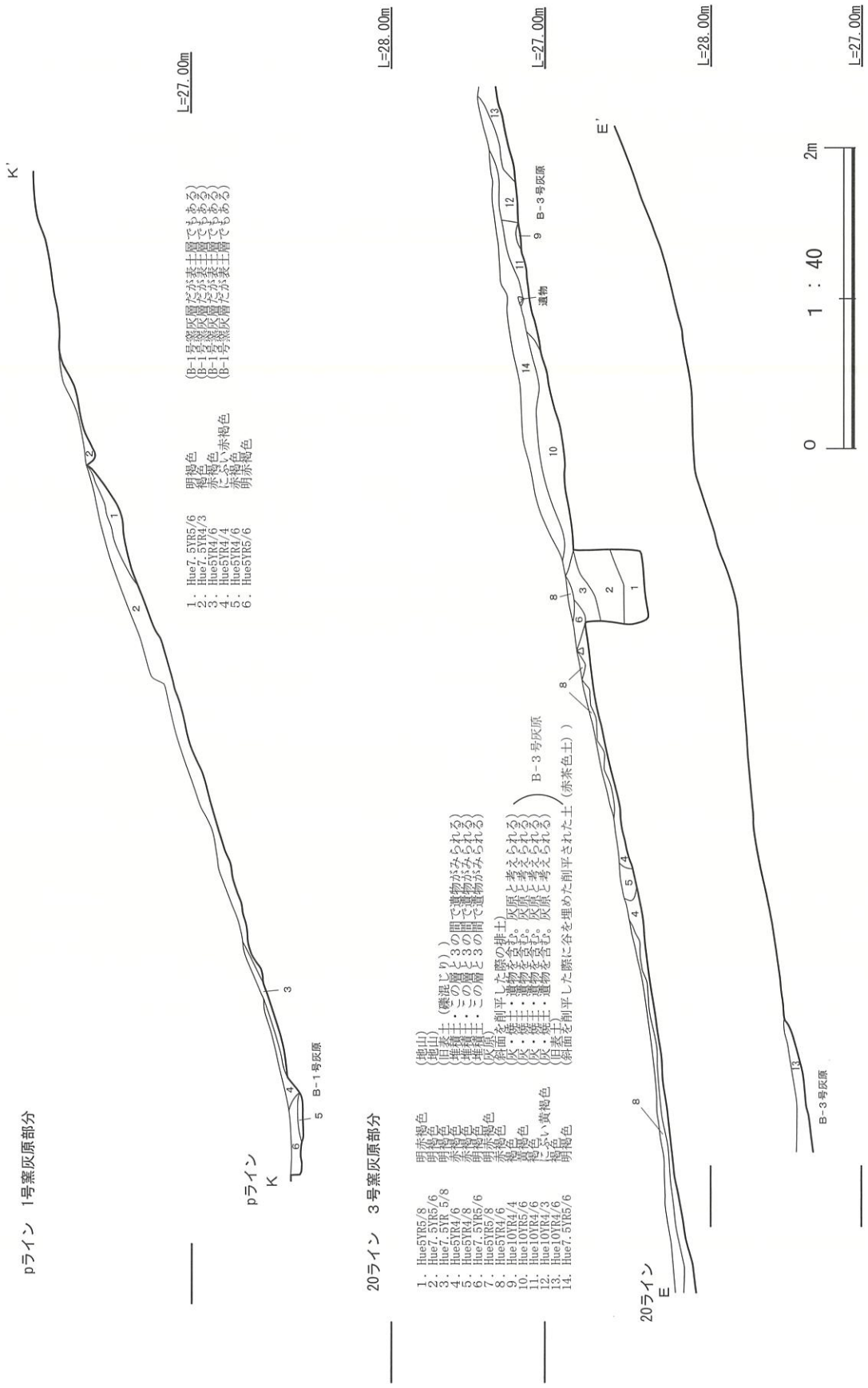
第18図　ＳＫ01・ＳＫ02　平面図・セクション図

写真24　ＳＫ01・ＳＫ02・ＳＫ03全体　西から

写真25　ＳＫ01　西から

写真26　ＳＫ02　南から

写真27　ＳＫ03（前庭部）　北から



第19図　灰原セクション図

第3章　遺　物

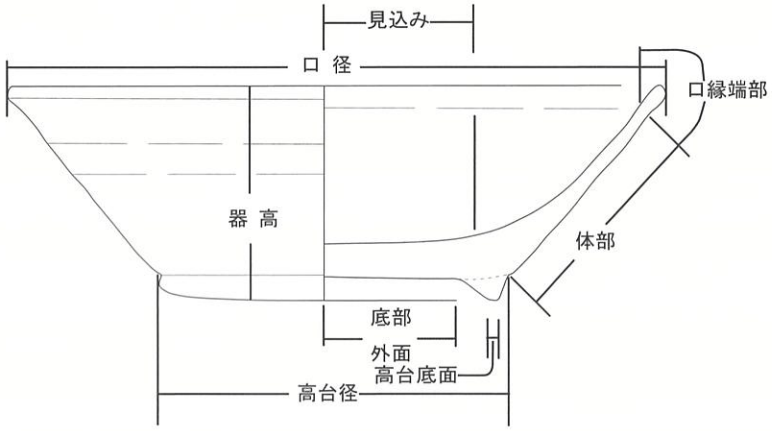
3号窯遺物出土状況

第１節　器形分類

今回の遺跡から出土した遺物は、容量36リットルのコンテナで54箱である。その遺物の多くは、碗や皿といった器種がほとんどで、その他に鉢・壺・土師質埵がわずかに出土している。これら以外に窯道具である焼台が加わる。また、主に出土した遺物の碗類と皿類は、中世に生産された無釉陶器である。

この出土遺物の個体数については、碗・皿ともに底部が1/2以上残存するものを１個体と数えたが、碗については一部例外も存在する。それ以外の遺物については、出土した破片の状況からみて１個体と判別可能なものを数えることにした。以下に記述する個体数は、すべてこの方式を用いて分類した。総個体数は2028点で、そのうち碗は1338点出土し、全体の約66%で記録データ化出来たものが528点あった。皿は610点出土し、全体の約30%で、記録データ化出来たものは278点であった。

また、出土した遺物（碗や皿･鉢）の部位説明は下記の第20図に従って行うことにする。



第20図　部位等名称図

碗と皿の器形分類については共通する形態が多く、体部と口縁端部をほぼ共通形態の分類とした。体部については、碗類と皿類のＡからＤ類までは共通の分類ではあるが、皿類については分類を１つ多く加えた。皿類はその他に底部の形態も含めて下記のように分類した。

【体部】

碗・皿類　（共通部分）

Ａ類　体部から口縁にかけて直線的に立ち上がるもの

Ｂ類　体部から口縁にかけて曲線的に立ち上がるもの

Ｃ類　体部が直線的に立ち上がるが、口縁部付近で外反するもの

Ｄ類　体部が曲線的に立ち上がるが、口縁部付近で外反するもの

Ｅ類　体部がくの字に屈曲するもの（皿類のみ）

【口縁端部】

碗・皿類　（すべて共通）

１類　丸みを帯びたもの

２類　端部の内側の極点が外側の曲点より鈍角になるもの

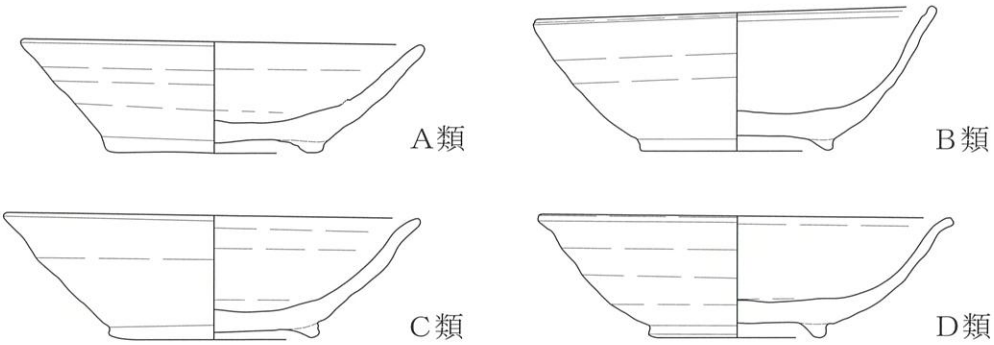
３類　口縁端部の内と外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの

【底部　皿類のみ】

Ⅰ系　高台の無いもの

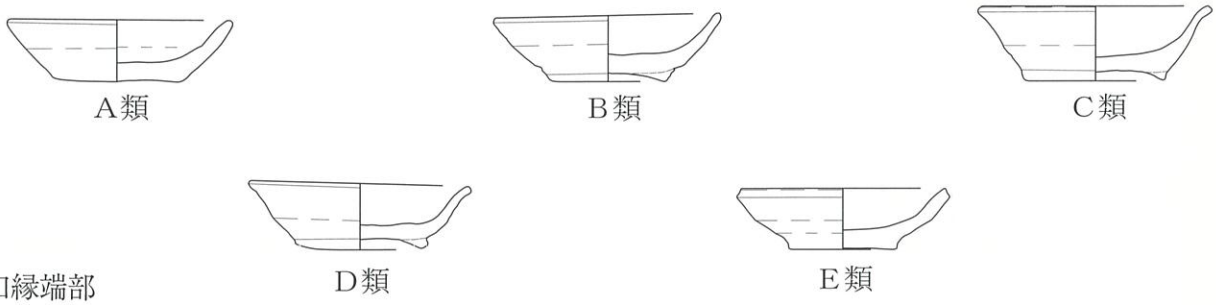
Ⅱ系　底部が円柱状に突出するもの

碗類　体部



口縁端部

皿類　体部



口縁端部

第21図　碗類・皿類器形分類図

鉢は全体で４１点出土し、そのうち記録データ化出来たものは６点であった。鉢についても碗とほぼ同様の体部と口縁端部の形態をもとに下記のように分類した。

【体部】

Ａ類　体部から口縁にかけて曲線的に立ち上がるもの

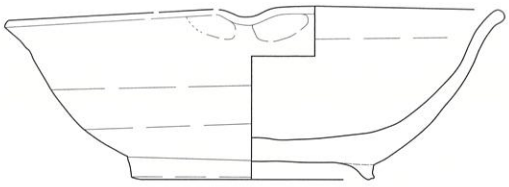
Ｂ類　体部が曲線的に立ち上がるが口縁付近で外反するもの

【口縁端部】

１類　丸みを帯びたもの

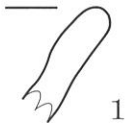
鉢類　体部

Ａ類



Ｂ類

口縁端部



１類

第22図　鉢類器形分類図

出土遺物観察表の凡例

【法量の計測】

口　径　　実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は測定値を記し、（　）で記入した。
測定が困難な個所は「測定不能」とし、測定個所が欠損している場所は「-」とした。

高台径　　実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は測定値を記し、（　）で記入した。
測定が困難な個所は「測定不能」とし、測定個所が欠損している場所は「-」とした。
高台径で高台が欠けているものは底径として数値を入れた。

器　高　　実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は測定値を記し、（　）で記入した。
測定が困難な個所は「測定不能」とし、測定個所が欠損している場所は「-」とした。

【各部位の法量】

高台底面付着痕

高台底面には様々な痕跡が認められているが、ここでは籾痕、砂、センイ痕を観測した。
小皿については高台がないものが出土しているため、その場合のみ「-」を記した。

底面外面　底面外面には様々な痕跡が認められているが、ここでは回転台から切り離す工程で出来た糸切り痕と糸切り後にナデたものなどを観察した。糸切りしたもの、糸切り後に指ナデしてあるもの、指で全面をナデているものとした。

見込み　　内面底部中央のことで、その個所の状態を記した。ロクロで回転させただけで終わっているものを回転ナデ、回転ナデをした後に指で表面をナデているものを横ナデ、釉などがかかっていてわからないものを不明とした。

焼　成　　均一に上手く焼けたものを最良、生焼けのものは不良、それ以外を良とした。

胎　土　　粒子が細かく砂粒が少ないものを最良、やや砂粒の混じるものを良、砂粒を多く含むものを不良とした。

備　考　　相当項目がないか、記入した方がよい点のある場合は適宜記入した。
砂粒付着は胎土に含まれるものではなく、表面に付着していることを示す。

第２節　窯内と灰原などの遺物

１号窯に関する遺物

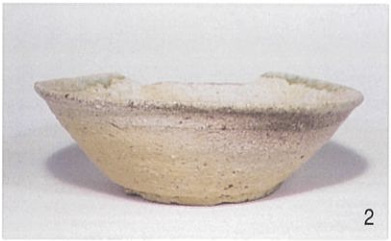
窯内の焼成室・焚口と灰原から出土しているが、窯内から出た遺物は非常に数が少ない。

碗

出土したもののうち、分類可能なものは３点であった。そのうち２点は完形品に近い状態のものであった。

各部の法量は、口径が16.0～15.9cm、高台径が8.5～7.7cm、器高が5.2～5.1cmを測定した。その平均は、口径16.0cm、高台径8.1cm、器高5.1cmである。高台底面の付着痕は籾痕２点、砂が１点である。底面外面の調整痕はすべて糸切り後ナデである。内面底部の見込みは回転ナデ１点、横ナデ２点である。胎土は粘土が均質で最良なもの・砂は混じるが良質なもの・砂粒を多く含んで粗雑なもの（以後は、最良・良・不良で表記する）に分けることにしたが、ここではすべて良であった。焼成についても最高に上手く火が入っている最良なもの、最良にやや劣る良質なもの・火が上手く入らない不良なもの（以後は、最良・良・不良）に分けたが、すべて良であった。

器形分類は、体部Ａ類１点、Ｃ類１点、Ｄ類１点である。口縁端部は１類２点、２類が１点である。



第23図　１号窯碗類遺物実測図　　写真28　１号窯碗類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
1	1号窯 焼成室	16.0	8.1	5.2	砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	A	1	ほぼ完形品
2	1号窯 焼成室	15.9	7.7	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、所々白っぽい、ほぼ完形品
88	1号窯 焚口	16.0	8.5	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	2	重ね焼片付着

第３表　１号窯碗類観察表

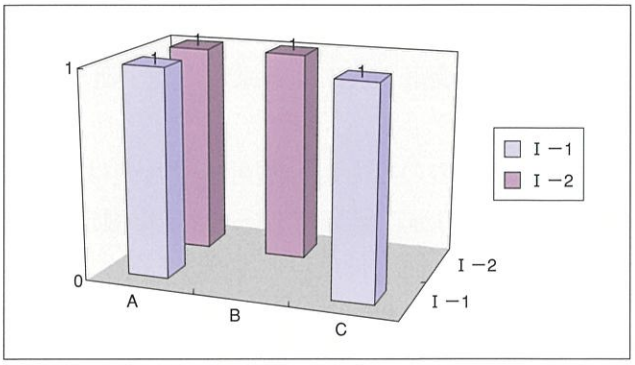
皿

出土したもののうち、分類可能なものは４点であった。各部の法量は、口径が7.4cm、高台径が4.1～3.6cm、器高2.0cmを測定した。その平均は、口径7.4cm、高台径3.9cm、器高2.0cmである。高台底面の付着痕はすべて籾痕である。高台底面の調整痕は糸切り１点、糸切り後ナデ２点である。内面底部の見込みは回転ナデ２点、横ナデ２点である。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台　　口縁端部			
	Ⅰ系		Ⅰ系計	総計
体部	1類	2類		
A類	1	1	2	2
B類	0	1	1	1
C類	1	0	1	1
総計	2	2	4	4

第4表　1号窯碗類器形分類別組合せ表



第24図　1号窯皿類器形分類別組成図

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
603	1号窯 焚口	(8.4)	4.1	(2.3)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	B	2	
604	1号窯 焚口	(7.8)	3.6	(2.1)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	2	
605	1号窯 焚口	(8.2)	3.9	(2.3)	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	
606	1号窯 焚口 灰層	7.4	3.9	2.0	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	重ね焼片付着

第5表　1号窯皿類観察表

灰原

碗

出土したもののうち、分類可能なものは1点であった。各部の法量は、すべて推定値になってしまうが口径（15.6）cm、高台径（9.0）cm、器高（4.6）cmである。高台底面の付着痕は籾・砂痕である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデである。内面底部の見込みは底部中心部分が剥離しているため不明であった。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類で、口縁端部が1類である。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
402	1号窯 灰原	(15.6)	(9.0)	(4.6)	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	底部中心部分ハクリ、重ね焼片付着

第6表　1号窯灰原碗類観察表

皿

出土したもののうち、分類可能なものは1点である。各部の法量は、碗と同様に推定値になってしまうが、口径（9.2）cm、高台径（4.9）cm、器高（2.9）cmである。高台底面の付着痕は籾痕である。底面外面の調整痕はナデである。内面底部の見込みは回転ナデである。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類で、口縁端部が1類で、高台底部はⅡ系である。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
748	1号窯 灰原	(9.2)	(4.9)	(2.9)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	重ね焼片付着

第7表　1号窯灰原皿類観察表

２号窯に関する遺物

焼成室・燃焼室・焚口と灰原から碗・皿と鉢・土師質堝の遺物が出土している。

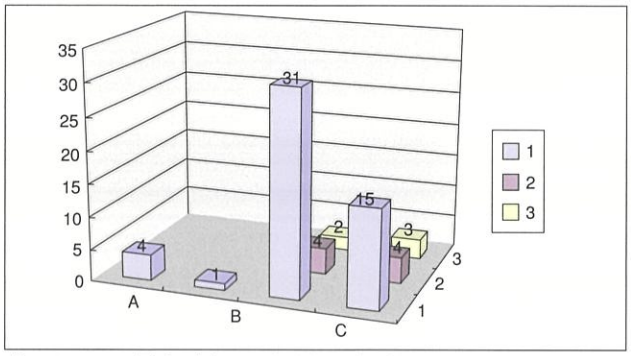
碗

出土したもののうち、分類可能なものは６４点である。各部の法量は、口径が17.8～15.5cm、高台径が9.5cm～7.0cm、器高が5.8～4.4cmを測定した。その平均は、口径16.3cm、高台径8.1cm、器高5.2cmである。高台底面の付着痕は籾痕４７点（73.4%）、籾・砂痕１２点（18.8%）、砂痕１点（1.6%）、高台なし４点（6.2%）である。この高台なしは剥離して無いわけではなく、すべて「付着していた形跡がない」ものである。底面外面の調整痕は糸切り９点（14.1%）、糸切り後ナデ４６点（71.8%）、ナデ９点（14.1%）である。内面底部の見込みは回転ナデ５２点（81.2%）、横ナデ９点（14.1%）、不明３点（4.7%）である。この不明はすべて天場ものである。胎土はすべて良である。焼成は良４９点（76.6%）、不良１５点（23.4%）である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

	口縁端部			
体部	１類	２類	３類	総計
A 類	4(6.3%)	0	0	4(6.3%)
B 類	(1.6%)	0	0	1(1.6%)
C 類	31(48.4%)	(6.3%)	2(3.1%)	37(57.8%)
D 類	15(23.4%)	4(6.3%)	3(4.7%)	22(34.3%)
総 計	51(79.7%)	8(12.5%)	(7.8%)	64(100%)

第８表　２号窯出土碗類器形分類別組合せ表



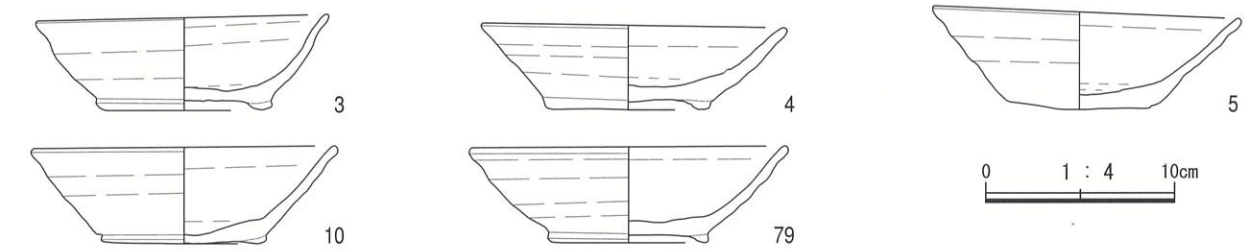
第25図　２号窯碗類器形分類別組成図

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
3	2号窯 焼成室	15.5	9.2	4.9	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
4	2号窯 焼成室	16.2	8.8	4.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	A	1	重ね焼片付着、ほぼ完形品、全体に黒っぽい
5	2号窯 焼成室	16.2	底径7.5	5.1	-	糸切り	回転ナデ	良	良	A	1	重ね焼片付着、高台付着していた形跡なし、ほぼ完形品
6	2号窯 焼成室	(16.3)	7.6	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	天場もの、内面に口縁の破片・全面に釉付着
7	2号窯 焼成室	15.7	8.0	5.1	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	
8	2号窯 焼成室	16.0	7.1	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
9	2号窯 焚口	16.0	8.0	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	ほぼ完形品
10	2号窯 焚口	16.0	8.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	高台に指の痕らしきものあり、ほぼ完形品
89	2号窯 焼成室	(15.2)	8.6	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
90	2号窯 焼成室	(16.2)	8.5	(5.7)	もみ・砂	ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
91	2号窯 焼成室	16.7	7.3	5.4	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	A	1	天場もの、内面全体に釉かかる、高台だけ黒っぽい
92	2号窯 焼成室	16.9	8.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
93	2号窯 焼成室	16.5	8.4	5.6	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	C	2	
94	2号窯 焼成室	17.8	8.8	5.3	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	3	砂粒付着
95	2号窯 焼成室	16.5	9.5	5.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
96	2号窯 焼成室	16.3	(8.7)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	高台ほとんどハクリ
97	2号窯 焼成室	(16.0)	8.1	(5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	C	2	重ね焼片付着
98	2号窯 焼成室	(15.4)	8.2	(5.2)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	砂粒付着
99	2号窯 焼成室	17.2	(8.1)	(5.1)	砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	高台ほとんどハクリ、底部にひび割れ
100	2号窯 焼成室	(16.4)	底径7.6	4.8	-	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	高台付着していた形跡なし、重ね焼片付着
101	2号窯 焼成室	(15.8)	7.2	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着
102	2号窯 焼成室	(16.2)	7.6	(6.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
103	2号窯 焼成室	16.8	7.8	5.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
104	2号窯 焼成室	(16.0)	7.9	(5.8)	もみ	糸切り	回転ナデ	不良	良	C	1	
105	2号窯 焼成室	(16.2)	8.0	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
106	2号窯 焼成室	(15.6)	7.7	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	高台楕円
107	2号窯 焼成室	(15.6)	8.5	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
108	2号窯 焼成室	16.2	底径8.5	5.3	-	糸切り	回転ナデ	良	良	C	3	高台付着していた形跡なし、ゆがむ
109	2号窯 焼成室	16.4	7.9	5.0	もみ	糸切り	不明	良	良	D	1	天場もの、カマクソ・釉・砂粒・重ね焼片付着
110	2号窯 焼成室	(14.8)	8.0	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ

第９表　２号窯碗類観察表　（その１）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
111	2号窯 焼成室	16.0	7.7	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	ゆがむ
112	2号窯 焼成室	15.9	7.6	5.5	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ゆがむ
113	2号窯 焼成室	(16.0)	(8.3)	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部にひび割れ
114	2号窯 焼成室	16.2	7.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
115	2号窯 焼成室	(15.6)	(8.4)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
116	2号窯 焚口	16.2	7.3	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、底部にひび割れ
117	2号窯 焚口	(16.4)	8.0	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	天場もの、重ね焼片付着
118	2号窯 焚口	16.7	9.2	4.8	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	天場もの、カマクソ・釉付着、体部の一部に厚みあり
119	2号窯 焚口	(16.2)	7.5	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	重ね焼片付着
120	2号窯 焚口	16.1	7.7	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	釉たれ、ゆがむ、胎土に0.5cm大の小石含む
121	2号窯 焚口	16.8	8.0	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ
122	2号窯 焚口	15.7	8.0	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	口縁楕円
123	2号窯 焚口	(16.4)	8.4	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	ゆがむ
124	2号窯 焚口	測定不能	7.9	測定不能	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ、体部にひび割れ
125	2号窯 焚口	16.0	(8.0)	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
126	2号窯 焚口	(16.4)	9.1	(4.9)	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
127	2号窯 焚口	(15.8)	7.8	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2	
128	2号窯 焚口	16.3	(7.5)	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
129	2号窯 燃焼室	(16.4)	7.8	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	体部にひび割れ
130	2号窯 焚口	16.5	7.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2	
131	2号窯 焚口	測定不能	8.5	測定不能	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
132	2号窯 焚口	16.4	底径8.5	4.8	-	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	高台付着していた形跡なし、重ね焼片付着
133	2号窯 焚口	16.6	7.5	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着
134	2号窯 燃焼室	16.5	7.8	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ゆがむ
135	2号窯 燃焼室	16.5	8.4	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	体部にひび割れ
136	2号窯 燃焼室	16.0	7.5	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	A	1	全体にスス付着
137	2号窯 焚口	(16.4)	8.2	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
138	2号窯 焚口	15.8	9.1	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	口縁ゆがむ、内面に砂粒付着
139	2号窯 焚口	(16.0)	8.2	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1	重ね焼片・砂粒付着
140	2号窯 焚口	(16.4)	8.2	(4.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着
141	2号窯 焼成室	(15.8)	7.9	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	2	
142	2号窯 燃焼室	(15.2)	7.9	(5.7)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
143	2号窯 燃焼室	(16.2)	8.0	(5.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	体部にひび割れ
144	2号窯 燃焼室	(15.8)	(7.6)	(5.4)	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着

第９表　２号窯碗類観察表　（その２）



第26図　２号窯碗類遺物実測図

写真29　２号窯碗類

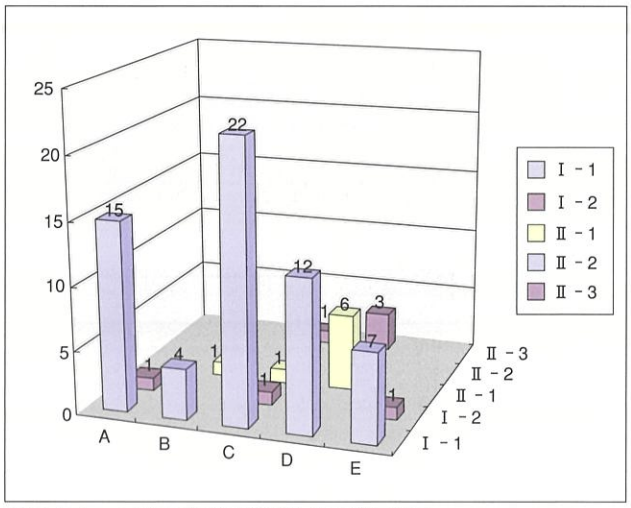
皿

出土したもののうち、分類可能なものは７６点である。各部の法量は、口径が10.0～8.1cm、高台径が5.3～3.6cm、器高が3.1～2.2cmを測定した。その平均は、口径8.7cm、高台径4.4cm、器高2.6cmである。高台底面の付着痕は籾痕１３点（17.1%）、高台無し６３点（82.9%）である。底面外面の調整痕は糸切り１９点（25%）、糸切り後センイ痕３点（4.0%）、糸切り後ナデ４４点（57.9%）、ナデ１０点（13.1%）である。内面底部の見込みは回転ナデ３８点（50%）、横ナデ１９点（25%）、コロシ２点（2.6%）、不明１７点（22.4%）である。胎土は最良1点、良７５点である。焼成は良６３点（82.9%）、不良１３点（17.1%）である。

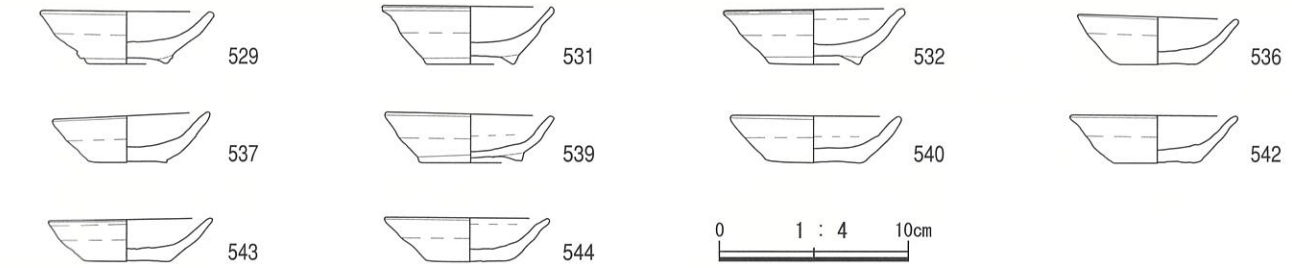
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台　口縁端部							
	Ⅰ系		Ⅰ系計	Ⅱ系			Ⅱ系計	総計
体部	1類	2類		1類	2類	3類		
A類	15(19.7%)	1(1.3%)	16(21.1%)	0	0	0	0	16(21.1%)
B類	4(5.3%)	0	4(5.3%)	1(1.3%)	0	0	1(1.3%)	5(6.6%)
C類	22(28.9%)	1(1.3%)	23(30.1%)	1(1.3%)	1(1.3%)	1(1.3%)	3(3.9%)	26(34.2%)
D類	12(15.8%)	0	12(15.8%)	6(7.9%)	0	3(3.9%)	9(11.8%)	21(27.6%)
E類	7(9.2%)	1(1.3%)	8(10.5%)	0	0	0	0	8(10.5%)
総計	60(78.9%)	3(3.9%)	63(82.8%)	8(10.5%)	1(1.3%)	4(5.3%)	13(17.1%)	76(100%)

第10表　２号窯出土皿類器形分類別組合せ表



第27図　２号窯皿類器形分類別組成図



第28図　２号窯皿類遺物実測図

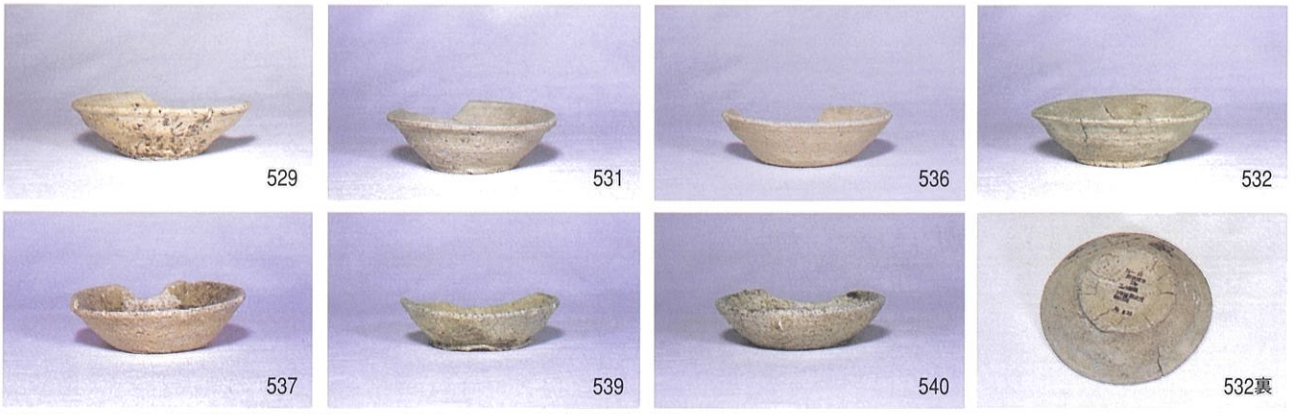


写真30　２号窯皿類（その１）

写真30　2号窯皿類（その2）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
529	2号窯 焼成室	9.0	4.3	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	最良	Ⅱ	D	1	
530	2号窯 焼成室	(9.9)	5.3	(3.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	
531	2号窯 焼成室	8.9	4.8	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	
532	2号窯 焼成室	9.5	4.9	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	2	
533	2号窯 焼成室	8.5	4.0	2.6	-	糸切り後センイ痕	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
534	2号窯 焼成室	8.5	3.9	2.6	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	ひび割れ
535	2号窯 焚口	8.7	3.9	2.4	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	重ね焼片付着
536	2号窯 焚口	8.3	4.1	2.5	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	
537	2号窯 焚口	8.3	4.2	2.4	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	重ね焼片付着
538	2号窯 焚口	8.5	4.8	2.5	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	
539	2号窯 焚口	8.7	5.4	2.5	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
540	2号窯 焚口	8.9	5.2	2.4	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	重ね焼片付着
541	2号窯 焚口	8.4	4.4	2.7	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	重ね焼片付着
542	2号窯 燃焼室	8.7	4.6	2.5	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅰ	C	1	
543	2号窯 燃焼室	8.7	4.5	2.2	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅰ	B	1	
544	2号窯 燃焼室	8.6	4.4	2.3	-	ナデ	不明	良	良	Ⅰ	C	1	釉付着
545	2号窯 燃焼室	8.7	4.1	2.7	-	糸切り	回転ナデ	不良	良	Ⅰ	C	1	ひび割れ、完形品
546	2号窯 燃焼室	8.5	4.1	2.3	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	重ね焼片付着
607	2号窯 焼成室	8.5	4.4	2.8	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	E	1	天場もの、カマクソ・釉付着
608	2号窯 焼成室	9.7	(5.4)	(3.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい
609	2号窯 焼成室	9.4	4.9	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	ゆがむ
610	2号窯 焼成室	10.0	(5.5)	(3.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
611	2号窯 焼成室	(8.8)	(5.0)	(3.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	3	生焼け
612	2号窯 焼成室	(9.4)	4.7	(2.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	ひび割れ
613	2号窯 焼成室	8.6	4.3	2.6	-	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
614	2号窯 焼成室	8.7	4.6	2.5	-	ナデ	不明	良	良	Ⅰ	C	1	天場もの、砂粒・釉付着
615	2号窯 焼成室	8.3	4.5	2.5	-	糸切り	不明	良	良	Ⅰ	C	2	天場もの、カマクソ・釉付着
616	2号窯 焼成室	(9.2)	(4.4)	(2.7)	-	糸切り後センイ痕	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	天場もの、カマクソ付着
617	2号窯 焼成室	8.7	4.7	2.5	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	A	1	天場もの、カマクソ・釉付着、重ね焼片付着
618	2号窯 焚口	9.0	4.4	2.5	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	砂粒付着
619	2号窯 焚口	8.7	4.1	2.6	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
620	2号窯 焚口	8.1	4.0	2.6	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	砂粒付着
621	2号窯 焚口	9.1	5.0	2.7	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	ゆがむ
622	2号窯 焚口	(8.8)	4.6	(2.4)	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
623	2号窯 焚口	(8.2)	4.7	(2.5)	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	E	1	
624	2号窯 焚口	8.8	4.8	2.7	-	糸切り	不明	良	良	Ⅰ	A	1	ゆがむ、砂粒・釉付着
625	2号窯 焚口	8.8	4.9	2.9	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片・カマクソ付着
626	2号窯 焚口	8.6	4.8	2.4	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	B	1	重ね焼片付着、ゆがむ
627	2号窯 焚口	8.4	4.0	2.6	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
628	2号窯 焚口	8.8	4.1	2.6	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅰ	D	1	生焼けっぽい
629	2号窯 焚口	(8.6)	4.1	(2.5)	-	糸切り後センイ痕	横ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	
630	2号窯 焚口	8.6	4.1	2.5	-	糸切り	不明	良	良	Ⅰ	C	1	天場もの、カマクソ・釉付着
631	2号窯 焚口	8.3	4.4	2.5	-	糸切り	不明	良	良	Ⅰ	C	1	天場もの、カマクソ・釉付着、重ね焼片付着
632	2号窯 焚口	8.5	4.6	2.5	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	C	1	天場もの、釉付着、重ね焼片付着
633	2号窯 焚口	8.1	4.2	2.6	-	糸切り	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
634	2号窯 焚口	8.4	4.4	2.6	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
635	2号窯 焚口	8.5	4.6	2.6	-	糸切り	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	重ね焼片付着
636	2号窯 焚口	8.4	3.6	2.5	-	糸切り	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	ゆがむ、重ね焼片付着
637	2号窯 焚口	8.5	4.9	2.6	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	E	1	天場もの、釉付着
638	2号窯 焚口	(8.6)	4.1	(2.0)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	内面体部に糸で凹ませた深い溝あり
639	2号窯 焚口	8.4	4.3	2.5	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	重ね焼片付着
640	2号窯 焚口	8.4	4.2	2.5	-	糸切り	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	
641	2号窯 焚口	8.6	4.6	2.5	-	糸切り	不明	良	良	Ⅰ	A	1	天場もの、砂粒・釉付着
642	2号窯 焚口	9.3	4.7	2.7	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	E	1	口縁楕円、重ね焼片付着
643	2号窯 焚口	8.9	4.2	2.5	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	D	1	天場もの、カマクソ・砂粒・釉付着
644	2号窯 焚口	8.5	4.8	2.5	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	E	1	天場もの、釉付着、重ね焼片付着
645	2号窯 燃焼室	8.7	4.5	2.4	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	A	1	天場もの、重ね焼片付着、ほぼ完形品
646	2号窯 燃焼室	(8.8)	4.6	(2.5)	-	糸切り	回転ナデ	良	良	Ⅰ	B	1	重ね焼片付着

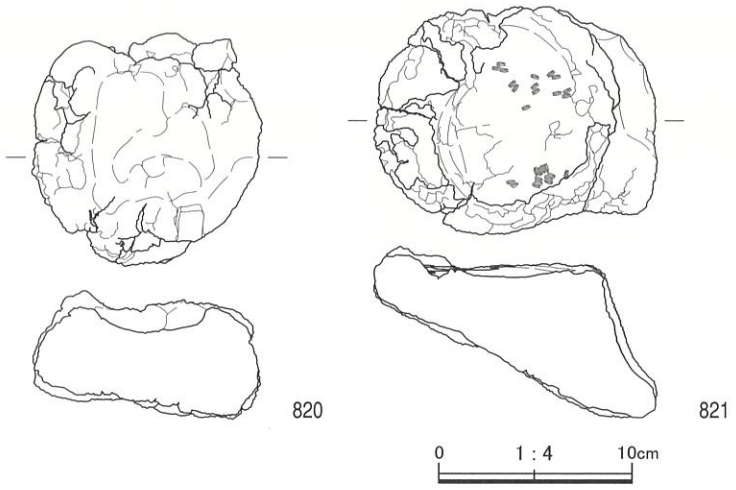
第11表　2号窯皿類観察表　（その1）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
647	2号窯 燃焼室	8.2	4.2	2.6	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	E	1	重ね焼片付着、ゆがむ
648	2号窯 燃焼室	8.5	4.1	2.7	-	糸切り後ナデ	コロシ	良	良	Ⅰ	E	2	天場もの、カマクソ・釉付着、重ね焼片付着
649	2号窯 燃焼室	(8.0)	3.9	(2.5)	-	糸切り	コロシ	良	良	Ⅰ	A	1	
650	2号窯 燃焼室	8.8	5.0	2.6	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	B	1	重ね焼片付着、ゆがむ、高台作り不整形
651	2号窯 燃焼室	8.5	4.5	2.7	-	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	Ⅰ	A	1	
652	2号窯 燃焼室	8.5	4.2	2.8	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	A	2	重ね焼片付着、ゆがむ
653	2号窯 燃焼室	(8.4)	4.1	(2.7)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	B	1	重ね焼片付着、ゆがむ、カマクソ付着
654	2号窯 燃焼室	8.4	4.3	2.5	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	
655	2号窯 燃焼室	(8.2)	4.5	(2.3)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅰ	C	1	
656	2号窯 燃焼室	8.3	4.3	2.5	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	D	1	天場もの、釉付着
657	2号窯 燃焼室	(8.4)	4.5	(2.3)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅰ	E	1	
658	2号窯 燃焼室	8.4	4.5	2.5	-	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	Ⅰ	C	1	ゆがむ
659	2号窯 燃焼室	8.2	4.1	2.3	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
660	2号窯 燃焼室	8.8	4.1	2.4	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅰ	D	1	天場もの、カマクソ・釉・重ね焼片付着
661	2号窯 燃焼室	8.6	5.1	2.4	-	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	
662	2号窯 焚口	8.3	4.3	2.3	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	A	1	底部の糸切り雑
788	2号窯 焼成室	9.0	4.8	2.6	-	糸切り	不明	良	良	Ⅰ	D	1	天場もの、重ね焼片付着、ゆがむ
789	2号窯 焼成室	9.3	5.2	2.6	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	D	1	ゆがむ、外面が黒っぽい

第11表　２号窯皿類観察表（その２）

焼台

窯道具として焼成室に焼台が残されていた。その中でも状態の良いものを２点紹介する。遺物番号８２０は一部欠損しているが、最大長が11.8cm、最大幅が12.0cm、最大高が（4.4）cmである。上面平坦部に凹みが見受けられない。この焼台は上面平坦部と底部の厚みが平行で、底部の傾斜角度が平坦にちかい。そのため、燃焼室付近の平坦な場所に置かれたものではないかと思われる。遺物番号８２１は完形品で、最大長が16.3cm、最大幅が11.9cm、最大高が6.7cmである。上面平坦部は馬蹄形で籾痕が認められる。色調は両方ともにぶい赤褐色である。



第29図　２号窯焼台遺物実測図と写真

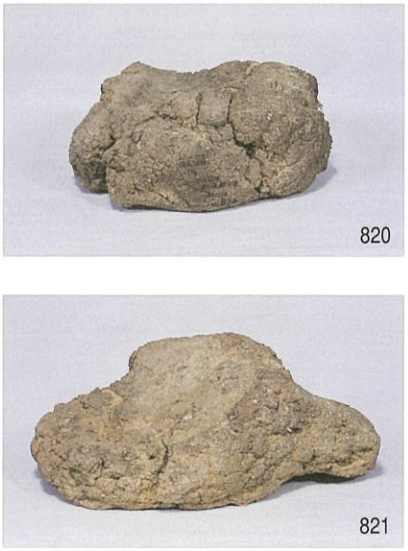


写真31　２号窯焼台

遺物番号	出土位置	法量（cm）			焼成	備考
		最大長	最大幅	最大高		
820	2号窯 焼成室	11.8	12.0	(4.4)	良	一部欠損、平たい
821	2号窯 焼成室	16.3	11.9	6.7	良	完形品、遺物との接触面にもみ痕付着

第12表　２号窯焼台観察表

窯体内の掘り込みの遺物（焼成室）と焚口床面から出土した遺物

分焔柱から煙道部に向かって約3mのところで床面を掘り下げて改修を行なっている。その最終床面よりも下から遺物が数点出土している。

碗　（41頁に図面あり）

焼成室から出土したもののうち、分類可能なものは2点である。各部の法量は、口径が16.7～16.5cm、高台径が9.1～8.5cm、器高が5.0～4.8cmを測定した。その平均は、口径16.6cm、高台径8.8cm、器高4.9cmである。高台底面の付着痕はすべて籾痕ある。底面外面の調整痕はすべて糸切り後ナデである。内面底部の見込みは回転ナデ1点、横ナデ1点である。胎土はすべて良である。焼成は良1点、不良1点である。

器形分類は、体部がD類2点である。口縁端部は1類1点、2類1点である。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
79	2号窯 焼成室 床面下 床面下	16.5	8.5	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2	ほぼ完形品
500	2号窯 焼成室 床面下 床面下	16.7	9.1	4.8	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	ゆがむ

第13表　2号窯床面下碗類観察表

皿

皿の場合点数が少ないため、焚口の床面から出土した遺物もここに加えた。

焚口と焼成室から1点ずつ分類可能なものが出土している。各部の法量は、口径が8.7cm、高台径が4.9～4.6cm、器高が2.8cmを測定した。その平均は、口径8.7cm、高台径4.8cm、器高2.8cmである。底面外面の調整痕は糸切り1点、糸切り後ナデ1点である。内面底部の見込みは横ナデ1点、不明1点である。胎土と焼成は両方ともすべて良である。

器形分類は、体部のC類1点、D類1点、口縁端部はすべて1類、高台底部はすべてI系である。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
786	2号窯 焚口 床面下 床面下	(8.8)	4.9	(2.4)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	I	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ
787	2号窯 焼成室 床面下 床面下	8.7	4.6	2.8	-	糸切り	不明	良	良	I	D	1	カマクソ・釉付着、ひび割れ

第14表　2号窯床面下皿類観察表

灰原

2号窯の灰原の遺構は検出確認することは出来なかったが、2号窯のものと思われる遺物が数点出土している。

碗

出土したもののうち、分類可能なものは4点である。各部の法量は、口径が15.9cm、高台径が9.2～7.6cm、器高が5.3cmを測定した。その平均は、口径15.9cm、高台径8.4cm、器高5.3cmである。高台底面の付着痕は籾痕3点、籾・砂痕1点である。底面外面の調整痕はすべて糸切りである。内面底部の見込みは回転ナデ3点、横ナデ1点である。胎土は良3点、不良1点である。焼成は最良1点、良2点、不良1点である。

器形分類は、体部がB類1点、C類2点、D類1点である。口縁端部はすべて1類である。

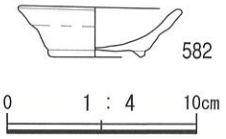
遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
403	2号窯 灰原	(16.8)	7.7	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
404	2号窯 灰原	15.9	7.6	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	良	C	1	
405	2号窯 灰原	(17.6)	8.9	(4.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	砂粒付着
406	2号窯 灰原	(17.0)	9.2	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	不良	B	1	

第15表　２号窯灰原碗類観察表

皿

出土したもののうち、分類可能なものは３点である。各部の法量は、口径が8.6～8.5cm、高台径が5.1～4.3cm、器高が2.7～2.4cmを測定した。その平均は、口径8.6cm、高台径4.8cm、器高2.6cmである。高台底面の付着痕はすべて籾痕である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデ２点、ナデ１点である。内面底部の見込みは横ナデ２点、不明１点である。胎土と焼成は両方ともすべて良である。

器形分類は、体部のＣ類２点、Ｄ類１点、口縁端部はすべて１類、高台底部は、すべてⅡ系である。



第30図　２号窯灰原皿類遺物実測図

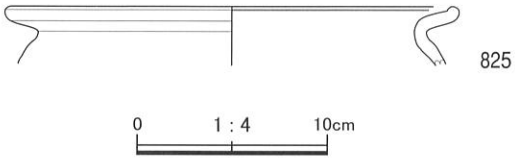
写真32　２号窯灰原皿類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
582	2号窯 灰原	8.6	5.0	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、ひび割れ、全体に黒い、完形品
749	2号窯 灰原	8.5	4.3	2.4	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
750	2号窯 灰原	(9.6)	5.1	(2.8)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	

第16表　２号窯灰原皿類観察表

土師質堝

灰原から伊勢型鍋の口縁付近の破片が１点出土している。口縁端部は、短く内側に折り返されて肥厚している。胎土は浅橙色であるが、表面が鮮やかな橙色である。首と体部の切り変わるところに段が入っている。遺物の状態はもろい。



第31図　２号窯灰原土師質堝遺物実測図

写真33　２号窯灰原土師質堝

遺物番号	出土位置	法量（cm）						残存率（%）				状態	備考
		口径	頸基部径	胴部最大径	底径	器高	口頸部高	口縁	頸部	胴部	底部		
825	2号窯 灰原	(24.0)	(20.9)	-	-	-	1.3	5	10	-	-	もろい	口縁付近の破片のみ

第17表　２号窯灰原土師質堝観察表

３号窯に関する遺物

焼成室・燃焼室・焚口と灰原から碗・皿と鉢・壺の破片が出土している。窯内からの遺物が一番多く出土した。碗には、文字や模様状のものが入るものがあった。

碗

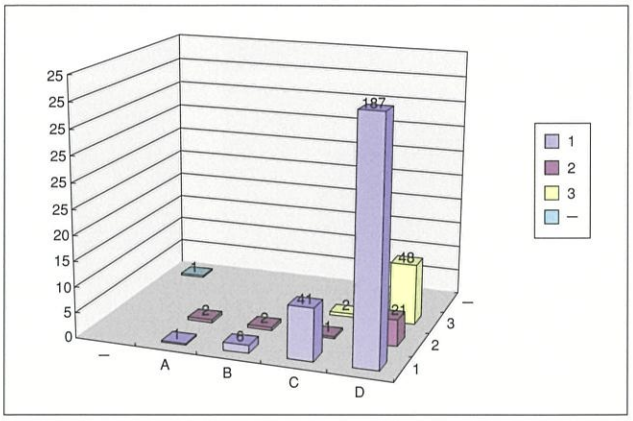
出土したもののうち、分類可能なものは３１２点である。これは、碗類全体の中で最も多く、約60%を占めていた。

各部の法量は、口径が18.2～15.1cm、高台径が9.9～6.6cm、器高が6.0～4.4cmを測定した。その平均は、口径16.6cm、高台径8.1cm、器高5.1cmである。高台底面の付着痕は籾痕２６０点（83.3%）、籾・砂痕３７点（11.8%）、不明２点（1%）、高台なし１３点（4.2%）である。高台が無いもののうち６点は「高台を付着させた形跡の無いもの」である。底面外面の調整痕は糸切り１６点（5%）、糸切り後センイ痕６点（2%）、糸切り後ナデ２４０点（76%）、糸切り後ナデ後板目２点（1%）、ナデ４２点（13%）、ナデ後板目２点（1%）、ナデ後センイ痕３点（1%）、底部欠損のもの１点（1%）である。内面底部の見込みは回転ナデ２５６点（82%）、横ナデ４４点（14%）、不明１１点（3%）、底部欠損のもの１点（1%）である。胎土は最良１５点、良２９２点、不良５点である。

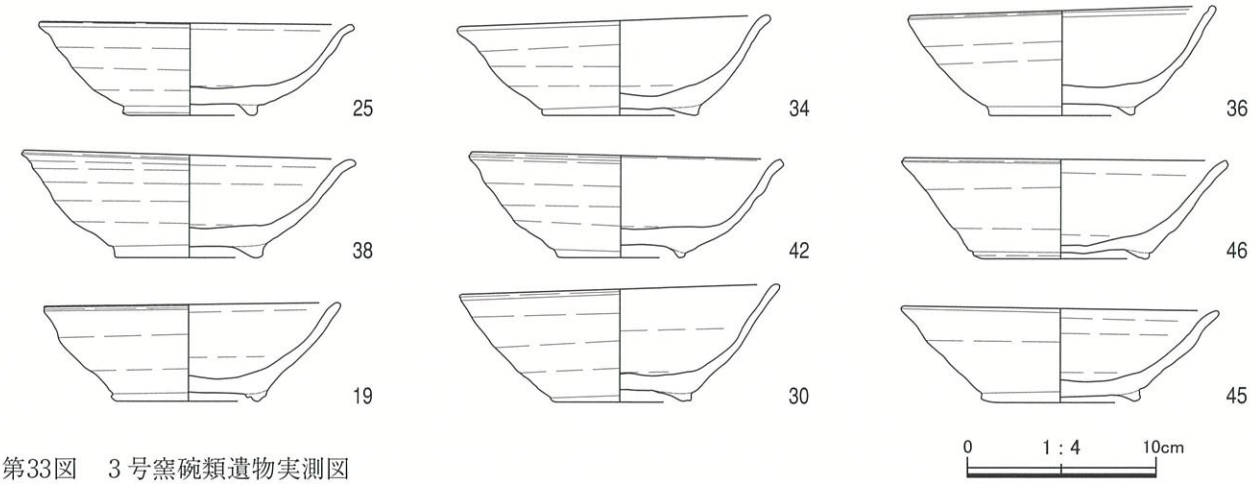
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	口縁端部				
体部	1類	2類	3類	底部欠損	総計
A類	1(0.3%)	2(0.6%)	0	0	3(1%)
B類	6(1.9%)	2(0.6%)	0	0	8(2.6%)
C類	41(13.1%)	1(0.3%)	2(0.6%)	0	44(14.1%)
D類	187(59.9%)	21(6.7%)	48(15.4%)	0	256(82%)
底部欠損	0	0	0	1(0.3%)	1(0.3%)
総計	235(75.3%)	26(8.3%)	50(16%)	1(0.3%)	312(100%)

第18表　３号窯出土碗類器形分類別組合せ表



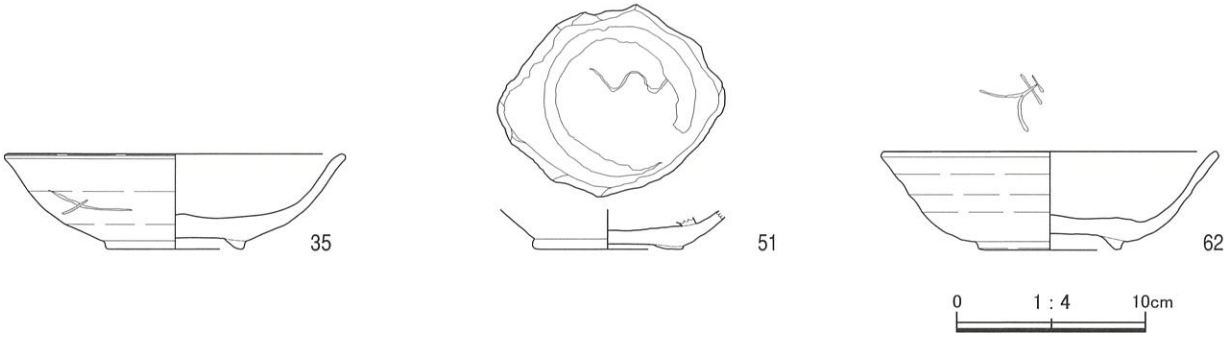
第32図　３号窯碗類器形分類別組成図



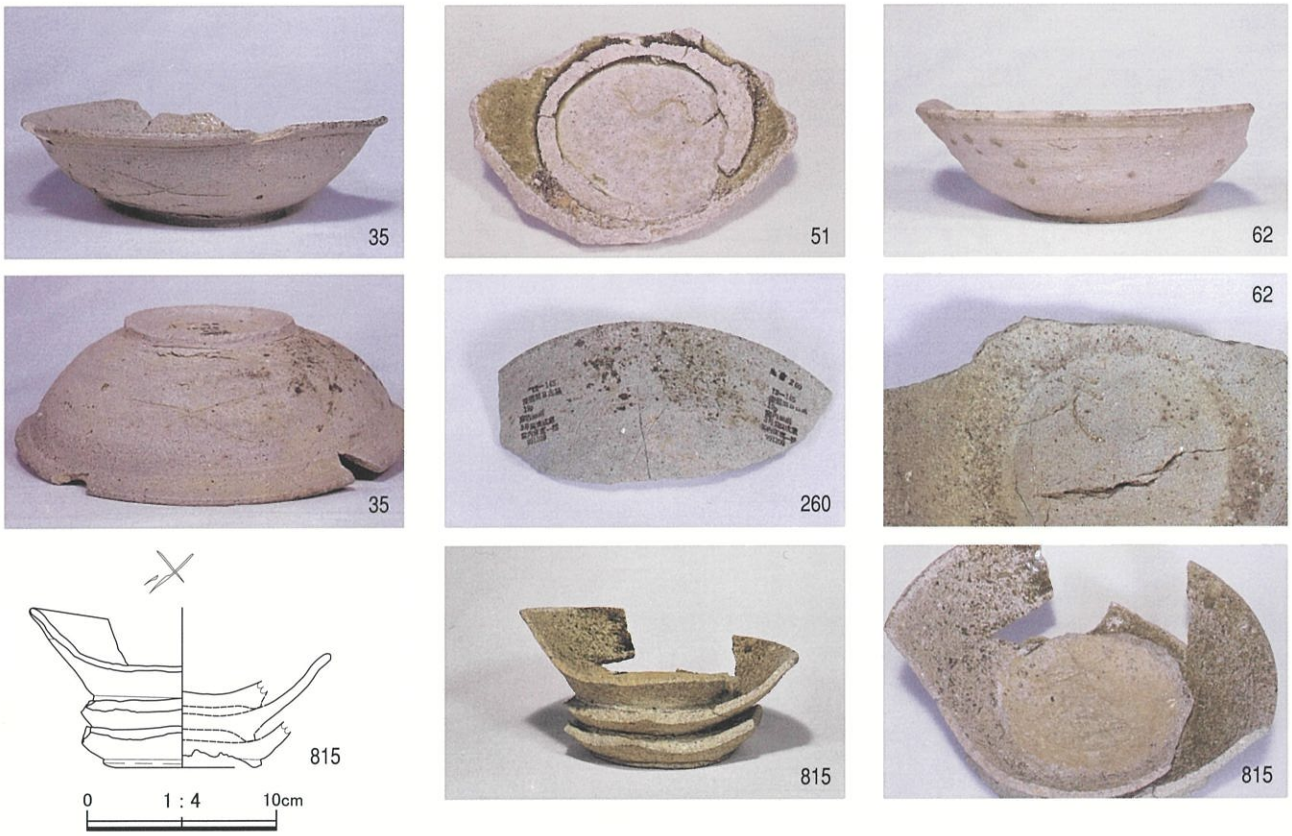
第33図　３号窯碗類遺物実測図

写真34　３号窯碗類

碗の中には、文字や模様状のものが入る遺物が４点見つかっている。焼成室で３点、燃焼室で１点出土した。遺物番号３５には外面体部に「×」状の模様、遺物番号５１には内面底部にアルファベットの「W」に類似した模様、遺物番号６２には内面底部に漢字の「天」の字、遺物番号２６０には外面体部に浅く不鮮明ではあるが文字状の線が入っているものもあった。



第34図　３号窯碗類特殊品遺物実測図（その１）



第34図　3号窯碗類特殊品遺物実測図（その2）　写真35　3号窯碗類特殊品

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
11	3号窯 焼成室	16.5	9.0	4.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ほぼ完形品
12	3号窯 焼成室	16.2	9.1	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	完形品
13	3号窯 焼成室	15.3	8.2	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	3	
14	3号窯 焼成室	15.8	9.1	4.9	もみ・砂	ナデ後板目	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ほぼ完形品
15	3号窯 焼成室	16.4	8.5	4.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、完形品
16	3号窯 焼成室	15.5	9.5	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ
17	3号窯 焼成室	15.8	9.0	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
18	3号窯 焼成室	15.7	8.4	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
19	3号窯 焼成室	15.5	8.1	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ほぼ完形品、全体に黒っぽい
20	3号窯 焼成室	15.5	6.9	5.2	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	最良	良	D	3	
21	3号窯 焼成室	16.3	8.0	5.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	底部にひび割れ
22	3号窯 焼成室	16.2	7.4	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	良	D	1	
23	3号窯 焼成室	16.4	7.5	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
24	3号窯 焼成室	16.8	7.6	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片・カマクソ付着、ほぼ完形品
25	3号窯 焼成室	16.5	7.1	4.8	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品
26	3号窯 焼成室	16.5	7.9	5.2	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	内面体部に砂粒付着、ほぼ完形品
27	3号窯 焼成室	17.2	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	完形品
28	3号窯 焼成室	16.8	8.6	5.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品、外面底部に穴あり
29	3号窯 焼成室	16.3	7.8	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	3	口縁に砂粒付着、ほぼ完形品
30	3号窯 焼成室	16.8	7.4	5.9	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	A	1	体部にひび割れ、完形品
31	3号窯 焼成室	16.5	7.6	5.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
32	3号窯 焼成室	16.0	7.7	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、完形品、釉たれ
33	3号窯 焼成室	15.7	7.4	4.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
34	3号窯 焼成室	16.3	8.3	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、完形品
35	3号窯 焼成室	(17.6)	7.4	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	「×」のような模様、黒いもの・砂粒付着
36	3号窯 焼成室	15.8	7.7	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B	1	ゆがむ、ほぼ完形品、黒いもの・キズ・砂粒付着
37	3号窯 焼成室	16.9	7.9	5.4	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	完形品
38	3号窯 焼成室	17.2	7.8	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	完形品
39	3号窯 焼成室	16.3	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	3	底部にひび割れ
40	3号窯 焼成室	16.0	7.5	5.0	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	D	3	砂粒付着、完形品、釉たれ
41	3号窯 焼成室	16.9	7.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	底部にひび割れ
42	3号窯 焼成室	16.3	6.8	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品
43	3号窯 焼成室	16.5	7.5	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
44	3号窯 焼成室	16.5	8.3	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	ほぼ完形品、黒っぽい生焼け
45	3号窯 燃焼室	16.5	8.4	4.9	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	完形品、口縁にひび割れ

第19表　3号窯碗類観察表（その1）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
46	3号窯 燃焼室	16.8	9.3	5.2	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	3	ほぼ完形品、内面底部指で整形
47	3号窯 燃焼室	16.9	8.1	6.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	底部にひび割れ、胎土に3～6mm大の小石含む
48	3号窯 燃焼室	16.0	8.9	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
49	3号窯 燃焼室	15.8	7.6	5.2	もみ	糸切り	横ナデ	良	良	D	1	
50	3号窯 燃焼室	15.4	7.8	4.8	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	2	
51	3号窯 燃焼室	-	(7.9)	-	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存、「W」状の模様、重ね焼片付着
52	3号窯 燃焼室	15.8	7.8	5.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	
53	3号窯 燃焼室	16.1	9.0	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	内面底部に黒い砂粒が一部付着、ほぼ完形品
54	3号窯 燃焼室	16.3	7.6	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	高台の作りがきれい
55	3号窯 燃焼室	15.7	8.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
56	3号窯 燃焼室	15.6	8.7	4.6	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
57	3号窯 燃焼室	16.1	7.0	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品、口縁～体部にひび割れ
58	3号窯 燃焼室	16.9	8.2	5.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	完形品
59	3号窯 燃焼室	16.6	7.7	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品
60	3号窯 燃焼室	16.5	7.2	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
61	3号窯 燃焼室	17.4	7.8	5.4	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品
62	3号窯 燃焼室	(17.5)	7.6	(5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	「天」の文字
63	3号窯 焚口	16.6	7.5	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
64	3号窯	16.1	9.3	4.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、完形品、体部にひび割れ
145	3号窯 焼成室	(16.0)	8.0	(4.8)	もみ	糸切り	横ナデ	良	不良	C	1	
146	3号窯 焼成室	(16.4)	8.4	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
147	3号窯 焼成室	15.8	8.7	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
148	3号窯 焼成室	(16.2)	9.3	(4.8)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	重ね焼片付着、底部1/2ハクリ
149	3号窯 焼成室	16.0	9.6	4.8	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
150	3号窯 焼成室	16.9	8.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ
151	3号窯 焼成室	16.4	8.1	5.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	底部にひび割れ
152	3号窯 焼成室	15.3	9.5	5.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、底部にひび割れ
153	3号窯 焼成室	16.4	8.8	4.8	もみ	ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、ゆがむ、重ね焼片付着、ほぼ完形品
154	3号窯 焼成室	16.4	8.5	4.7	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	ほぼ完形品
155	3号窯 焼成室	15.9	8.3	4.8	もみ	ナデ後板目	横ナデ	良	良	C	1	ゆがむ、砂粒付着
156	3号窯 焼成室	(16.4)	8.3	(4.6)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1	ゆがむ、高台楕円
157	3号窯 焼成室	17.4	8.5	5.4	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着
158	3号窯 焼成室	16.2	8.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	重ね焼片付着
159	3号窯 焼成室	16.5	9.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、重ね焼片・砂粒付着
160	3号窯 焼成室	(16.8)	9.2	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	天場もの、内面底部に重ねでは無い高台片付着
161	3号窯 焼成室	(16.8)	8.8	(5.0)	もみ	糸切り	回転ナデ	不良	良	C	1	
162	3号窯 焼成室	16.5	9.9	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着
163	3号窯 焼成室	(16.0)	8.0	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
164	3号窯 焼成室	16.3	8.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	カマクソ付着、ゆがむ
165	3号窯 焼成室	17.3	(7.5)	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	底部ひび割れ
166	3号窯 焼成室	16.5	8.2	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
167	3号窯 焼成室	17.2	7.7	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片付着
168	3号窯 焼成室	17.0	(8.0)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	天場もの、砂粒付着、ほぼ完形品
169	3号窯 焼成室	16.8	8.5	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	外面底部黒い
170	3号窯 焼成室	16.6	7.5	5.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
171	3号窯 焼成室	16.5	7.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
172	3号窯 焼成室	17.3	(8.5)	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
173	3号窯 焼成室	16.5	8.0	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
174	3号窯 焼成室	16.9	8.5	5.1	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	体部にひび割れ
175	3号窯 焼成室	17.3	(9.0)	(5.7)	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	3	高台楕円、砂粒付着
176	3号窯 焼成室	(16.8)	7.9	(5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
177	3号窯 焼成室	(16.6)	8.5	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	
178	3号窯 焼成室	測定不能	8.4	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
179	3号窯 焼成室	17.0	8.0	5.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
180	3号窯 焼成室	(16.8)	8.5	(5.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	高台楕円
181	3号窯 焼成室	(15.6)	(7.3)	(5.6)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
182	3号窯 焼成室	16.4	7.6	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
183	3号窯 焼成室	(16.8)	8.7	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ、高台楕円
184	3号窯 焼成室	16.6	7.7	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
185	3号窯 焼成室	17.4	8.5	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
186	3号窯 焼成室	16.9	7.5	5.4	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
187	3号窯 焼成室	16.5	8.1	4.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
188	3号窯 焼成室	16.9	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ
189	3号窯 焼成室	16.3	7.1	5.2	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	3	カマクソ付着
190	3号窯 焼成室	16.3	7.3	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	D	3	砂粒付着、ほぼ完形品
191	3号窯 焼成室	(16.8)	7.5	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
192	3号窯 焼成室	17.5	7.5	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
193	3号窯 焼成室	17.2	7.7	5.4	もみ	糸切り後ナデ	不明	最良	最良	D	1	見込み部分に指圧痕あり
194	3号窯 焼成室	16.6	7.1	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	D	1	砂粒付着、完形品、ゆがむ
195	3号窯 焼成室	17.4	8.2	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
196	3号窯 焼成室	16.8	8.6	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
197	3号窯 焼成室	16.9	8.3	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	1	
198	3号窯 焼成室	(17.0)	8.2	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
199	3号窯 焼成室	16.9	7.8	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品

第19表　3号窯碗類観察表　（その2）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
200	3号窯 焼成室	(18.0)	(8.7)	(5.4)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片付着
201	3号窯 焼成室	16.7	8.2	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
202	3号窯 焼成室	16.2	8.0	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、完形品
203	3号窯 焼成室	17.8	8.1	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	1	
204	3号窯 焼成室	17.5	8.0	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
205	3号窯 焼成室	16.6	7.7	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁楕円
206	3号窯 焼成室	16.7	底径8.6	(4.9)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	高台全てハクリ、カマクソ付着
207	3号窯 焼成室	17.6	7.6	5.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
208	3号窯 焼成室	17.3	7.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	見込み部分に指圧痕あり
209	3号窯 焼成室	15.2	7.5	5.4	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒・カマクソ付着、ゆがむ
210	3号窯 焼成室	16.0	6.9	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
211	3号窯 焼成室	17.0	8.0	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、底部ひび割れ
212	3号窯 焼成室	16.2	7.6	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
213	3号窯 焼成室	16.9	7.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
214	3号窯 焼成室	16.8	7.9	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
215	3号窯 焼成室	16.7	7.7	4.9	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
216	3号窯 焼成室	17.1	8.3	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
217	3号窯 焼成室	16.7	7.5	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	外面体部に細く1条入る
218	3号窯 焼成室	16.6	(7.9)	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁楕円
219	3号窯 焼成室	17.7	8.1	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁楕円、完形品
220	3号窯 焼成室	17.3	8.1	5.8	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	完形品
221	3号窯 焼成室	17.7	8.1	5.2	もみ・砂	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
222	3号窯 焼成室	(16.8)	8.2	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
223	3号窯 焼成室	16.4	(7.0)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
224	3号窯 焼成室	16.6	8.3	5.2	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部・体部にひび割れ
225	3号窯 焼成室	16.7	7.6	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
226	3号窯 焼成室	16.9	(8.6)	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台ほとんどハクリ
227	3号窯 焼成室	(17.6)	7.4	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
228	3号窯 焼成室	16.7	7.7	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
229	3号窯 焼成室	17.4	8.0	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	重ね焼片・砂粒付着
230	3号窯 焼成室	17.1	8.0	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
231	3号窯 焼成室	17.0	7.5	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	内面体部・口縁に砂粒付着
232	3号窯 焼成室	17.0	8.1	5.4	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	
233	3号窯 焼成室	17.9	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁楕円、底部ひび割れ
234	3号窯 焼成室	17.2	底径8.1	(5.1)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台全てハクリ
235	3号窯 焼成室	(16.8)	7.8	(5.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
236	3号窯 焼成室	16.6	7.5	4.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒・カマクソ付着、ゆがむ
237	3号窯 焼成室	(17.2)	7.9	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	底部にひび割れ
238	3号窯 焼成室	16.9	7.1	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
239	3号窯 焼成室	16.6	7.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
240	3号窯 焼成室	(17.0)	8.1	(5.5)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
241	3号窯 焼成室	16.0	7.2	5.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
242	3号窯 焼成室	16.9	7.4	4.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着、ゆがむ
243	3号窯 焼成室	17.1	8.0	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	A	2	砂粒付着
244	3号窯 焼成室	17.1	8.1	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	体部～底部にひび割れ、外面底部が黒っぽい
245	3号窯 焼成室	(16.4)	8.8	(5.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
246	3号窯 焼成室	16.5	(7.4)	(4.9)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部にひび割れ
247	3号窯 焼成室	17.5	8.0	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
248	3号窯 焼成室	17.1	7.7	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
249	3号窯 焼成室	16.4	8.5	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
250	3号窯 焼成室	17.4	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
251	3号窯 焼成室	16.6	7.5	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
252	3号窯 焼成室	16.7	8.0	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
253	3号窯 焼成室	(16.4)	7.3	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
254	3号窯 焼成室	17.6	8.0	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
255	3号窯 焼成室	17.0	7.5	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着、ゆがむ
256	3号窯 焼成室	15.9	7.4	4.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着、ゆがむ
257	3号窯 焼成室	16.6	7.3	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	天場もの、砂粒付着、ほぼ完形品
258	3号窯 焼成室	16.8	7.6	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着
259	3号窯 焼成室	16.9	7.4	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、口縁楕円
260	3号窯 焼成室	(18.6)	-	-	-	-	-	良	良	D	1	口縁と体部の破片のみ、外面体部に文字入る
261	3号窯 焼成室	17.7	8.3	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	最良	D	1	体部にひび割れ
262	3号窯 焼成室	17.6	(8.7)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
263	3号窯 焼成室	17.4	(8.0)	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	生焼け
264	3号窯 焼成室	18.1	(8.4)	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け、高台ほとんどハクリ
265	3号窯 焼成室	16.8	7.8	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片・砂粒付着
266	3号窯 焼成室	16.9	8.2	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、体部にひび割れ・何かで突き刺した孔1個
267	3号窯 焼成室	16.2	8.4	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部にひび割れ、ゆがむ
268	3号窯 焼成室	18.0	7.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼けっぽい、体部～底部にひび割れ
269	3号窯 焼成室	18.0	(8.5)	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け
270	3号窯 焼成室	17.7	8.2	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け、体部～底部にひび割れ
271	3号窯 焼成室	17.6	(8.8)	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	生焼け、高台ほとんどハクリ
272	3号窯 焼成室	18.0	(8.8)	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け、高台ほとんどハクリ
273	3号窯 焼成室	17.1	(8.4)	(5.5)	不明	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け、高台ほとんどハクリ

第19表　3号窯碗類観察表（その3）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
274	3号窯 焼成室	17.9	8.5	5.6	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2	生焼け
275	3号窯 焼成室	17.6	8.1	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け
276	3号窯 焼成室	17.4	7.4	5.7	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け、口縁～体部にひび割れ
277	3号窯 焼成室	17.4	(8.2)	(5.7)	不明	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	生焼け、高台ほとんどハクリ
278	3号窯 焼成室	18.2	8.1	5.5	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	生焼け
279	3号窯 焼成室	18.1	(8.5)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
280	3号窯 焚口	(17.0)	8.0	(5.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	砂粒・カマクソ付着
281	3号窯 焚口	17.0	(7.9)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台ほとんどハクリ
282	3号窯 燃焼室	(15.4)	8.6	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
283	3号窯 燃焼室	測定不能	8.5	測定不能	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ、高台楕円
284	3号窯 燃焼室	(17.6)	8.1	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	天場もの、カマクソ付着、ゆがむ
285	3号窯 燃焼室	(15.6)	8.4	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2	重ね焼片・砂粒付着
286	3号窯 燃焼室	(16.0)	8.4	(5.2)	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
287	3号窯 燃焼室	16.0	8.2	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	内面体部に重ね焼片・砂粒付着、外面底部が黒っぽい
288	3号窯 燃焼室	16.0	8.1	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	1	重ね焼片付着
289	3号窯 燃焼室	(17.6)	8.7	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
290	3号窯 燃焼室	16.6	8.1	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
291	3号窯 燃焼室	16.7	底径9.1	(5.2)	-	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、高台全てハクリ
292	3号窯 燃焼室	16.5	底径9.0	(4.4)	-	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、高台全てハクリ、ゆがむ
293	3号窯 燃焼室	(16.4)	8.5	(5.2)	もみ・砂	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
294	3号窯 燃焼室	(17.6)	(10.4)	(6.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
295	3号窯 燃焼室	16.4	8.6	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
296	3号窯 燃焼室	(16.0)	8.8	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
297	3号窯 燃焼室	(17.0)	7.9	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	高台楕円
298	3号窯 燃焼室	(17.6)	8.3	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
299	3号窯 燃焼室	測定不能	9.0	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	天場もの、カマクソ付着、ゆがむ
300	3号窯 燃焼室	(17.2)	8.1	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
301	3号窯 燃焼室	16.9	8.9	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
302	3号窯 燃焼室	(15.6)	9.0	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、内面底面全体に指ナデ
303	3号窯 燃焼室	測定不能	8.0	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
304	3号窯 燃焼室	(16.2)	(8.0)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
305	3号窯 燃焼室	(16.4)	9.0	(4.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ゆがむ
306	3号窯 燃焼室	17.0	7.4	4.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
307	3号窯 燃焼室	(16.2)	8.2	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
308	3号窯 燃焼室	16.5	7.8	5.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
309	3号窯 燃焼室	16.2	(9.0)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ後板目	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
310	3号窯 燃焼室	16.4	8.9	4.9	もみ	糸切り	横ナデ	良	良	D	1	
311	3号窯 燃焼室	16.2	7.7	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
312	3号窯 燃焼室	(16.2)	7.9	(4.8)	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	
313	3号窯 燃焼室	15.5	8.0	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
314	3号窯 燃焼室	(15.8)	8.1	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、内面底面全体に指ナデ
315	3号窯 燃焼室	(16.0)	(7.8)	(5.5)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、底部にひび割れ
316	3号窯 燃焼室	(16.6)	(7.9)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・カマクソ付着
317	3号窯 燃焼室	16.1	8.0	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
318	3号窯 燃焼室	16.1	底径7.5	4.7	-	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	高台付着していた形跡なし、体部にひび割れ
319	3号窯 燃焼室	(15.0)	8.5	(5.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
320	3号窯 燃焼室	(16.4)	底径8.6	(5.3)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台全てハクリ
321	3号窯 燃焼室	16.4	9.2	5.8	もみ・砂	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、底部にひび割れ
322	3号窯 燃焼室	(15.2)	8.5	(4.9)	もみ	ナデ後センイ痕	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
323	3号窯 燃焼室	(16.0)	7.6	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
324	3号窯 燃焼室	16.1	7.2	4.8	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	最良	最良	C	1	重ね焼片付着
325	3号窯 燃焼室	16.3	8.1	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
326	3号窯 燃焼室	16.2	8.5	4.4	もみ	糸切り後センイ痕	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、底部にひび割れ、釉たれ
327	3号窯 燃焼室	17.1	8.8	5.3	もみ	ナデ後センイ痕	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ
328	3号窯 燃焼室	16.5	8.3	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
329	3号窯 燃焼室	16.6	8.8	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	体部にひび割れ、ゆがむ
330	3号窯 燃焼室	(16.0)	8.7	(5.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
331	3号窯 燃焼室	15.9	9.0	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B	1	
332	3号窯 燃焼室	(16.4)	8.8	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1	
333	3号窯 燃焼室	(17.6)	8.3	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
334	3号窯 燃焼室	15.1	8.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	天場もの、カマクソ・付着、ゆがむ
335	3号窯 燃焼室	測定不能	7.5	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	体部が激しくゆがみ平らになった所に重ね焼片付着
336	3号窯 燃焼室	17.0	8.7	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着
337	3号窯 燃焼室	16.4	8.2	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	最良	D	1	重ね焼片付着、底部にひび割れ、口縁・高台楕円
338	3号窯 燃焼室	(16.0)	7.8	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	D	1	重ね焼片付着
339	3号窯 燃焼室	16.2	7.5	4.7	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	最良	D	1	重ね焼片付着
340	3号窯 燃焼室	(16.6)	7.9	(4.3)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
341	3号窯 燃焼室	(16.6)	7.3	(5.1)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
342	3号窯 燃焼室	(16.4)	7.8	(5.1)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
343	3号窯 燃焼室	17.1	底径9.7	5.3	-	糸切り後センイ痕	横ナデ	良	良	D	1	高台付着していた形跡なし、砂粒付着
344	3号窯 燃焼室	16.5	8.1	5.5	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
345	3号窯 燃焼室	16.0	8.1	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
346	3号窯 燃焼室	16.7	8.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
347	3号窯 燃焼室	16.2	8.1	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ

第19表　3号窯碗類観察表（その4）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
348	3号窯 燃焼室	16.2	8.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
349	3号窯 燃焼室	16.7	7.4	4.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	砂粒・カマクソ付着、ゆがむ
350	3号窯 燃焼室	(17.2)	7.6	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	D	1	重ね焼片付着
351	3号窯 燃焼室	(17.0)	7.6	(4.4)	もみ	糸切り後センイ痕	横ナデ	良	最良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ、体部にひび割れ
352	3号窯 燃焼室	(16.6)	7.3	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
353	3号窯 燃焼室	(16.2)	7.8	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・釉付着、ゆがむ
354	3号窯 燃焼室	16.7	(9.2)	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	2	重ね焼片・カマクソ付着、高台ほとんどハクリ、ひび割れ
355	3号窯 燃焼室	16.6	8.2	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
356	3号窯 燃焼室	(16.6)	8.3	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着
357	3号窯 燃焼室	(17.0)	8.5	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
358	3号窯 燃焼室	(16.8)	8.4	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ後板目	横ナデ	良	良	C	1	
359	3号窯 燃焼室	(16.4)	9.3	(5.0)	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
360	3号窯 燃焼室	15.2	8.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	B	2	生焼けっぽい
361	3号窯 燃焼室	(15.1)	8.3	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	A	2	
362	3号窯 燃焼室	16.5	7.2	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	不良	D	1	砂粒付着
363	3号窯 燃焼室	(16.6)	底径8.4	(4.4)	-	糸切り	回転ナデ	良	不良	C	1	高台付着していた形跡なし、砂粒付着
364	3号窯 燃焼室	16.0	8.2	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	ゆがむ
365	3号窯 燃焼室	15.5	8.3	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
366	3号窯 燃焼室	(16.0)	9.2	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	重ね焼片付着、器面荒れる
367	3号窯 燃焼室	(16.4)	底径8.8	(5.0)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台付着していた形跡なし
368	3号窯 燃焼室	16.9	7.8	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
369	3号窯 燃焼室	(16.4)	7.8	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
370	3号窯 燃焼室	16.2	9.0	4.9	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	D	1	生焼け、ゆがむ
371	3号窯 燃焼室	16.1	7.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	体部ひび割れ、口縁楕円
372	3号窯 燃焼室	(17.6)	7.1	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	砂粒付着
373	3号窯 燃焼室	16.8	7.4	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、底部ひび割れ
374	3号窯 燃焼室	16.4	(7.5)	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	高台ほとんどハクリ、外面底部黒っぽい
375	3号窯 燃焼室	16.7	7.5	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
376	3号窯 燃焼室	17.2	8.1	5.5	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、底部ひび割れ、ほぼ完形品
377	3号窯 燃焼室	17.3	7.4	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・カマクソ付着、ゆがむ
378	3号窯 燃焼室	(15.0)	6.6	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
379	3号窯 焚口	(16.8)	(8.2)	(5.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
380	3号窯 焚口	(17.2)	7.8	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
381	3号窯 焚口	(18.2)	8.3	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2	生焼けっぽい、ゆがむ
382	3号窯 燃焼室	(16.6)	8.0	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	1	
383	3号窯 燃焼室	16.4	(7.5)	(5.7)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
384	3号窯 燃焼室	17.3	(8.5)	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	1	口縁付近に0.4cmの孔1個
385	3号窯 燃焼室	(15.8)	(8.0)	(5.7)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
386	3号窯 燃焼室	16.4	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着、ゆがむ
387	3号窯 焚口	(16.0)	7.8	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
388	3号窯 焚口	16.4	8.2	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2	
389	3号窯 焚口	17.5	(8.2)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	高台ほとんどハクリ、外面底部黒っぽい
390	3号窯 焚口	17.3	7.4	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ
391	3号窯 焚口	(16.2)	7.5	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台楕円
392	3号窯	17.0	(9.4)	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1	重ね焼片付着
393	3号窯	16.4	底径8.6	4.8	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	高台付着していた形跡なし
394	3号窯	16.3	底径7.8	4.5	-	糸切り後センイ痕	不明	良	良	D	1	天場もの、内面に小石1個付着
395	3号窯	17.1	9.1	5.6	もみ	糸切り後センイ痕	不明	良	良	D	1	天場もの、カマクソ・遺物片・・重ね焼片付着
396	3号窯	(17.4)	(8.7)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B	2	重ね焼片付着、ゆがむ、口縁～体部にひび割れ
397	3号窯	測定不能	8.8	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B	1	ゆがむ
398	3号窯	(16.4)	7.6	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	見た目全体が茶色い、カマクソ・砂粒・重ね焼片付着、ゆがむ
399	3号窯	(17.4)	8.9	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台ほとんどハクリ
400	3号窯	16.2	8.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、体部にひび割れ
401	3号窯	長径16.9	底径9.5	4.8	-	糸切り後センイ痕	横ナデ	良	良	D	1	高台付着していた形跡なし、ゆがむ、口縁・底部楕円
439	3号窯	16.2	8.6	4.8	もみ・砂	ナデ後センイ痕	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ

第19表　3号窯碗類観察表　（その5）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	備考
		口径	高台径	器高						
814	3号窯 燃焼室	(14.8)	8.2	(5.2)	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	重ね枚数：7枚 最上段は天場もの、カマクソ・釉・遺物片付着
815	3号窯 燃焼室	-	8.4	-	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	重ね枚数：3枚 最上段の内側底に「×」のようなキズあり
816	3号窯 燃焼室	-	8.5	-	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	重ね枚数：8枚 最上段は天場もの、釉付着

第20表　3号窯重ね碗類観察表

皿

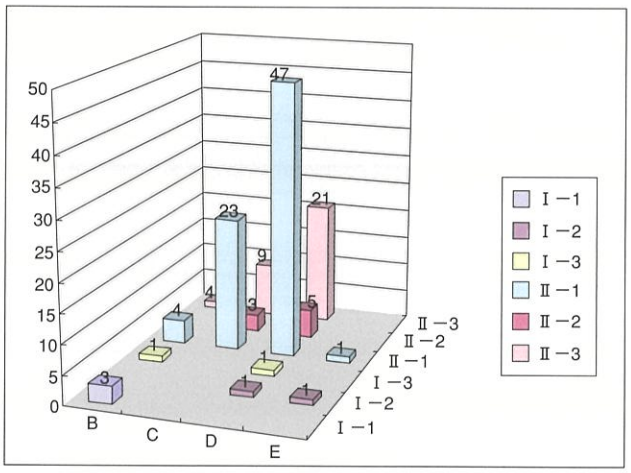
出土したもののうち、分類可能なものは１２１点である。これは、皿類で最も多く、43%を占めていた。

各部の法量は、口径が10.2～8.3cm、高台径が6.3～4.1cm、器高が3.4～2.5cmを測定した。その平均は、口径9.4cm、高台径5.2cm、器高3.0cmである。高台底面の付着痕は、籾痕１０６点（87.5%）、籾・砂痕４点（3.3%）、不明１点（0.8%）、高台なし１０点（8.3%）である。底面外面の調整痕は、糸切り５点（4.1%）、糸切り後ナデ６９点（56.6%）、ナデ４５点（37.5%）、ナデ後板目１点（1%）、不明１点（1%）である。内面底部の見込みは、回転ナデ８０点（65.8%）、横ナデ１１点（9.1%）、不明３０点（25%）である。胎土はすべて良である。焼成は良５８点（47.5%）、不良６３点（52.5%）である。ここでの焼成の不良は、浅黄橙色の生焼けの完形品かほぼ完形品のものが多く、そのほとんどが焼成室から見つかっている。

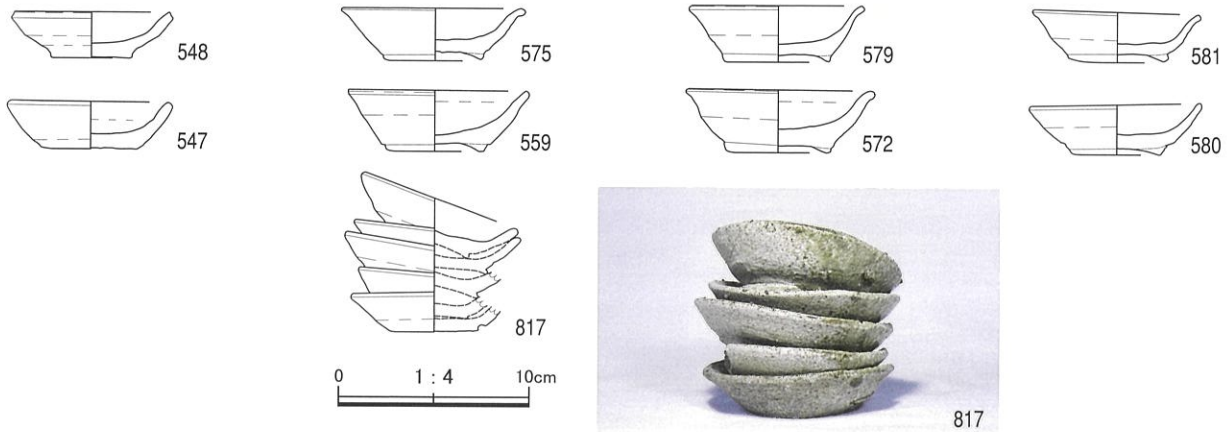
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台　口縁端部								
	Ⅰ系			Ⅰ系計	Ⅱ系			Ⅱ系計	総計
体部	1類	2類	3類		1類	2類	3類		
B類	3(2.5%)	0	1(0.8%)	4(3.3%)	4(3.3%)	0	1(0.8%)	5(4.1%)	9(7.5%)
C類	0	0	0	0	23(18.3%)	3(2.5%)	9(7.5%)	34(28.3%)	34(28.3%)
D類	0	1(0.8%)	1(0.8%)	2(1.6%)	47(39.1%)	5(4.1%)	21(17.5%)	73(60.8%)	75(62.5%)
E類	0	1(0.8%)	0	1(0.8%)	1(0.8%)	0	0	1(0.8%)	2(1.6%)
総計	3(2.5%)	2(1.6%)	2(1.6%)	7(5.8%)	74(61.6%)	8(6.6%)	31(25.8%)	113(94.1%)	120(100%)

第21表　３号窯出土皿類器形分類別組合せ表



第35図　３号窯皿類器形分類別組成図



第36図　３号窯皿類遺物実測図

写真36　３号窯皿類（その１）

写真36　3号窯皿類（その2）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
547	3号窯 焼成室	8.3	5.1	2.5	-	ナデ後板目	横ナデ	良	良	Ⅰ	B	3	
548	3号窯 焼成室	(8.2)	4.3	(2.4)	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	E	2	
549	3号窯 焼成室	8.7	4.4	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	砂粒付着
550	3号窯 焼成室	9.1	5.1	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	ほぼ完形品
551	3号窯 焼成室	9.5	5.3	2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	完形品
552	3号窯 焼成室	8.9	5.4	2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	ほぼ完形品
553	3号窯 焼成室	9.4	5.1	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着
554	3号窯 焼成室	10.0	6.3	2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	砂粒付着
555	3号窯 焼成室	8.9	4.8	2.6	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	3	ほぼ完形品、内面器面荒れる
556	3号窯 焼成室	8.9	5.5	2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	完形品、砂粒付着
557	3号窯 焼成室	9.6	5.8	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け
558	3号窯 焼成室	9.5	5.4	3.1	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	3	生焼け、ほぼ完形品
559	3号窯 焼成室	9.3	5.2	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	2	生焼けっぽい、完形品
560	3号窯 焼成室	9.6	5.4	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	3	生焼け
561	3号窯 焼成室	9.7	5.8	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
562	3号窯 焼成室	9.1	5.3	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け
563	3号窯 焼成室	10.1	5.5	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、ひび割れ
564	3号窯 焼成室	9.5	5.4	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
565	3号窯 焼成室	9.7	5.8	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け、完形品
566	3号窯 焼成室	9.5	5.2	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け、完形品、ひび割れ
567	3号窯 焼成室	9.8	5.4	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け、ほぼ完形品、ひび割れ
568	3号窯 焼成室	9.4	5.5	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け、ほぼ完形品
569	3号窯 焼成室	10.0	5.4	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、ほぼ完形品
570	3号窯 焼成室	9.7	6.1	3.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け、完形品
571	3号窯 焼成室	9.7	5.4	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	3	生焼け、完形品
572	3号窯 焼成室	9.8	5.5	3.3	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、完形品
573	3号窯 焼成室	9.0	5.7	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け、完形品
574	3号窯 焼成室	9.6	5.7	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、完形品
575	3号窯 焼成室	9.4	5.2	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、完形品、砂粒付着
576	3号窯 焼成室	9.9	5.4	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、ほぼ完形品
577	3号窯 焼成室	9.5	5.4	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい、砂粒付着
578	3号窯 燃焼室	8.7	4.9	2.9	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	内面体部に遺物片付着
579	3号窯 燃焼室	9.1	5.6	3.0	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	3	天場もの、完形品、砂粒・釉付着
580	3号窯 燃焼室	9.0	4.8	2.6	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	B	1	天場もの、完形品、砂粒・釉付着
581	3号窯 燃焼室	8.8	5.3	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	
663	3号窯 焼成室	8.8	4.9	2.7	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	B	1	重ね焼片付着
664	3号窯 焼成室	(8.6)	4.5	(2.4)	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、砂粒付着
665	3号窯 焼成室	9.2	5.0	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片・砂粒付着
666	3号窯 焼成室	9.0	4.2	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着
667	3号窯 焼成室	(9.6)	(5.4)	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け

第22表　3号窯皿類観察表（その1）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
668	3号窯 焼成室	8.9	4.1	2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	砂粒付着
669	3号窯 焼成室	8.8	5.2	3.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	ゆがむ、釉付着
670	3号窯 焼成室	9.8	5.2	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	3	生焼けっぽい
671	3号窯 焼成室	9.3	5.1	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい
672	3号窯 焼成室	9.8	5.3	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	2	生焼け
673	3号窯 焼成室	10.2	(4.9)	3.3	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け
674	3号窯 焼成室	9.7	5.2	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け
675	3号窯 焼成室	10.0	5.3	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	2	ひび割れ
676	3号窯 焼成室	9.3	4.3	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	E	1	完形品、ゆがむ、砂粒付着
677	3号窯 焼成室	9.4	5.1	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	2	砂粒付着
678	3号窯 焼成室	9.4	5.0	2.8	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、砂粒付着、ほぼ完形品
679	3号窯 焼成室	8.7	4.4	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	砂粒付着
680	3号窯 焼成室	9.2	4.3	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、砂粒・カマクソ付着
681	3号窯 焼成室	9.4	4.8	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	砂粒付着、ひび割れ、ゆがむ
682	3号窯 焼成室	(9.6)	(5.1)	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
683	3号窯 焼成室	9.2	4.5	2.7	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、砂粒付着、ほぼ完形品
684	3号窯 焼成室	(8.8)	(5.3)	(2.5)	-	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	B	1	
685	3号窯 焼成室	(9.5)	5.4	(2.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け、ゆがむ
686	3号窯 焼成室	8.7	4.5	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着
687	3号窯 焼成室	9.4	底径5.5	(2.6)	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	高台全てハクリ、ゆがむ、砂粒・カマクソ付着
688	3号窯 焼成室	9.5	5.0	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	ひび割れ
689	3号窯 焼成室	9.1	5.2	3.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	B	1	ゆがむ、ひび割れ
690	3号窯 焼成室	9.1	5.2	3.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ付着、ゆがむ
691	3号窯 焼成室	9.1	4.8	2.9	もみ・砂	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・釉付着
692	3号窯 焼成室	9.7	(5.3)	(2.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
693	3号窯 焼成室	10.2	底径5.5	(2.9)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け、ゆがむ
694	3号窯 焼成室	9.8	(5.3)	(3.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
695	3号窯 焼成室	9.1	5.6	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
696	3号窯 焼成室	10.0	5.5	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け
697	3号窯 焼成室	9.7	6.0	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け、ゆがむ
698	3号窯 焼成室	10.0	(6.0)	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
699	3号窯 焼成室	9.7	5.4	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	B	3	生焼け
700	3号窯 焼成室	9.8	5.5	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
701	3号窯 焼成室	9.9	5.2	3.2	もみ	ナデ	横ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
702	3号窯 焼成室	9.8	5.5	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け
703	3号窯 焼成室	10.0	5.5	3.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
704	3号窯 焼成室	10.2	5.6	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
705	3号窯 焼成室	10.2	5.7	3.0	-	糸切り	横ナデ	不良	良	Ⅰ	D	3	生焼け
706	3号窯 焼成室	9.6	5.4	3.4	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け
707	3号窯 焼成室	(9.2)	(5.3)	(2.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
708	3号窯 焼成室	9.7	5.7	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼け
709	3号窯 焼成室	10.0	(5.9)	(3.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け、高台ほとんどハクリ
710	3号窯 焼成室	9.9	底径5.2	(3.1)	-	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、高台全てハクリ
711	3号窯 焼成室	9.7	(5.2)	3.1	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
712	3号窯 焼成室	9.9	5.3	3.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	Ⅱ	C	3	生焼け
713	3号窯 焼成室	9.9	5.5	3.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
714	3号窯 焼成室	9.9	5.3	3.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
715	3号窯 焼成室	(9.4)	5.4	(3.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
716	3号窯 焼成室	9.5	(5.1)	(3.1)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	Ⅱ	D	2	生焼け、高台ほとんどハクリ
717	3号窯 焼成室	9.5	4.9	3.3	もみ	不明	不明	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼け、底部中心部分欠損
718	3号窯 焼成室	9.9	5.0	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
719	3号窯 焼成室	(9.6)	(6.0)	(3.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい
720	3号窯 焼成室	8.5	4.8	3.2	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着、ゆがむ、ひび割れ
721	3号窯 焼成室	9.1	4.6	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	2	天場もの、カマクソ・釉・重ね焼片付着
722	3号窯 焼成室	10.0	5.6	3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
723	3号窯 焼成室	10.0	底径5.7	(3.1)	不明	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け、高台ほとんどハクリ
724	3号窯 焼成室	8.9	4.9	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	3	天場もの、砂粒・カマクソ付着、ゆがむ
725	3号窯 焼成室	8.6	4.3	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	ゆがむ、砂粒付着
726	3号窯 焼成室	(8.8)	(5.0)	(2.9)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
727	3号窯 焼成室	9.6	5.4	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	砂粒付着
728	3号窯 焚口	9.7	(5.1)	2.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	2	
729	3号窯 焚口	9.7	5.3	2.9	もみ	糸切り	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、カマクソ・釉付着
730	3号窯 燃焼室	(8.8)	5.0	(2.5)	-	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅰ	B	1	
731	3号窯 燃焼室	9.2	5.5	2.9	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅰ	B	1	ゆがむ
732	3号窯 燃焼室	9.2	4.7	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、重ね焼片付着、完形品
733	3号窯 燃焼室	(8.8)	5.0	(2.8)	-	糸切り	回転ナデ	良	良	Ⅰ	D	2	重ね焼片付着
734	3号窯 燃焼室	(8.4)	4.5	(3.0)	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
735	3号窯 燃焼室	8.9	5.6	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	B	1	天場もの、重ね焼片付着、完形品
736	3号窯 燃焼室	(5.0)	5.3	(2.5)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	
737	3号窯 燃焼室	(9.0)	4.6	(2.9)	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、砂粒・カマクソ・重ね焼片付着
738	3号窯 燃焼室	9.5	(5.1)	(3.2)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒付着
739	3号窯 燃焼室	9.2	5.2	3.0	もみ	糸切り	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、砂粒付着
740	3号窯 燃焼室	(9.6)	(5.0)	(3.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け

第22表　3号窯Ⅲ類観察表　（その2）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
741	3号窯 燃焼室	8.7	4.9	2.9	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、ゆがむ、ひび割れ
742	3号窯 燃焼室	9.8	5.2	2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、遺物片付着、ゆがむ
743	3号窯 焼成室	9.2	5.1	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	3	天場もの、砂粒付着
744	3号窯 焼成室	9.2	5.3	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、カマクソ・釉付着、ほぼ完形品
745	3号窯 焼成室	9.2	4.3	3.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、砂粒付着
746	3号窯 燃焼室灰層	(9.2)	(6.0)	(3.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	2	生焼けっぽい
747	3号窯 焚口	8.7	4.5	2.8	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・釉付着、ほぼ完形品
790	3号窯 焼成室	9.4	4.8	2.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	重ね焼片付着、外面底部中心部分に穴あり

第22表　３号窯皿類観察表（その３）

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	備考
		口径	高台径	器高						
817	3号窯 燃焼室	(8.6)	4.5	(2.1)	-	糸切り後ナデ	不明	良	良	重ね枚数:5枚 最下層の遺物は高台なし、重ね焼片付着、最上段は天場もの、カマクソ・釉付着

第23表　３号窯重ね皿類観察表

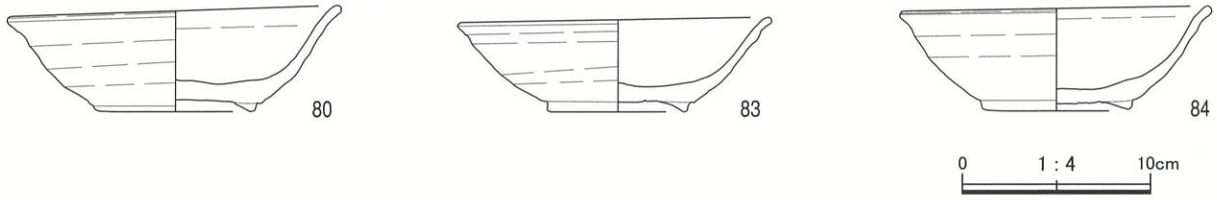
燃焼室焚口最終床面の上層赤茶色土層（のちに流入した土か？）含有遺物

最終床面に含まれていたものも含まれるが、ほとんどが上に乗っていた土から出土した遺物で床面下として遺物は取上げられている。また、燃焼室の床面から出土した遺物が少なかったためここに加えた。

碗

分類可能な遺物は２７点出土している。各部の法量は、口径が17.7～15.7cm、高台径が8.5～7.0cm、器高が5.5～5.2cmを測定した。その平均は、口径16.8cm、高台径7.8cm、器高5.2cmである。高台底面付着痕は籾痕２４点、籾・砂痕３点である。底面外面は糸切り後ナデ２６点、ナデ１点である。内面底部の見込みは回転ナデ２６点、不明１点である。焼成は良２６点、不良１点、胎土はすべて良である。

器形分類は、体部がすべてＤ類である。口縁端部は、１類１７点、２類１点、３類９点である。



第37図　３号窯床面上碗類遺物実測図　　写真37　３号窯床面上碗類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
80	3号窯 焚口 床面下	17.4	8.5	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	完形品、底部にひび割れ
81	3号窯 焚口 床面下	16.2	8.2	5.1	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品、底部にひび割れ
82	3号窯 焚口 床面下	16.4	7.5	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品
83	3号窯 焚口 床面下	16.3	7.4	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品、砂粒付着
84	3号窯 焚口 床面下	16.1	7.9	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品、砂粒付着
85	3号窯 焚口 床面下 床面下	16.2	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ほぼ完形品、砂粒付着
86	3号窯 焚口 床面下 床面下	15.7	7.5	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	

第24表　３号窯床面上碗類観察表　（その１）

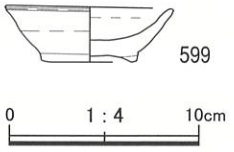
遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
501	3号窯 焼成室 床面下 床面下	(15.8)	(8.0)	(6.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
502	3号窯 焚口 床面下	(17.6)	7.0	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着、ゆがむ
503	3号窯 焚口 床面下	(16.6)	8.2	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	
504	3号窯 焚口 床面下	17.0	7.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
505	3号窯 焚口 床面下	17.3	7.7	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
506	3号窯 焚口 床面下	(15.8)	7.5	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
507	3号窯 焚口 床面下	17.0	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
508	3号窯 焚口 床面下	(17.6)	(8.2)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ付着、ゆがむ、高台楕円
509	3号窯 焚口 床面下	16.6	7.9	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
510	3号窯 焚口 床面下	(16.8)	(8.1)	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
511	3号窯 焚口 床面下	(16.8)	8.0	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
512	3号窯 焚口 床面下	(16.6)	7.6	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
513	3号窯 焚口 床面下	16.6	底径8.2	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
514	3号窯 焚口 床面下	(16.8)	8.0	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
515	3号窯 焚口 床面下	17.3	7.9	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
516	3号窯 焚口 床面下	16.6	7.5	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
517	3号窯 焚口 床面下	17.2	7.4	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・カマクソ付着、ゆがむ、釉たれ
518	3号窯 焚口 床面下	17.7	8.0	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、高台楕円
519	3号窯 焚口 床面下	16.6	8.1	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ
520	3号窯 焚口 床面下	17.5	7.4	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁楕円

第24表　３号窯床面上碗類観察表（その２）

皿

分類可能な遺物が１９点出土している。各部の法量は、口径が9.9～8.9cm、高台径が5.6～4.2cm、器高が3.1～2.6cmを測定した。その平均は、口径9.3cm、高台径5.1cm、器高2.8cmである。高台底面付着痕はすべて籾痕で、底面外面は糸切り後ナデ９点、ナデ１０点である。内面底部の見込みは回転ナデ１３点、不明６点である。焼成は良１５点、不良４点で、胎土はすべて良である。

器形分類は、体部がＣ類３点、Ｄ類１６点、口縁端部が１類１８点、２類１点、３類１点で、高台はすべてⅡ系である。



第38図　３号窯床面上皿類遺物実測図

写真38　３号窯床面上皿類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
599	3号窯 焚口 床面下	8.9	5.0	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
600	3号窯 焼成室 床面下	9.1	4.9	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	
601	3号窯 焚口 床面下	9.1	5.6	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼けっぽい
602	3号窯 焚口 床面下	9.4	5.1	2.6	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着
791	3号窯 焚口 床面下	9.8	5.6	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着、ゆがむ
792	3号窯 焼成室 床面下	9.4	5.1	3.1	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着、ゆがむ
793	3号窯 焚口 床面下	(9.8)	5.2	(2.5)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい
794	3号窯 焚口 床面下	9.2	4.6	2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	砂粒・重ね焼片付着、ゆがむ
795	3号窯 焚口 床面下	(9.4)	5.1	(3.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	
796	3号窯 焚口 床面下	(10.0)	5.1	(3.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
797	3号窯 焚口 床面下	9.9	5.5	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着
798	3号窯 焚口 床面下	9.3	5.0	3.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	口縁楕円、ゆがむ
799	3号窯 焚口 床面下	9.5	5.1	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
800	3号窯 焚口 床面下	9.2	5.0	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	カマクソ付着、完形品
801	3号窯 焚口 床面下	9.0	4.8	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着、完形品
802	3号窯 焚口 床面下	8.9	4.2	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着
803	3号窯 焚口 床面下	9.3	5.3	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒・小石付着、完形品
804	3号窯 焚口 床面下	9.7	5.4	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	2	生焼けっぽい
805	3号窯 焚口 床面下	9.5	5.2	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、重ね焼片付着、ゆがむ、完形品

第25表　３号窯床面上皿類観察表

鉢

出土したもののうち、分類可能な遺物は４点出土している。各部の法量は、口径が19.8～19.6cm、高台径が9.6～8.5cm、器高が7.2～6.9cmを測定した。その平均は、口径19.7cm、高台径9.0cm、器高7.1cmである。高台底面の付着痕はすべて籾痕である。外面底面の調整痕は糸切り後ナデ２点、ナデ１点、不明１点である。内面底部の見込みは回転ナデ３点、不明１点である。胎土は最良３点、不良１点である。焼成は良２点、不良２点である。

器形分類は、体部がすべてＢ類である。口縁端部はすべて１類である。４点すべてが片口鉢である。遺物番号８０８はほぼ完形品で、遺物番号８０９は完形品ではあるが両方とも焼成が不良で生焼けである。

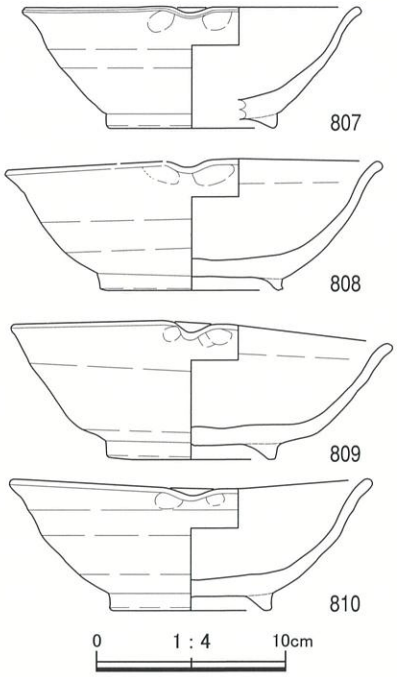


写真39　３号窯鉢類

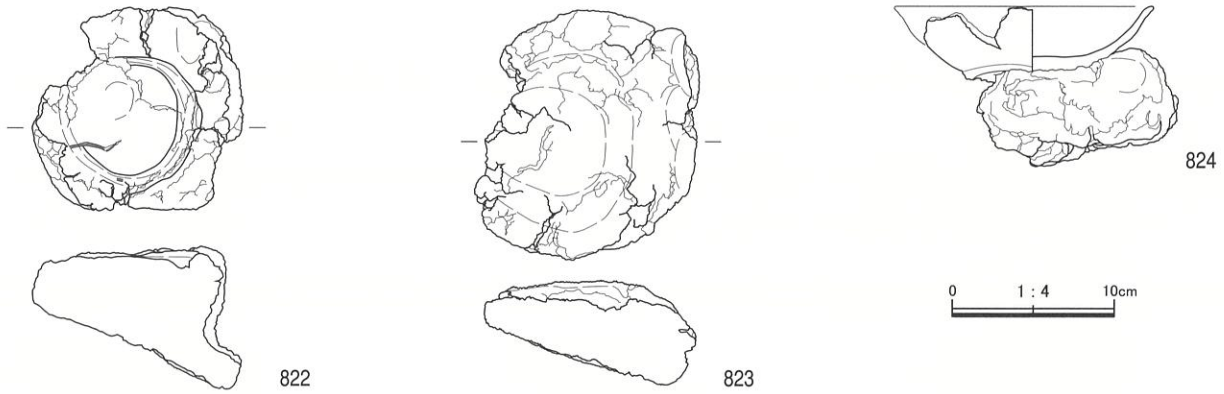
第39図　３号窯鉢類遺物実測図と写真

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
807	3号窯 焼成室	(17.6)	(9.0)	(6.3)	もみ	不明	不明	良	最良	B	1	片口鉢、カマクソ付着、底部4/5欠損
808	3号窯 焼成室	19.6	9.6	6.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	最良	B	1	片口鉢、ほぼ完形品、生焼け
809	3号窯 焼成室	19.8	8.9	7.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	最良	B	1	片口鉢、完形品、生焼け
810	3号窯 燃焼室	(18.9)	8.5	(6.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B	1	片口鉢

第26表　３号窯鉢類観察表

焼台

窯道具として焼成室と燃焼室に残されていた。その中から状態の良いものを焼成室２点、燃焼室から１点を紹介する。最大長は12.4～13.9cm、最大幅は12.5～15.4cm、最大幅は5.5～7.4cmである。遺物番号８２２は上面平坦部に凹みのある馬蹄形をしている。遺物番号８２３は上面担部に凹みがあり、傾斜角度は緩やかである。色調は両方とも黒色である。遺物番号８２４は焼台に碗が１枚付着し、色調は黒色だが自然釉が付着している。



第40図　３号窯焼台遺物実測図　　写真40　３号窯焼台

遺物番号	出土位置	法量（cm）			焼成	備考
		最大長	最大幅	最大高		
822	3号窯 焼成室	13.9	12.5	7.4	良	一部欠損、遺物との接触面にセンイ痕付着
823	3号窯 焼成室	(12.9)	15.4	5.5	良	一部欠損、平たい
824	3号窯 燃焼室	12.4	13.4	測定不能	良	碗の遺物１つ貼り付く

第27表　３号窯焼台観察表

灰原

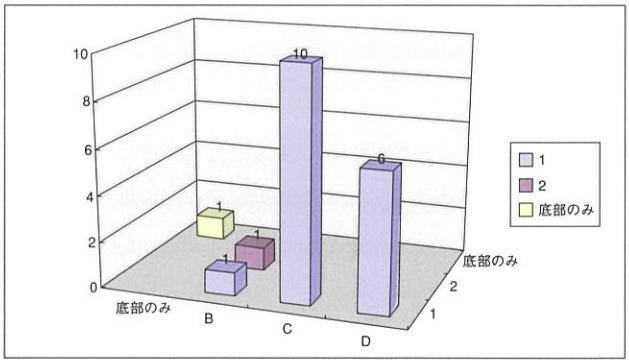
碗

出土したもののうち、分類可能なものは１９点である。各部の法量は、口径が17.0～15.7cm、高台径が8.7～6.9cm、器高が5.4～5.3cmを測定した。その平均は、口径16.2cm、高台径8.1cm、器高5.4cmである。高台底面の付着痕はすべて籾痕である。底面外面の調整痕は糸切り１点（5.3%）、糸切り後ナデ１４点（73.7%）、ナデ３点（15.7%）、ナデ後センイ痕１点（5.3%）である。内面底面の見込みは回転ナデ１０点（52.6%）、横ナデ９点（47.4%）である。胎土は最良４点（21%）、良１４点（73.7%）、不良１点（5.3%）である。焼成は最良３点（15.8%）、良１４点（73.7%）、不良２点（10.5%）である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

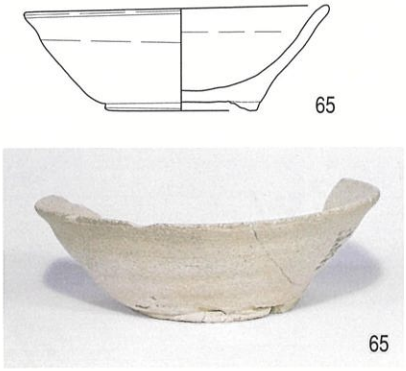
	口縁端部			
体 部	1類	2類	底部のみ	総計
B類	1(5.3%)	1(5.3%)	0	2(10.5%)
C類	10(52.6%)	0	0	10(52.6%)
D類	6(31.5%)	0	0	6(31.5%)
底部のみ	0	0	1(5.3%)	1(5.3%)
総計	17(89.4%)	1(5.3%)	1(5.3%)	19(100%)

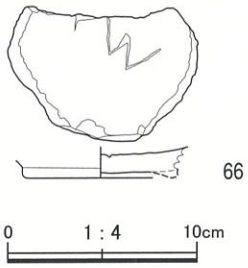
第28表　３号窯灰原出土碗類器形分類別組合せ表



第41図　３号窯灰原碗類器形分類別組成図

遺物番号６６は底部のみの遺物であるが、内面底部に「W」に類似した模様のある遺物である。





第42図　３号窯灰原碗類遺物実測図　　写真41　３号窯灰原碗類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
65	3号窯 灰原	16.0	8.1	5.4	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	C	1	
66	3号窯 灰原	-	(8.2)	-	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存、「W」状の模様
407	3号窯 灰原	(16.0)	8.3	(5.3)	もみ	糸切り	回転ナデ	最良	最良	D	1	高台の作り丁寧
408	3号窯 灰原	(15.6)	6.9	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	D	1	高台楕円
409	3号窯 灰原	(16.4)	8.4	(5.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	最良	最良	C	1	
410	3号窯 灰原	(17.0)	8.0	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
411	3号窯 灰原	(16.6)	7.9	(5.1)	もみ	ナデ後センイ痕	横ナデ	良	良	D	1	体部ひび割れ
412	3号窯 灰原	(17.0)	(9.4)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	B	2	ゆがむ
413	3号窯 灰原	(16.4)	8.6	(4.7)	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
414	3号窯 灰原	(16.6)	(8.3)	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	C	1	
415	3号窯 灰原	15.7	8.6	5.4	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
416	3号窯 灰原	(16.8)	8.0	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着
417	3号窯 灰原	(16.6)	7.9	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
418	3号窯 灰原	17.0	8.7	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1	重ね焼片付着
419	3号窯 灰原	(17.2)	(9.0)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ゆがむ
420	3号窯 灰原	(16.0)	(8.8)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	ゆがむ
421	3号窯 灰原	(16.0)	8.2	(4.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	C	1	砂粒付着
422	3号窯 灰原	(17.0)	7.8	(4.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着
423	3号窯 灰原	(16.8)	8.6	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ

第29表　３号窯灰原碗類観察表

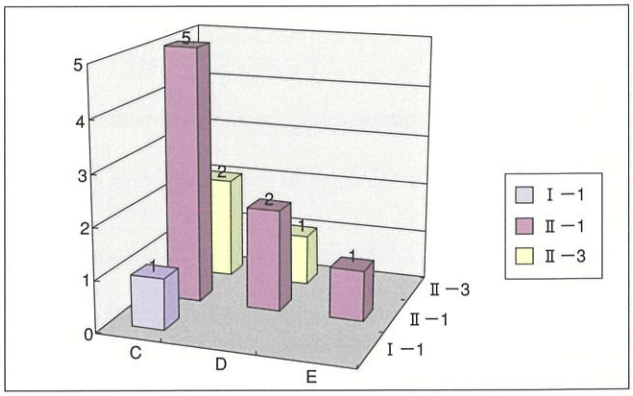
皿

出土したもののうち、分類可能なものは１２点である。各部の法量は、口径が9.1～8.5cm、高台径が5.2～4.2cm、器高が3.0～2.7cmを測定した。その平均は、口径8.8cm、高台径4.8cm、器高2.9cmである。高台底面の付着痕は籾痕１１点、高台なし１点である。底面外面の調整痕は糸切り１点、糸切り後ナデ４点、ナデ７点である。内面底部の見込みは回転ナデ２点、横ナデ５点、不明５点である。胎土は良１１点、不良１点である。焼成は全て良である。

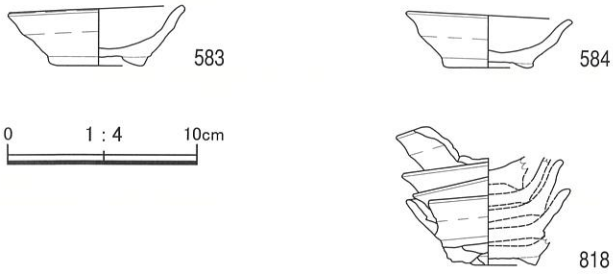
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台　口縁端部					
	Ⅰ系	Ⅰ系 計	Ⅱ系		Ⅱ系 計	総計
体部	1類		1類	3類		
C類	1(8.3%)	1(8.3%)	5(41.6%)	2(16.6%)	7(58.6%)	8(66.6%)
D類	0	0	2(16.6%)	1(8.3%)	3(25%)	3(25%)
E類	0	0	1(8.3%)	0	1(8.3%)	1(8.3%)
総計	1(8.3%)	1(8.3%)	8(66.6%)	3(25%)	11(91.6%)	12(100%)

第30表　３号窯灰原出土皿類器形分類別組合せ表



第43図　３号窯灰原皿類器形分類別組成図



第44図　３号窯灰原皿類遺物実測図と写真

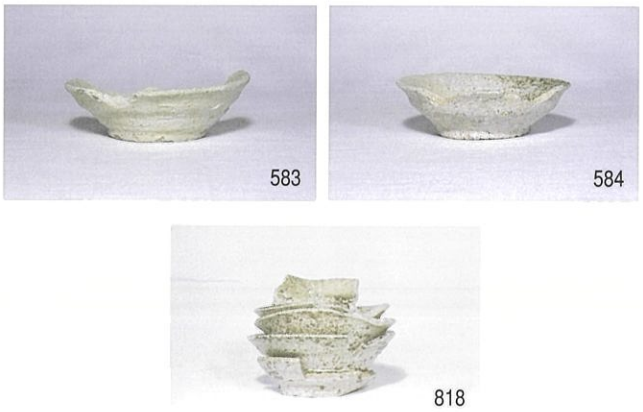


写真42　３号窯灰原皿類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
583	3号窯 灰原	9.1	5.1	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	3	
584	3号窯 灰原	8.6	4.7	2.7	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	重ね焼片付着
751	3号窯 灰原	(8.8)	(5.4)	(2.8)	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	天場もの、砂粒付着
753	3号窯 灰原	(9.0)	(5.1)	(2.8)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	重ね焼片付着
754	3号窯 灰原	(8.8)	4.8	(2.4)	-	糸切り	横ナデ	良	良	Ⅰ	C	1	
755	3号窯 灰原	(8.4)	5.0	(2.8)	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、釉付着、高台楕円
756	3号窯 灰原	(8.0)	5.2	(2.5)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・重ね焼片付着
757	3号窯 灰原	(8.2)	4.2	(2.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	E	1	重ね焼片付着
758	3号窯 灰原	(9.0)	4.3	(2.2)	もみ	ナデ	不明	良	不良	Ⅱ	C	3	天場もの、砂粒・釉付着
759	3号窯 灰原	8.8	(5.2)	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	C	1	重ね焼片付着、底部中心部分欠損
760	3号窯 灰原	(9.2)	4.6	(2.6)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒付着

第31表　３号窯灰原皿類観察表

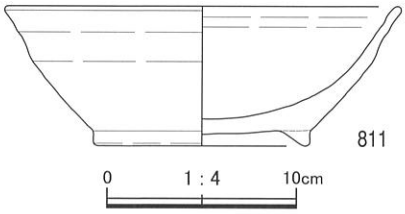
遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	備考
		口径	高台径	器高						
818	3号窯 灰原	-	-	-	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	最良	重ね枚数:5枚 最下層の遺物は高台あり、最上段は天場もの、カマクソ・釉付着、ゆがむ

第32表　３号窯灰原重ね皿類観察表

鉢

出土したもののうち、分類可能なものは１点である。各部の法量は、推定値を含む口径（20.7）cm、高台径11.4cm、器高（7.4）cmである。高台底面の付着痕は籾痕である。外面底面の調整痕は糸切り後ナデである。内面底部の見込みは回転ナデである。胎土は不良ながら、焼成は良である。

器形分類は、体部がＡ類、口縁端部が１類である。



第45図　３号窯灰原鉢類遺物実測図と写真

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
811	3号窯 灰原	(20.9)	11.4	(7.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	A	1	

第33表　３号窯灰原鉢類観察表

壺

灰原から分類可能なものでは無いが、壺の体部の破片が１点出土している。色調は碗とよく似た灰白色で薄く自然釉がかかっている。胎土と焼成は最良である。

写真43　３号窯灰原壺類

ＳＫに関する遺物

ＳＫ０１

碗

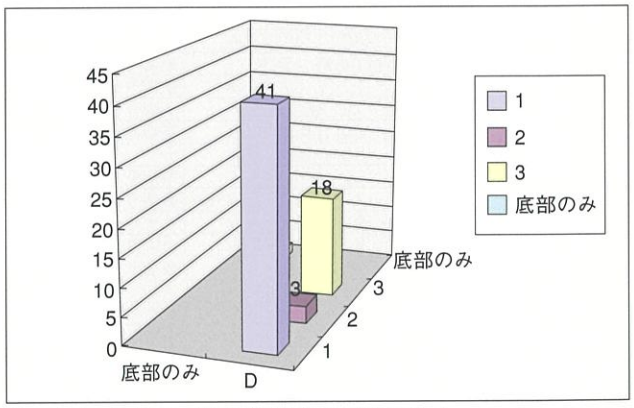
出土したもののうち、分類可能なものは６４点である。２号窯内の遺物同様に碗全体の約12%を占めている。

各部の法量は、口径が17.9～15.6cm、高台径が9.2～7.2cm、器高が5.7～4.6cmを測定した。その平均は、口径16.9cm、高台径8.0cm、器高5.2cmである。高台底面の付着痕は、籾痕５８点（90.6%）、籾・砂痕３点（4.7%）、高台剥離３点（4.7%）である。外面底面の調整痕は、糸切り後ナデ５６点（87.5%）、ナデ８点（12.5%）である。内面底部の見込みは、回転ナデ５６点（87.7%）、横ナデ２点（3.1%）、不明６点（9.3%）である。胎土は、最良１点、良６３点である。焼成は良６０点、不良４点である。

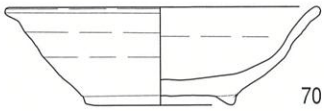
器形分類については、下記の表で記すことにした。

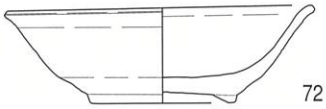
	口縁端部				
体部	1類	2類	3類	底部のみ	総計
D類	41(64.0%)	3(4.7%)	18(28.1%)	0	62(96.9%)
底部のみ	0	0	0	2(3.1%)	2(3.1%)
総計	41(64.0%)	3(4.7%)	18(28.1%)	2(3.1%)	64(100%)

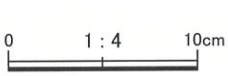
第34表　ＳＫ01出土碗類器形分類別組合せ表



第46図　ＳＫ01碗類器形分類別組成図







第47図　ＳＫ01碗類遺物実測図　　写真44　ＳＫ01碗類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
67	SK01	17.2	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	内面体部に重ね焼片・砂粒付着
68	SK01	16.2	7.5	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
69	SK01	17.6	8.9	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
70	SK01	16.4	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品
71	SK01	17.0	8.4	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
72	SK01	16.1	7.8	5.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	3	砂粒付着、ほぼ完形品、穴数点あり
73	SK01	17.1	7.7	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ほぼ完形品
74	SK01	16.9	8.8	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
426	SK01	(16.6)	8.0	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
427	SK01	17.1	(7.5)	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片・砂粒付着
428	SK01	16.7	7.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部ひび割れ
429	SK01	(16.4)	8.7	(5.4)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
430	SK01	-	7.8	-	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	-	-	底部のみ残存、砂粒付着、釉たれ
431	SK01	(18.0)	8.2	(5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ
432	SK01	(17.4)	(8.5)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	高台楕円
433	SK01	16.8	7.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
434	SK01	16.6	9.0	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、口縁楕円
435	SK01	16.4	8.4	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着
436	SK01	-	7.8	-	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存
437	SK01	17.1	8.1	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
438	SK01	(17.0)	7.4	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、釉たれ
440	SK01	17.7	7.9	4.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、砂粒付着、ゆがむ
441	SK01	16.1	7.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	3	砂粒付着
442	SK01	(16.4)	7.5	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片・砂粒付着
443	SK01	(15.6)	7.5	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁に砂粒付着
444	SK01	17.3	8.2	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着
445	SK01	16.4	8.3	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
446	SK01	16.3	7.5	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片・カマクソ付着、ゆがむ
447	SK01	17.2	8.0	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	
448	SK01	17.0	7.8	4.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ付着、口縁楕円
449	SK01	(17.2)	7.7	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	口縁楕円
450	SK01	17.2	底径8.3	4.7	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台全てハクリ、砂粒付着
451	SK01	17.4	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
452	SK01	(17.4)	8.0	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
453	SK01	16.8	7.4	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着
454	SK01	17.3	(8.2)	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着、ゆがむ
455	SK01	17.2	底径8.6	4.7	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台全てハクリ
456	SK01	16.9	7.7	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
457	SK01	測定不能	7.9	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	3	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ
458	SK01	(17.0)	8.0	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
459	SK01	(17.2)	(8.0)	(5.3)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
460	SK01	16.2	7.2	5.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ付着、ほぼ完形品、ゆがむ
461	SK01	17.5	7.7	4.7	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ほぼ完形品、口縁楕円、砂粒・カマクソ・重ね焼片付着
462	SK01	17.0	9.2	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2	
463	SK01	(17.2)	8.0	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、底部にひび割れ
464	SK01	16.6	7.8	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
465	SK01	17.3	(8.6)	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台ほとんどハクリ
466	SK01	16.8	(7.9)	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	砂粒付着
467	SK01	(17.4)	(8.3)	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	ゆがむ
468	SK01	(17.8)	底径8.7	(4.4)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台全てハクリ
469	SK01	16.9	7.6	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部にひび割れ、ゆがむ
470	SK01	17.4	9.0	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	高台楕円
471	SK01	(17.2)	(7.4)	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着、ゆがむ、高台ほとんどハクリ
472	SK01	(16.4)	7.5	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着
473	SK01	(17.2)	7.9	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、高台楕円
474	SK01	17.1	8.5	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
475	SK01	17.5	7.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	遺物片・砂粒付着
476	SK01	15.6	7.9	5.5	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、砂粒付着、ゆがむ
477	SK01	16.7	8.1	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
478	SK01	17.0	8.4	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	底部にひび割れ
479	SK01	17.9	8.7	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
480	SK01	(17.0)	(8.2)	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
481	SK01	15.9	8.1	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、砂粒付着
482	SK01	測定不能	7.9	測定不能	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	ゆがむ、砂粒・カマクソ・重ね焼片付着

第35表　ＳＫ01碗類観察表

皿

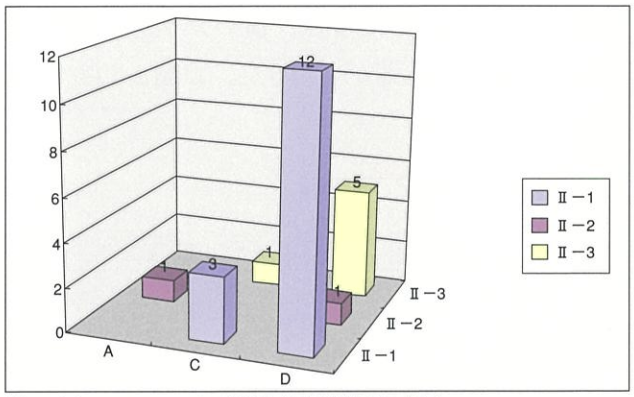
出土したもののうち、分類可能なものは２３点である。

各部の法量は、口径が10.1～8.8cm、高台径が5.6～4.2cm、器高が3.2～2.4cmを測定した。その平均は、口径9.3cm、高台径5.0cm、器高2.8cmである。高台底面の付着痕は、籾痕２２点、籾・砂痕１点である。外面底面の調整痕は、糸切り後ナデ１４点、ナデ９点である。内面底部の見込みは、回転ナデ１８点、横ナデ１点、不明４点である。胎土はすべて良である。焼成は、良１８点、不良５点である。

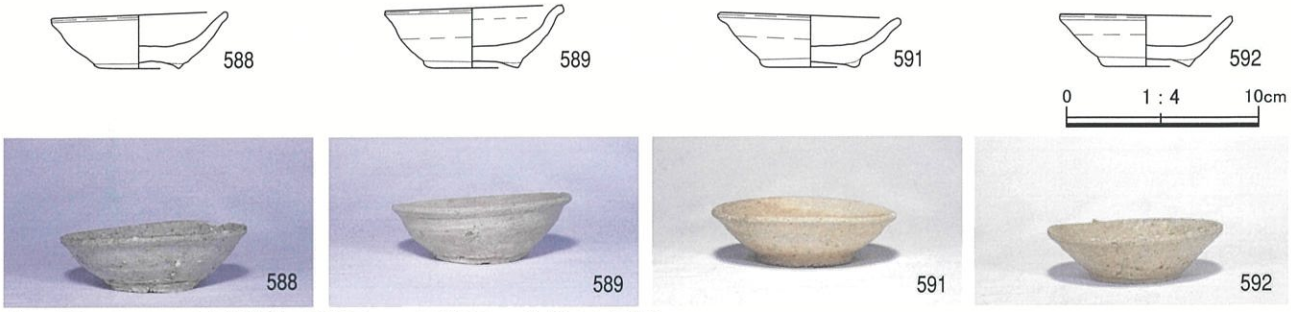
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台　口縁端部				
	Ⅱ系			Ⅱ系 計	総計
体部	1類	2類	3類		
A類	0	1(4.3%)	0	1(4.3%)	1(4.3%)
C類	3(13.0%)	0	1(4.3%)	4(17.4%)	4(17.3%)
D類	12(52.2%)	1(4.3%)	5(21.7%)	18(78.3%)	18(78.2%)
総計	15(65.2%)	2(8.7%)	6(26.1%)	23(100%)	23(100%)

第36表　ＳＫ01出土皿類器形分類別組合せ表



第48図　ＳＫ01皿類器形分類別組成図



第49図　ＳＫ01皿類遺物実測図　　写真45　ＳＫ01皿類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
585	SK01	9.2	(5.0)	(2.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
586	SK01	9.5	(4.9)	(2.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	
587	SK01	9.3	5.5	2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片・砂粒付着、内面底部にくぼみ
588	SK01	9.3	4.7	2.7	もみ・砂	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	2	砂粒付着、ほぼ完形品
589	SK01	9.3	5.0	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい、完形品
590	SK01	8.8	5.1	2.6	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片付着
591	SK01	9.4	5.2	2.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	C	1	生焼けっぽい、完形品
592	SK01	9.0	4.6	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	A	2	天場もの、完形品、砂粒付着
593	SK01	8.9	4.2	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	砂粒付着
594	SK01	9.3	5.0	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	生焼けっぽい、完形品
762	SK01灰層	8.8	4.6	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい、口縁楕円、ゆがむ
763	SK01	(9.2)	(4.8)	(3.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
764	SK01	9.0	4.2	2.4	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、砂粒付着
765	SK01	(10.0)	5.0	(3.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	3	口縁楕円
766	SK01	8.9	4.6	2.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	カマクソ付着、ゆがむ
767	SK01	10.1	5.5	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	ひび割れ、ゆがむ
768	SK01	9.6	5.6	2.6	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
769	SK01	(9.4)	5.2	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい
770	SK01	9.5	5.2	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	ひび割れ、ゆがむ
771	SK01	9.4	5.3	2.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい、ひび割れ
772	SK01	9.6	5.3	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	Ⅱ	D	1	生焼け
773	SK01	9.0	5.3	3.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着、完形品
774	SK01	9.3	4.6	3.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい、ひび割れ、ゆがむ

第37表　ＳＫ01皿類観察表

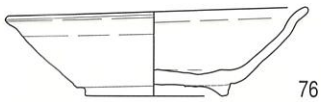
ＳＫ０２

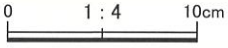
碗

出土したもののうち、分類可能なものは１９点である。

各部の法量は、口径が16.6～15.5cm、高台径が8.5～7.2cm、器高が5.3～4.4cmを測定した。その平均は、口径15.9cm、高台径8.0cm、器高4.9cmである。高台底面の付着痕は籾痕１６点、籾・砂痕３点である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデ１５点、糸切り後センイ痕１点、ナデ３点である。内面底部の見込みは回転ナデ１２点、横ナデ５点、不明２点である。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がＣ類６点、Ｄ類１３点で、口縁端部はすべて１類であった。





第50図　ＳＫ02碗類遺物実測図　　写真46　ＳＫ02椀類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
75	SK02	16.6	7.7	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片･カマクソ付着
76	SK02	15.8	7.6	4.4	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
77	SK02	15.6	8.3	4.9	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
483	SK02	(15.8)	7.6	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
484	SK02	(16.6)	8.0	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片･砂粒付着
485	SK02	(16.4)	8.0	(4.5)	もみ	ナデ	不明	良	良	C	1	底部中心部分欠損、重ね焼片付着
486	SK02	(16.2)	7.8	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	重ね焼片･カマクソ付着
487	SK02	15.5	8.5	5.3	もみ･砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ゆがむ
488	SK02	16.1	8.4	4.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片･砂粒付着
489	SK02	(15.6)	8.3	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
490	SK02	(15.4)	8.1	(5.6)	もみ	糸切り後センイ痕	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
491	SK02	(16.8)	7.9	(4.9)	もみ･砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
492	SK02	(15.2)	7.9	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
493	SK02	(16.8)	7.5	(4.4)	もみ･砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片･カマクソ付着、ゆがむ
494	SK02	(15.4)	(8.0)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
495	SK02	16.0	7.2	4.6	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、砂粒･カマクソ付着、釉たれ
496	SK02	15.7	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	カマクソ付着
497	SK02	15.7	8.1	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、口縁楕円
498	SK02	15.7	8.3	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片･カマクソ付着

第38表　ＳＫ02碗類観察表

皿

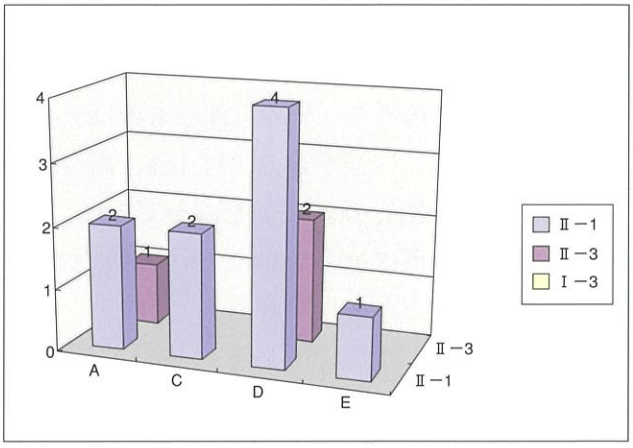
出土したもののうち、分類可能なものは１２点である。

各部の法量は、口径が9.2～8.5cm、高台径が5.1～4.2cm、器高が3.1～2.7cmを測定した。その平均は、口径8.8cm、高台径4.8cm、器高2.9cmである。高台底面付着痕は籾痕１１点、籾・砂痕１点である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデ４点、ナデ８点である。内面底部の見込みは回転ナデ３点、横ナデ１点、不明８点である。不明なのはすべて天場ものだからである。胎土は良が１１点、不良１点である。焼成はすべて良である。

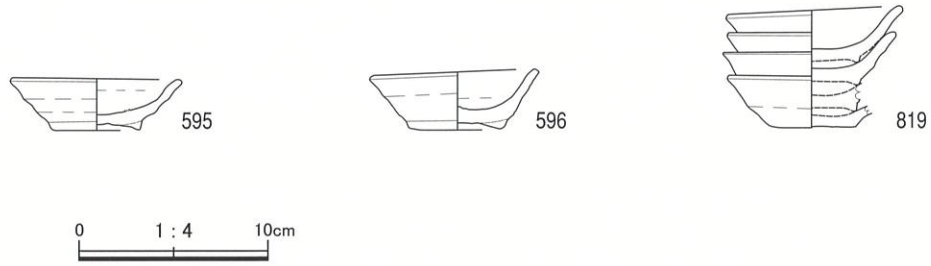
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台　　口縁端部			
	Ⅱ系		Ⅱ系 計	総計
体部	1類	3類		
A類	2(16.7%)	1(8.3%)	3(25%)	3(25%)
C類	2(16.7%)	0	2(16.7%)	2(16.7%)
D類	4(33.3%)	2(16.7%)	6(50%)	6(50%)
E類	1(8.3%)	0	1(8.3%)	1(8.3%)
総計	9(75%)	3(25%)	12(100%)	12(100%)

第39表　ＳＫ02出土皿類器形分類別組合せ表



第51図　ＳＫ02皿類器形分類別組成図



第52図　ＳＫ02皿類遺物実測図　　写真47　ＳＫ02皿類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
595	SK02	8.7	4.8	2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	重ね焼片付着
596	SK02	8.6	5.1	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	A	3	
775	SK02 灰層	(8.8)	4.8	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	砂粒付着
776	SK02 灰層	8.7	4.8	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	A	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着、ゆがむ
777	SK02 灰層	8.9	4.7	2.8	もみ	ナデ	不明	良	不良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着
778	SK02 灰層	8.9	(4.7)	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着
779	SK02	8.7	4.6	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	A	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着
780	SK02	9.0	4.2	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着
781	SK02	9.2	4.9	3.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	3	天場もの、ゆがむ、高台楕円
782	SK02	(9.6)	5.1	(3.0)	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片付着
783	SK02	8.5	4.6	2.7	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	E	1	天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着、完形品
784	SK02	8.8	4.7	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	Ⅱ	D	1	天場もの、重ね焼片付着、完形品

第40表　ＳＫ02皿類観察表

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	備考
		口径	高台径	器高						
819	SK02	(8.8)	4.5	(2.7)	-	ナデ後センイ痕	不明	良	良	重ね枚数：4枚 最下層の遺物は高台なし、最上段は天場もの、砂粒・カマクソ・釉付着

第41表　ＳＫ02重ね皿観察表

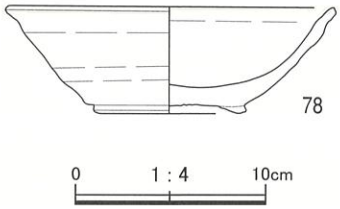
ＳＫ０３

碗

出土したもののうち、分類可能なものは２点である。

各部の法量は、口径が18.0～17.1cm、高台径が8.0cm、器高が5.6～4.8cmを測定した。その平均は、口径17.6cm、高台径8.0cm、器高5.2cmである。高台底面付着痕は籾痕１点、高台すべて剥離１点である。底面外面の調整痕は糸切り１点、糸切り後ナデ１点である。内面底部の見込みは回転ナデ２点である。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がＣ類１点、Ｄ類１点である。口縁端部は、２類１点、３類１点である。



第53図　ＳＫ０３碗類遺物実測図　　写真48　ＳＫ０３碗類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
424	南北トレンチ	16.1	9.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2	
425	南北トレンチ	(17.2)	9.3	(5.6)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	

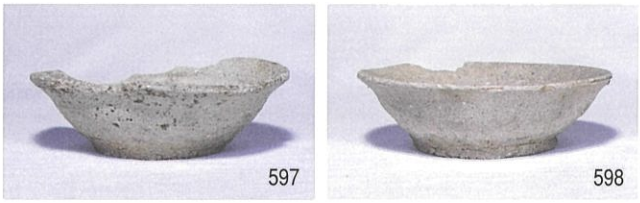
第42表　ＳＫ03碗類観察表

皿

出土したもののうち、分類可能なものは３点である。

各部の法量は、口径が9.2～9.0cm、高台径が5.4～4.5cm、器高が2.9～2.8cmを測定した。その平均は、口径9.1cm、高台径5.0cm、器高2.8cmである。高台底面付着痕はすべて籾痕である。底面外面の調整痕はすべて糸切り後ナデである。内面底部の見込みもすべて回転ナデである。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がＣ類１点、Ｄ類２点である。口縁端部がすべて１類である。高台はすべてⅡ系である。



第54図　ＳＫ03皿類遺物実測図　　写真49　ＳＫ０３皿類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
597	SK03	9.0	4.5	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	C	1	
598	SK03	9.1	5.2	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	
785	SK03 灰層	9.2	5.4	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	砂粒・カマクソ付着

第43表　ＳＫ03皿類観察表

南北トレンチの遺物

碗と皿含めて分類可能なものが3点出土している。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
424	南北トレンチ	16.1	9.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2	
425	南北トレンチ	(17.2)	9.3	(5.6)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	

第44表　南北トレンチ碗類観察表

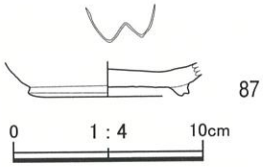
遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
761	南北トレンチ	(7.8)	(4.7)	(2.7)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	Ⅱ	D	1	

第45表　南北トレンチ皿類観察表

表採

碗

表採からの出土ではあるが、底部のみの遺物で遺物番号87の内面底部にアルファベットの「W」に類似した模様のある遺物があった。



第55図　表採碗類遺物実測図

写真50　表採碗類

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
87	表採	-	8.5	-	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存、「W」状の模様
521	表採	15.7	8.3	4.9	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
522	表採	15.4	8.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	天場もの、砂粒付着
523	表採	17.4	8.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ、釉たれ
524	表採	(16.4)	8.2	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
525	表採	(16.6)	(8.9)	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	不良	B	1	
526	表採	(16.4)	9.7	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
527	表採	(16.4)	8.5	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	A	1	高台に1条入る
528	表採	(16.4)	8.0	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着

第46表　表採碗類観察表

皿

分類可能なものが1点出土している。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
806	表採	(9.0)	5.1	(2.7)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	不良	Ⅱ	D	1	重ね焼片付着

第47表　表採皿類観察表

鉢

底部のみの出土ではあるが、今回出土した中で最大の高台径があり12.4cmを計測した。

遺物番号	出土位置	法量（cm）			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
812	表採	-	12.4	-	不明	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存

第48表　表採鉢類観察表

第3節　考　察

深廻間Ｂ古窯跡群は、第２節や遺物観察表をもとに考えると、主な生産品は碗類と皿類である。ここでは、碗類と皿類の法量のまとめと器形分類のデータなどの比較検討をしたいと思う。

遺物のほとんどが窯内から出土している。３号窯から最も多く出土し、続いて２号窯から多く出土した。窯以外からは、面積はあまりないが灰原からも多少出土している。３号窯の焚口付近の前庭部には、遺構が横一直線状に３つ並び、その中の１つには遺物が固まって出土した。それらを含めてデータの対象とした。

碗類は、全体で５２８点出土し、その内訳のほとんどは窯内からで、窯内だけで３８０点出土しているが、その割合は約70％占めている。その中でも、３号窯からの遺物は３１２点で大半の約60％を占める。

皿類は、全体で２７８点出土し、その内訳も碗と同様に窯内からで、窯内だけで２３８点出土し、全体の約85％を占めていた。１号窯からは５点しかなかったが、２号窯は76点で約27％、３号窯は１２０点で約43％の割合を占めている。

今回調査した遺跡から出土した碗類・皿類のすべての平均・最大・最小値と、各窯体の窯内遺物の平均も下記の表に記してみた。

器種	碗類			皿類		
	口径	高台径	器高	口径	高台径	器高
全体平均値	16.6	8.1	5.2	9.1	4.9	2.8
全体最大値	18.2	9.9	6.0	10.2	6.3	3.4
全体最小値	15.1	6.6	4.4	7.4	3.6	2.0
1号窯平均値	16.0	8.1	5.1	7.4	3.9	2.0
2号窯平均値	16.3	8.1	5.2	8.7	4.4	2.6
3号窯平均値	16.6	8.1	5.1	9.4	5.2	3.0

第49表　碗類皿類の法量比較表

１号窯の平均値は数が少ないので比較するのは難しいが、２号窯と３号窯を比較すると、３号窯のものが全体的にやや大きい事が分かる。

また、数枚だが碗類の中には、外面底面を糸切りなどしたのみで高台が明らかに付着しないものが存在した。２号窯と３号窯の窯内から出土し、体部と口縁端部の作りは他の碗類と同様に差異はなく、ただ高台が付着しないだけである。同じように、瀬戸市の太子Ａ窯跡①という遺跡から高台のない碗が出土し「(平底)碗」として紹介されている。

大府市域内で発掘調査した他の窯業遺跡の平均値と比べて見ると、海陸庵古窯群の碗（平均値で口径15.9cm、高台径7.1cm、器高5.0cm）よりも大きく、ガンジ山Ａ古窯群の碗（窯と灰原の平均値で口径16.4cm、高台径8.0cm、器高4.8cm）よりも若干大きく、神明古窯群の碗（２号窯の平均値で口径16.7cm、高台径7.9cm、器高5.2cm）でほぼ同様であった。今回の調査区付近で、以前に調査している深廻間Ａ古窯群の碗の法量は、窯と灰原の平均値で口径16.2cm、高台径8.2cm、器高5.0cmで、深廻間

Ｂ古窯跡群の方がやや大きいことがわかった。

次に碗の器形分類は、体部のほとんどがＤ類で曲線的に立ち上がるが、口縁付近で外反するもので３９６点であった。口縁端部については、１類の丸みを帯びたものが一番多く３９７点で、偶然にも体部より１点多かったのである。そのため両方とも全体の75%の割合を占めていた。当然組合せで一番多かったのは、体部がＤ類の口縁端部が１類の組合せ２８６点で、全体の54%を占めていた。

体部＼口縁端部	1類	2類	3類	底部のみ	総計
A類	7	2	0	0	9
B類	10	3	0	0	13
C類	94	7	4	0	105
D類	286	31	79	0	396
底部のみ	0	0	0	5	5
総計	397	43	83	5	528

第50表　碗類器形分類別組合せ表

皿類についてはもう１つ比較対象となるものがある。それは、底面外面に高台を有するものと、高台がないものである。高台を有するものが２０１点（72%）で、高台が無いものが７７点（27%）である。高台のタイプ別に各部の法量の平均と全体平均との変化を比べてみる事にした。その結果が次の表で、全体平均は上記の表のとおりである。

部位等＼器形	Ⅰ系	Ⅱ系
口径	8.6	9.3
底径／高台径	4.4	5.1
器高	2.5	2.9

第51表　皿類高台別法量平均表

高台がないものは全体平均よりもすべてに於いてやや小さく、高台を有するものは全体平均よりもすべてやや大きかった。

碗と同じく市内の遺跡と比較してみると、海陸庵古窯群の皿（平均値で口径7.9cm、底径3.7cm、器高2.1cm）やガンジ山Ａ古窯群の皿（窯と灰原の平均値で口径8.5cm、底径4.8cm、器高2.1cm）よりはやや大きく、神明古窯群の皿（灰原の平均値で口径9.3cm、高台径5.1cm、器高2.6cm）とはほぼ同じか、若干小さめという結果になった。以前に調査している深廻間Ａ古窯群の皿の法量は、窯と灰原の平均値で口径8.8cm、高台径4.9cm、器高2.5cmで、碗類と同様に深廻間Ｂ古窯跡群の方がやや大きめである。

皿類の器形分類は、まず全体で見ると体部で多いのは、Ｄ類の体部が曲線的に立ち上がるが、口縁部付近で外反するもので１４５点（52%）である。口縁端部は、１類が多く２０９点（75%）である。また、高台はⅠ系が７７点（28%）で、Ⅱ系が２０１点（72%）で高台を有するものが多い。Ⅰ系のものは、口縁端部は全体同様に１類が６８点（24%）で多いが、体部はＣ類が２６点と多く次にＡ・Ｄ類が多かった。Ⅱ系のものは、体部がＤ類１３０点（46%）、口縁端部が１類１４１点（50%）である。

この結果から、皿で一番多く見られた組合せは、体部がD類で口縁端部が１類の高台がⅡ系で９０点（32%）の組合せである。

	高台　口縁端部								
	Ⅰ系			Ⅰ系 計	Ⅱ系			Ⅱ系 計	総計
体部	1類	2類	3類		1類	2類	3類		
A類	16	2	0	18	2	1	1	4	22
B類	7	1	1	9	5	0	1	6	15
C類	25	1	0	26	41	4	13	58	84
D類	13	1	1	15	90	7	33	130	145
E類	7	2	0	9	3	0	0	3	12
総計	68	7	2	77	141	12	48	201	278

第52表　皿類器形分類別組合せ表

また、２号窯と３号窯の高台の有無を比較してみると、２号窯に関する皿の遺物すべて合わせて８１点出土しているのだが、そのうちⅠ系が６５点（80%）で、Ⅱ系が１６点（20%）でⅠ系がやや多かった。それに対して、３号窯の関連遺物は１５２点出土し、Ⅰ系が８点（5%）で、Ⅱ系が１４４点（95%）で圧倒的にⅡ系が占めていた。それに加えて、３号窯入り口付近で見つかっている３つのＳＫの遺構から出土している皿のすべてがⅡ系の遺物であった。

これらのことから、今回の調査で出土した遺物を中野晴久氏による「赤羽・中野編年」②に従うと、２～３型式（１２世紀後半から１３世紀初頭）に相当すると思われる。なぜなら碗類は、全体の平均値や体部が曲線的に立ち上がるものが多いが、直線的に立ち上がるものも混在していることと、口縁端部が外反するがそのほとんどは丸みを帯びていて、これらの点が類似する。皿類は、碗類と同様に全体の平均値が類似し、高台を有するものが高台の無いものよりも多く出土している事から、２型式の傾向の強い時期であると考えられる。また推測ではあるが、皿類の高台の有無から２号窯と３号窯どちらが先に使用され始めたのかを考えて見ると、３号窯の方が高台を有するものを多く焼成している事から、２号窯より以前に使われ始めたのではないかと思われる。

碗・皿類ともに、高台底面付着痕は籾が多く、底面外面調整痕は糸切り後ナデが、内面底部の見込みは回転ナデが圧倒的に多くを占めていた。また、深廻間Ａ古窯群と類似している点が多く、２型式から３型式へ以降する時期に近隣で同じように窯業生産をしていたことが伺える。

この遺跡で主に焼成していたものは、碗類や皿類と鉢であるが、特殊なものとして壺の体部の破片が１点見つかっている。窯内から見つかっていないので生産していたかは不明である。

これまでに調査した市内の古窯と比較してみると、深廻間Ｂ古窯跡群は、神明古窯群よりも新しく、遺物の平均値が碗・皿類ともに深廻間Ｂ古窯跡群の方が大きいことから、近隣の深廻間Ａ古窯群よりもやや前から始まっているのではないかと考えられる。

註①青木修『太子Ａ窯跡』29頁（㈶瀬戸市埋蔵文化財センター、1997年）

註②中野晴久他『「全国シンポジウム」中世常滑窯をおって』資料集生産地における編年について」1994年

第4章　科学分析

熱残留磁気測定調査風景

第１節　深廻間Ｂ古窯跡群の考古地磁気

富山大学理学部地球科学教室
広岡公夫、南　依里、成　亨美

はじめに

大府市内では、海陸庵古窯群、神明古窯群（広岡ほか、1996）とガンジ山Ａ古窯群、深廻間Ａ古窯群（広岡・佐竹、2005）について考古地磁気の測定がなされている。今回は、大府市長草町の深廻間Ｂ古窯群第１・２・３号窯について試料を採取し、考古地磁気測定を行なったので、その結果を報告する。

土が高温まで加熱されると、それに含まれる磁鉄鉱（Fe_3O_4）や赤鉄鉱（Fe_2O_3）など鉄酸化物の磁性鉱物は、それぞれの鉱物に固有の温度を超えると、それまで保持していた磁化を失ってしまう。この温度をキュリー点と称する。陶器窯の窯体を構成している地山の土が磁化を失ったキュリー点以上の高温の状態から、地球磁場が作用している地上で冷えると、再び磁化を有する能力が蘇り、地磁気の方向と同じ向きの残留磁化を獲得する。このような機構で獲得された磁化を熱残留磁化（thermoremanent magnetization、略して、NRM）という。焼土を伴う遺構は、したがって、その遺構で最終焼成が行なわれた時の地球磁場の方向を熱残留磁化として記憶していることになる。

これに対して、地球磁場の方向は、‘地磁気永年変化’と呼ばれるゆっくりとした時間変化をしているので、地球磁場方向は時代が異なれば違った向きになっている。日本で地磁気（地球磁場）を直接観測した記録は、偏角については西暦１６１３年に九州の平戸でなされたものが最古である。伏角については、明治になってからの観測記録しか残されていない。これより古い時代に遡って地磁気の変動の様子を知るためには、考古地磁気学的方法によるしかない。

東海・北陸から九州北部に至る西南日本の各地に分布する年代のよくわかった遺跡から試料を採集し、それらの考古地磁気測定を行なった結果、過去２０００年間にわたって相当詳しい地磁気永年変化が明らかになっている（Hirooka、1971；広岡、1977）。このように考古地磁気学的に求められた永年変化を‘考古地磁気永年変化’と呼び、観測記録から得られる通常の地磁気永年変化と区別している。焼土試料の残留磁化測定から得られた結果を考古地磁気永年変化曲線と比べることによって、考古地磁気学的に年代を推定することができる。

考古地磁気永年変化

西南日本の考古地磁気永年変化曲線は、上述のように西南日本各地の遺跡から得たデータをまとめたもので、年代はサンプリング当時のその遺構について考古学的に推定された年代（時代）によっているため、その当時の考古編年と独立ではないことに注意を払う必要がある。このことは、考古編年が改訂されると推定年代値も変更になることを意味するからである。

また、西南日本の地域内では、地磁気の方向に地域差はないという前提に立って作られている。しかし、考古地磁気データの蓄積によって、西南日本の中でもそれぞれの地域のデータ数が増し、それを詳しく見ると、時代によっては、地磁気の地域差が無視できない大きさになる場合が見られ、西南日本全体を一括りにして論ずることは適当でないことがわかってきた。地方によっては非常に多数の

データが得られていて、その地域のデータのみによってその地域用の永年変化曲線が描けるようになった地域もある。地磁気の地域差は以前からその可能性が指摘されていた（広岡、1981）が、データの蓄積によって、その様相が次第に明らかになりつつある。例えば、１７～１９世紀では、九州北部から山口県にかけての西日本と東海・北陸地方とでは、偏角が数度異なることや、７～１１世紀には中国・畿内と北陸で伏角に10°近い差があること（広岡、1989；1993）などが明らかにされている。北陸地方については、西暦５５０年～１５５０年の期間の考古地磁気永年変化が北陸版永年変化曲線として発表されている（広岡、1997）。

最近、藤澤（1996）は、瀬戸・東濃地域の考古地磁気データをまとめて、９世紀末から１８世紀初頭までの永年変化を西南日本版永年変化曲線と比較し、やはり相当な地域差のあることを述べている。また、広岡・藤澤（1998）は瀬戸・東濃地域のデータを中心にして描いた東海地方版永年変化曲線試案を出している。

このように、考古地磁気学的に年代を推定しようとする時に、どの考古地磁気永年変化曲線を基準として採用するかによって、推定年代値そのものが違ってくることになる。

今回の深廻間Ｂ窯群の測定結果は、主として、東海版永年変化曲線を用いて年代の推定を行なうことにする。

試料の採取

深廻間Ｂ古窯群では、１号窯から17個、２号窯から14個、３号窯から12個の、総計43個の試料を採集した。採取試料個数および試料番号は第53表に示されている。これらは全て、方位が詳しく測られた定方位試料である。定方位試料の採取法は、我々の研究室で以前から行なっている石膏で固めて、石膏表面に平面を作り、その面の方位を測定してから採る方法で、比較的短時間に精度のよい定方位試料が得られる。

方位の測定にはクリノメーター（考古地磁気試料採取用に改造した特製クリノコンパス）の磁針を用いているので、磁北を基準にした方位となる。したがって、磁北が真北からずれている角度（現在の偏角）分だけ偏ったものになっている。

遺跡現場の現在の偏角は、遺跡現場で太陽の方位観測を行なって求める。今回の深廻間Ｂ古窯群１・２・３号窯では、２号窯の左脇の地点にトランシットを据えて太陽の方位観測を行なった。方位観測の結果、深廻間Ｂ古窯群の遺跡現場の現在の偏角（Ｄｐ）の値は、西偏 6.01°（Ｄｐ ＝－6.01°）を得た。遺跡現場の緯度・経度とともに、Ｄｐ の値も第53表に載せてある。残留磁化測定結果の偏角はこの値を用いて真北を基準にしたものに補正されている。

残留磁化の測定には夏原技研製のリングコア型スピナー磁力計（SMM－８５型）を使用し、試料１個につき６回置き直しをして測定した。

試料が保持している自然残留磁化（natural remanent magnetization、略して、NRM）には、最終焼成後に付加された不安定な磁化成分も含まれており、それを除去するために、段階交流消磁を行う。消磁磁場の段階としては、2.5mT、5.0mT、7.5mT、10.0mT、15.0mT、20.0mTの６段階を設定し、NRMの測定の後、この６段階で消磁を行なった。段階ごとに磁化方向のまとまり具合、磁化強度の減少度をみて、最もまとまりがよくなる段階を判定し、それを最適消磁段階とする。その時の

平均磁化方向を考古地磁気データとして採用し、それで年代の推定を行なうことにしている。

それぞれの遺構についてのNRMおよび各消磁段階の個々の試料の残留磁化測定結果は、第54～74表にまとめられている。これらの表の中で、＊印の付されている試料は同一遺構の他の試料の磁化方向から大きく外れた磁化をもつものを示している。これらの試料は、何らかの原因で、当時の地磁気の方向を記録している熱残留磁化とは異なった方向を示すものであると考えられるので、これらの試料は平均磁化方向を求める統計計算の際には除外されている。

各遺構の各段階の平均磁化方向およびばらつきの程度を表わすパラメータ（フィッシャーの信頼角：α_{95}と、フィッシャーの精度係数：K）を求める統計計算にはフィッシャーの統計法（Fisher、1953）を用いた。統計計算の結果は第75表の通りである。同表の平均磁化強度を見ると、1～3号窯ともに10－3（Am²／kg）のオーダーの磁化強度を保有しているので、十分なTRMを獲得しているものと考えられる。

考古地磁気年代

第75表の考古地磁気データ（最適消磁段階のもの）の平均磁化方向（平均偏角・Dと平均伏角・Iから求められる）を、考古地磁気永年変化曲線上にプロットして、曲線のどの年代のところに来るかを見て年代を推定する。推定年代値の年代幅（年代誤差にあたる）は、α_{95}の占める範囲となる。

第56図は西南日本版考古地磁気永年変化曲線（広岡、1977）と東海版曲線（広岡・藤澤、1998）を描いた図に、第75表の考古地磁気データを記入したものである。平均磁化方向は黒丸、α_{95}はそれを囲む円で表されている。この図を見ると、3窯跡とも、それぞれの窯の平均磁化方向を示す黒丸が、他の窯のα_{95}の円内に入っているので、統計学的には誤差の範囲を考慮すると時代差はないといえる。また、図にも明らかなように、測定結果は西南日本版曲線からは相当大きく外れており、東海版曲線に近いところに位置することが良くわかる。これら両曲線を用いて、それぞれから考古地磁気推定年代値を求めると、次のようになる。

	東海版曲線	西南日本版曲線
1号窯	A.D. 1150 $^{+70}_{-40}$ 年	A.D. 1210 ± 30 年
2号窯	A.D. 1150 ±50 年	A.D. 1200 ± 30 年
3号窯	A.D. 1140 $^{+70}_{-30}$ 年	A.D. 1200 ± 20 年

しかし、先にも述べたように、瀬戸・東濃地域のデータを中心として描かれた東海版永年変化曲線は、まだ、試案の段階で、今後の検討の結果修正される可能性を含んでおり、修正が行なわれれば推定年代値にも変更が有り得ることを念頭において頂きたい。

引用文献

Fisher, R. A.（1953）Dispersion on a sphere, Proceedings of Royal Society of London, Series A, vol.217, 295-305.

藤澤良祐（1996）考古地磁気推定年代の検討、月刊地球、vol.18, 339-343.

Hirooka, K.（1971）Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., ser. Geol. & Mineral., 38, 167-207.

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15, 200-203.

広岡公夫（1981）考古地磁気による年代推定とその問題点、考古学研究、vol. 28, 69-78.

広岡公夫（1989）古代手工業生産遺跡の自然科学的考察、－考古地磁気学、古地磁気学の立場から－、「北陸の古代手工業生産」、北陸古代手工業生産史研究　会編、真陽社、225-284.

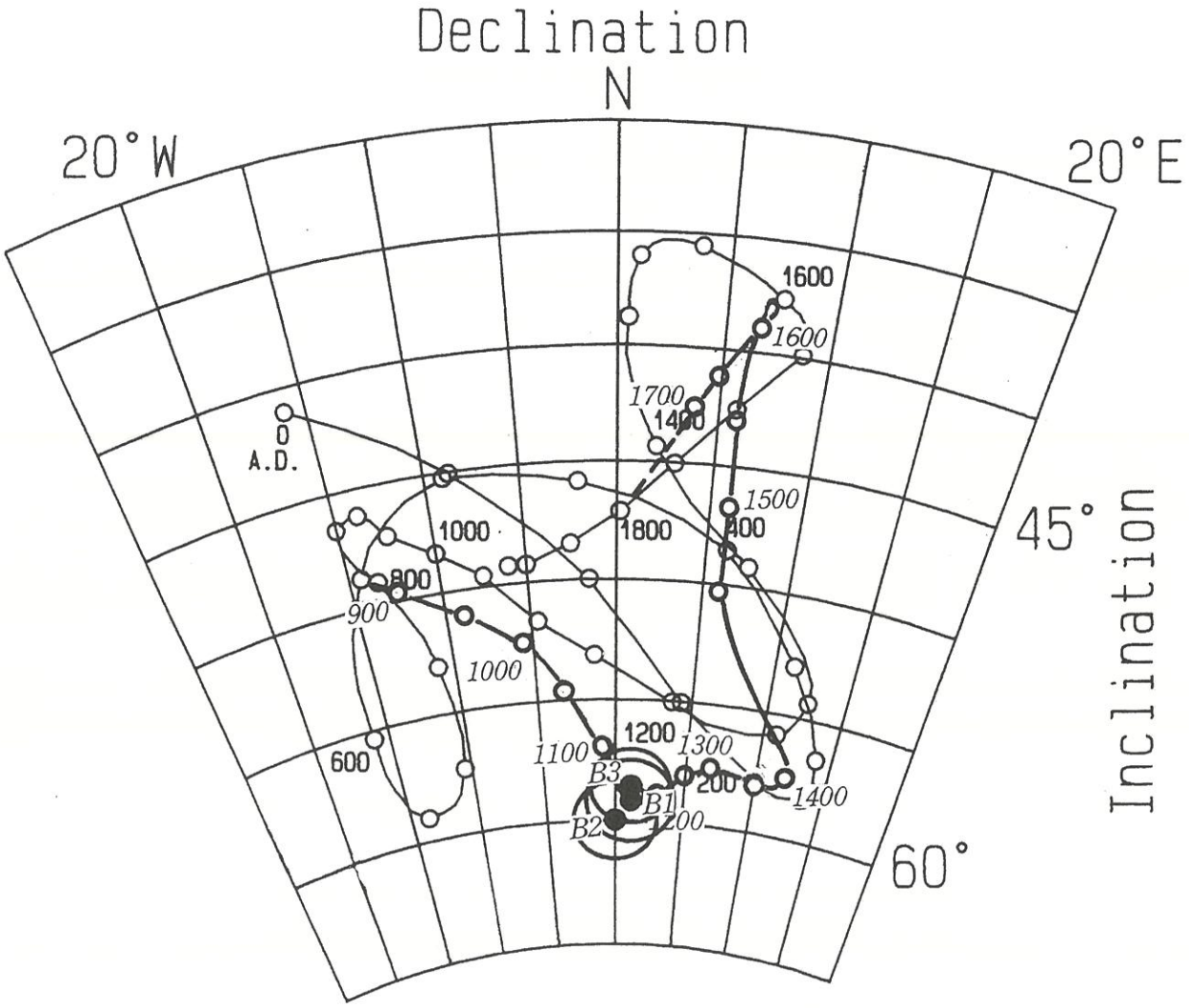
広岡公夫（1993）年代推定の手法、季刊考古学、第４２号（特集・須恵器の編年とその時代）、75-77.

広岡公夫（1997）北陸における考古地磁気研究、「中・近世の北陸、－考古学が語る社会史－」、桂書房、富山、560-583.

広岡公夫、藤沢良祐（1998）東海地方の地磁気永年変化曲線、「考古地磁気の地域差とその年代推定への応用」、平成７年度～平成９年度科学研究費補助金（基盤研究Ｃ）研究成果報告書、広岡公夫編、147-160.

広岡公夫、水上裕美、川浪英子（1996）海陸庵・神明古窯址群の考古地磁気年代、「海陸庵古窯址群・神明古窯址群、～大府半月地区区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第２集、愛知県大府市教育委員会、138-151.

広岡公夫、佐竹俊昭（2005.3.1）深廻間Ａ古窯跡群の考古地磁気学的研究、「深廻間Ａ古窯　跡群、～大府特定深廻間土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第５集、愛知県大府市教育委員会、160-172.



図の説明

第56図　過去２,０００年間の西南日本版考古地磁気永年変化（細線）（広岡、1977）および西暦５００～１５５０年の東海版永年変化（太線）（広岡・藤澤、1998）と深廻間Ｂ古窯群の考古地磁気測定結果

B1：B1号窯、B2：B2号窯、B3：B3号窯
Declination：偏角、 Inclination：伏角.

遺構名	個数	試料番号
1号窯	17	CT3011～3027
2号窯	14	CT3031～3044
3号窯	12	CT3051～3062

Lat.：136° 57′ 08″ N、 Long.：35° 00′ 49″ E
Dp = −6.01°

第53表　深廻間B古窯第1・2・3号窯で採取した考古地磁気試料番号

試料番号	偏角（° E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−5.5	61.6	10.7
3012	−3.4	61.2	12.0
3013	−0.4	59.4	9.10
3014	−3.2	61.3	9.66
3015	−5.1	59.4	12.0
3016	0.9	56.5	10.4
3017	3.6	54.2	16.0
3018	5.5	58.5	8.55
3019	−2.1	58.5	10.8
3020	4.8	58.2	17.1
3021	9.6	58.1	11.1
3022	−0.1	56.9	15.3
3023	−1.1	62.3	8.66
* 3024	88.1	65.2	4.99
3025	11.2	61.6	3.67
3026	9.9	63.9	5.15
3027	8.2	62.9	10.6

*：統計計算の際に除外したもの.

第54表　深廻間B古窯第1号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−7.0	60.1	10.6
3012	−1.7	60.9	12.0
3013	−0.2	59.2	9.05
3014	−3.8	61.2	9.58
3015	−8.5	60.2	11.9
3016	−1.7	57.0	10.3
3017	2.7	54.4	15.8
3018	5.7	57.1	7.87
3019	−5.3	59.3	10.5
3020	3.3	59.9	16.7
3021	4.7	56.8	10.9
3022	−1.5	57.0	15.0
3023	0.8	62.1	8.53
3024	3.1	66.8	4.87
3025	6.8	63.7	3.56
3026	10.9	63.9	5.03
3027	5.7	62.4	10.3

第55表　深廻間Ｂ古窯第１号窯の 2.5mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−10.4	60.3	10.4
3012	−2.1	60.9	11.7
3013	−1.8	59.2	8.86
3014	−3.1	61.3	9.37
3015	−11.5	59.3	11.5
3016	3.1	56.2	10.2
3017	1.9	54.3	15.5
3018	6.6	58.6	8.32
3019	−5.7	58.9	10.5
3020	4.2	57.5	16.6
3021	6.4	56.4	10.9
3022	−3.0	56.5	14.8
3023	−1.9	61.9	8.49
3024	8.5	64.4	4.93
3025	6.8	63.4	3.53
3026	9.7	63.2	5.07
3027	4.4	63.2	10.5

第56表　深廻間Ｂ古窯第１号窯の 5.0mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−12.6	60.6	10.1
3012	−0.6	61.0	11.4
3013	−0.5	59.6	8.72
3014	−1.6	60.9	9.26
3015	−5.6	58.3	11.1
3016	−1.0	56.5	9.88
3017	2.9	53.8	15.1
3018	6.7	58.3	8.18
3019	−5.7	59.1	10.4
3020	3.8	58.2	16.4
3021	5.4	55.3	10.7
3022	−1.6	56.0	14.5
3023	−2.1	62.1	8.42
3024	7.2	64.7	4.87
3025	11.0	61.6	3.49
3026	12.2	62.5	4.97
3027	8.6	61.2	10.3

第57表　深廻間Ｂ古窯第１号窯の 7.5mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−8.0	60.1	9.39
3012	−4.2	61.4	10.9
3013	0.4	58.9	8.34
3014	−2.3	61.2	8.97
3015	−6.4	58.7	10.7
3016	1.0	56.1	9.46
3017	2.4	53.7	14.3
3018	8.4	58.0	7.89
3019	−3.9	58.7	9.94
3020	4.0	57.9	16.0
3021	5.3	57.2	10.4
3022	−3.7	56.5	13.9
3023	−2.3	61.7	8.23
3024	3.9	65.2	4.69
3025	8.0	62.6	3.37
3026	8.3	63.2	4.81
3027	7.6	61.4	9.88

第58表　深廻間Ｂ古窯第１号窯の１0.0mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−4.6	60.5	8.16
3012	−3.3	61.3	9.58
3013	−1.4	58.5	7.35
3014	−1.2	61.0	8.25
3015	−7.0	57.7	9.23
3016	−1.0	56.9	8.41
3017	3.6	53.4	12.4
3018	7.1	58.2	7.18
3019	−4.8	59.2	9.10
3020	3.8	58.2	14.8
3021	9.4	55.9	9.52
3022	−1.8	56.5	12.1
3023	−0.1	61.1	7.79
3024	4.1	64.1	4.43
3025	8.1	62.6	3.14
3026	8.8	62.8	4.50
3027	7.0	61.2	8.98

第59表　深廻間B古窯第1号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3011	−4.3	58.7	6.80
3012	0.3	60.4	7.96
3013	−0.9	57.0	5.97
3014	0.5	60.8	7.26
3015	−6.9	57.3	7.43
3016	−1.3	57.8	6.89
3017	3.9	52.5	10.1
3018	6.1	57.9	6.11
3019	−5.4	59.0	7.81
3020	1.3	58.5	12.8
3021	4.4	56.4	7.87
3022	−1.6	56.3	9.74
3023	1.5	61.1	7.23
3024	3.5	64.2	4.08
3025	5.9	63.3	2.79
3026	8.5	63.4	4.11
3027	6.7	61.0	7.94

第60表　深廻間B古窯第1号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	3.4	59.4	10.9
3032	−2.5	61.0	9.31
3033	−7.0	59.3	11.2
3034	−0.4	59.4	8.04
3035	−1.0	58.3	5.57
3036	−5.9	53.7	8.72
3037	3.6	59.5	8.06
3038	−8.1	61.3	15.2
3039	6.9	62.2	16.0
3040	0.2	59.3	15.2
3041	3.0	60.6	15.1
3042	−0.3	61.5	18.1
3043	9.1	63.3	15.6
3044	−6.3	55.3	23.2

第61表　深廻間Ｂ古窯第２号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	2.8	59.8	10.7
3032	−4.5	61.0	9.26
3033	−4.4	58.9	10.9
3034	1.5	59.4	7.81
3035	0.1	58.2	5.44
* 3036	−7.0	52.0	8.55
3037	5.8	59.5	7.81
3038	−5.5	60.7	15.1
3039	9.8	62.1	15.8
3040	1.8	59.2	15.0
3041	2.0	59.8	14.9
3042	−3.8	62.0	16.8
3043	9.9	63.3	15.6
3044	−5.9	56.4	23.2

＊：統計計算の際に除外したもの．

第62表　深廻間Ｂ古窯第２号窯の 2.5mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	1.3	59.3	10.8
3032	−6.4	61.2	9.19
3033	−10.4	59.4	10.8
3034	−0.8	59.6	7.71
3035	0.4	58.1	5.38
* 3036	−7.7	52.6	8.34
3037	3.7	59.7	7.81
3038	−8.5	61.5	15.0
3039	11.5	61.2	15.8
3040	2.4	59.3	14.9
3041	1.5	60.7	14.8
3042	−0.1	61.7	17.7
3043	6.6	63.5	15.4
3044	−8.1	56.4	23.0

*：統計計算の際に除外したもの.

第63表　深廻間Ｂ古窯第２号窯の 5.0mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	4.7	59.0	10.6
3032	−4.2	60.5	9.05
3033	−8.2	58.8	10.6
3034	0.6	59.2	7.54
3035	−1.3	58.1	5.26
* 3036	−9.2	52.0	8.16
3037	3.8	59.5	7.69
3038	−4.2	60.5	14.8
3039	8.9	62.0	15.5
3040	2.1	59.5	14.7
3041	4.1	59.5	14.7
3042	−3.4	62.2	17.6
3043	9.0	63.1	15.2
3044	−5.1	56.3	22.6

*：統計計算の際に除外したもの.

第64表　深廻間Ｂ古窯第２号窯の 7.5mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	2.1	59.9	10.3
3032	−6.1	61.3	8.91
3033	−4.4	58.8	10.3
3034	0.3	59.0	7.37
3035	−0.1	58.1	5.07
* 3036	−5.2	51.3	7.81
3037	3.8	59.6	7.44
3038	−6.2	61.2	14.5
3039	6.5	61.9	15.2
3040	2.5	59.0	14.4
3041	3.9	60.3	14.3
3042	−0.9	61.4	17.1
3043	7.7	63.0	14.8
3044	−6.2	55.7	21.9

*：統計計算の際に除外したもの.

第65表　深廻間Ｂ古窯第２号窯の１0.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	3.6	59.2	9.90
3032	−7.4	60.6	8.57
3033	−9.3	59.5	9.52
3034	0.1	59.1	6.84
3035	1.7	58.2	4.64
* 3036	−5.8	51.6	6.96
3037	4.2	59.2	7.04
3038	−5.2	60.5	13.8
3039	7.7	61.5	14.5
3040	0.4	59.3	13.8
3041	1.3	59.4	13.5
3042	−1.4	61.6	16.0
3043	9.3	62.6	13.9
3044	−6.4	55.9	20.1

*：統計計算の際に除外したもの.

第66表　深廻間Ｂ古窯第２号窯の１5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3031	3.4	58.9	9.18
3032	−3.0	60.8	7.98
3033	−6.1	58.5	8.54
3034	−0.5	59.0	6.42
3035	0.4	57.9	4.16
3036	−4.0	53.7	6.10
3037	3.1	59.9	6.66
3038	−7.0	60.6	13.0
3039	8.5	61.5	13.8
3040	0.4	59.3	13.0
3041	0.3	59.7	12.5
3042	−4.5	62.3	14.9
3043	9.6	62.3	12.7
* 3044	−18.2	36.4	15.2

*：統計計算の際に除外したもの.

第67表　深廻間Ｂ古窯第２号窯の２0.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	2.1	57.9	54.0
3052	−2.6	57.3	62.5
3053	−0.2	55.8	33.4
3054	2.2	58.6	16.7
3055	6.0	56.9	12.9
3056	−6.5	59.7	9.52
3057	3.0	60.5	7.74
3058	1.7	59.1	13.9
3059	7.2	61.5	43.5
3060	2.3	58.8	41.1
3061	2.7	61.5	47.7
3062	−2.1	58.0	5.83

第68表　深廻間Ｂ古窯第３号窯のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	1.6	59.2	54.0
3052	4.7	56.1	63.1
3053	1.1	55.2	33.1
3054	−0.1	55.6	16.6
3055	6.6	57.5	12.8
3056	−5.2	60.7	9.39
3057	6.9	59.5	7.63
3058	0.1	59.6	13.9
3059	10.0	59.2	42.9
3060	4.0	58.7	40.7
3061	2.1	62.1	47.3
3062	−3.6	59.3	5.64

第69表　深廻間Ｂ古窯第３号窯の 2.5mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	2.5	58.9	53.3
3052	−1.9	56.0	62.5
3053	−0.7	55.5	32.8
3054	−2.0	57.6	16.7
3055	4.7	58.4	12.7
3056	−6.1	60.7	9.31
3057	4.6	60.2	7.57
3058	2.9	59.2	13.7
3059	6.5	62.3	42.3
3060	1.5	59.7	40.3
3061	2.4	62.0	46.6
3062	−3.6	58.9	5.39

第70表　深廻間Ｂ古窯第３号窯の 5.0mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	−0.5	59.3	52.9
3052	1.1	55.9	62.0
3053	2.1	54.6	32.6
3054	−2.0	56.9	16.5
3055	6.8	57.2	12.6
3056	−5.2	59.8	9.24
3057	6.9	59.0	7.54
3058	2.5	58.9	13.7
3059	6.1	62.7	41.2
3060	2.2	59.3	39.4
3061	3.7	61.2	46.2
3062	−1.2	57.5	5.11

第71表　深廻間Ｂ古窯第３号窯の 7.5mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	3.3	58.2	52.3
3052	−2.7	56.5	60.9
3053	0.1	54.8	32.1
3054	−1.1	55.9	16.3
3055	7.5	56.6	12.6
3056	−6.5	60.0	9.15
3057	6.3	59.4	7.44
3058	2.1	59.0	13.6
3059	7.1	61.3	39.9
3060	2.5	58.9	38.5
3061	3.9	61.0	45.4
3062	−4.4	58.7	4.67

第72表　深廻間Ｂ古窯第３号窯の１0.0mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	1.7	58.4	49.5
3052	−1.2	55.8	57.8
3053	−0.0	55.1	31.0
3054	−0.3	56.3	16.0
3055	4.7	57.7	12.4
3056	−4.5	59.5	8.82
3057	6.8	59.5	7.15
3058	1.3	59.2	13.4
3059	6.4	61.7	35.7
3060	0.9	59.6	35.3
3061	2.0	61.9	42.2
3062	−2.5	57.6	3.77

第73表　深廻間Ｂ古窯第３号窯の１5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角（°E）	伏角（°）	磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
CT 3051	4.7	58.0	46.2
3052	−3.8	56.4	54.1
3053	0.4	55.0	29.3
3054	0.5	56.2	15.8
3055	6.0	57.0	12.1
3056	−5.3	59.9	8.49
3057	3.4	60.8	6.85
3058	−1.8	59.4	13.2
3059	6.1	61.9	32.1
3060	3.6	58.3	31.2
3061	1.8	61.7	38.0
3062	−3.0	57.7	3.04

第74表　深廻間Ｂ古窯第３号窯の２0.0mT消磁後の磁化測定結果

遺構名	消磁段階	n／N	D（°E）	I（°）	α_{95}（°）	K	平均磁化強度（×10⁻⁴ Am²/kg）
1号窯	NRM	16/17	2.0	59.8	1.73	454.1	10.7
	2.5mT	17/17	0.7	60.2	1.78	400.6	10.1
	5.0mT	17/17	0.6	59.9	1.90	353.4	10.1
	7.5mT	17/17	1.4	59.5	1.91	348.8	9.87
	10.0mT	17/17	1.0	59.7	1.76	412.6	9.48
	15.0mT	17/17	1.5	59.5	1.71	434.8	8.52
	【20.0mT	17/17	1.2	59.2	1.65	466.8	7.23】
2号窯	NRM	14/14	−0.6	59.7	1.80	488.8	12.9
	2.5mT	13/14	0.6	60.1	1.66	626.5	12.9
	5.0mT	13/14	−0.7	60.3	1.85	502.1	12.9
	7.5mT	13/14	0.4	60.0	1.67	617.2	12.8
	【10.0mT	13/14	0.1	60.0	1.56	708.6	12.4】
	15.0mT	13/14	−0.2	59.9	1.70	597.1	11.7
	20.0mT	12/14	0.3	60.1	1.58	756.5	10.2
3号窯	NRM	12/12	1.3	58.8	1.40	957.6	29.1
	2.5mT	12/12	2.4	58.6	1.65	695.7	28.9
	5.0mT	12/12	0.8	59.2	1.52	818.0	28.6
	7.5mT	12/12	1.8	58.6	1.58	751.4	28.2
	10.0mT	12/12	1.4	58.4	1.67	677.9	27.7
	【15.0mT	12/12	1.2	58.6	1.49	854.8	26.1】
	20. mT	12/12	1.0	58.6	1.61	726.2	24.2

n／N：採択試料個数／採取試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、
α_{95}：フィッシャーの信頼角、K：フィッシャーの精度係数.
【　】：考古地磁気データとして採用したもの.

第75表　深廻間B古窯第1・2・3号窯の考古地磁気測定結果

第２節　深廻間Ｂ古窯跡群出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ　植田弥生

1. はじめに

当古窯群は大府市の中央部を北から南に流れる鞍流瀬川の右岸にある大府丘陵に所在し、周辺には多くの古窯が点在している地区である。深廻間Ｂ古窯跡群は、考古遺物から平安時代後期（１２世紀末）から鎌倉時代初期（１３世紀初頭）の窯跡と考えられている。ここでは、２号窯と１号窯の窯体内から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。窯体内に残る炭化材は、操業時に使用されていた燃料材と考えられ、この地域で窯業活動を支えていた燃料材樹種を明らかにする目的で、炭化材樹種同定は実施された。

２．試料と樹種同定の方法

試料は、１号窯２試料と２号窯15試料である。一つの試料袋の中に１点の炭化材が取りあげられているものと、複数が入っているものがある。一試料袋の中（１地点から出土した炭化材）に複数の炭化材が含まれている試料は、すべて同一樹種である場合と、異なる樹種が混在している場合があった。また、同一樹種であっても明らかに形状が異なるものや、形状が同一であっても樹種が異なるものもあった。従って当時の燃料材の樹種構成を復元するためには、観察可能な炭化材はすべて観察し、異なる形状の炭化材は同一樹種であっても１点として集計した。

樹種同定は、先ず炭化材の横断面（木口）を実体顕微鏡で観察しておおよその特徴を捉え分類し、次に各分類群の典型的試料や確認を要する試料を走査電子顕微鏡で材組織を拡大して察し、同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、３断面を５角以下の大きさに整え、直系1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

１号窯と２号窯の17試料からは、クヌギ節２７点、コナラ節１２点、マツ属複維管束亜属６点、クリ１点、そして樹皮２点が確認できた（第76表）。樹皮はコルク質で厚みが約5mmと厚いことから、コナラ属で検出されているクヌギ節またはコナラ節の樹皮と思われる。

以下に同定の根拠と材組織の観察結果を記載する。

(1)マツ属複維管束亜属Pinus subgen. Diploxylonマツ科　写真５１　1a-1c（№464）

垂直と水平の樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量は多い。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端に複数層の放射仮道管があり、その内壁には鋸歯状の肥厚が認められる。このような形質からマツ属複維管束亜属のアカマツまたはクロマツの材であると同定され、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚が非常に顕著で鋭い試料が多いことから、アカマツを多く含む可能性は高い。

アカマツは二次林の代表樹種で、痩せた乾燥地や陽光地に優占して生育する。

(2)コナラ属コナラ亜属コナラ節Quercus subgen. Quercus sect. Prinusブナ科　写真５１　2a-2c（№053）

年輪の始めに中型の管孔が１層配列し、晩材部は薄壁で孔口が角形の非常に小型の管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は単列と集合状がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがあり、山林や二次林（里山）に普通に生育している。

⑶コナラ属コナラ亜属クヌギ節 Quercus subgen. Quercus sect. Cerris ブナ科　写真51　3a-3c（№166）

年輪の始めに大型の管孔が１層配列し、晩材部は厚壁で孔口は円形の小型管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。そのほかの形質は上記のコナラ節と同様である。

クヌギ節は暖帯の山林や二次林（里山）に普通の落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。

⑷クリ Castanea-crenata Sieb. et Zucc.　ブナ科　写真52　4a-4c（№170）

年輪の始めに大型の管孔が密接して配列し、除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性のみで、広放射組織はない。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉広葉樹である。

4. まとめ

当古窯群の炭化材樹種構成は、クヌギ節･コナラ節･クリと針葉樹のマツ属複維管束亜属の４分類群であった。クヌギ節が最も多く検出され、次に同属のコナラ節が多く、この２分類群が圧倒的多数を占めていた。クリは、１試料から検出されただけである。従って当古窯跡群の主な燃料材は、クヌギ節とコナラ節を主体として、マツ属複維管束亜属が少し加わる組み合わせであったと推測され、クヌギ節は特に多く利用されていたようである。また、炭化材の形状は直径5cm以下の比較的細い材が多く、その年輪数は１０年輪前後のものと２０～２５年輪前後のものが多かった。このことからは、枝材を多く利用していたか、二次林を管理･維持する過程で伐採や間引きされた材が利用されていたことが連想される。

大府市内に分布する１２～１３世紀の古窯跡で炭化材樹種が報告されているのは、当窯跡の近くにある深廻間Ａ古窯群（植田、2005）、大府丘陵の南部に分布する神明古窯群（小川、1996）と森岡第１号窯群（植田。1996）、鞍流瀬川左岸の尾張丘陵に分布するガンジ山Ａ古窯群（植田、2000）である。クヌギ節･コナラ節･マツ属複維管束亜属の３分類群が主体で、かつマツ属複維管束亜属よりクヌギ節･コナラ節の出土数が多い当窯跡の結果は、深廻間Ａ古窯群や神明古窯群と類似している。一方、ガンジ山Ａ古窯群と森岡第１号窯群は、クヌギ節･コナラ節よりもマツ属複維管束亜属の出土数が目立つ。ガンジ山Ａ古窯群や森岡第１号窯群のように、クヌギ節やコナラ節を随伴するがマツ属複維管束亜属が優占またはかなり多く出土する古窯跡は、尾張丘陵一帯に広く分布する中世窯に多い（山口･千野、1990、城ケ谷、1992、植田、1998、植田2001a、植田2001b）。クヌギ節･コナラ節が優占する当窯跡や深廻間Ａ古窯群そして神明古窯群は大府丘陵に位置するのに対し、尾張丘陵の西端に位置するガンジ山Ａ古窯群ではマツ属複維管束亜属がやや多いのは、立地環境と関係した有意な違いなのか、単なる検討試料の偏りによるのかは、今後も調査地点を増やし検討する必要があると思われる。

一方、森岡第１号窯群からは、猿投山西南麓古窯群のながれをくむ１３世紀前後の古窯からはあま

り報告例を聞かないアカガシ亜属・ミズキ属・エゴノキ属などの広葉樹材が検出されている。森岡第１号窯群は市南部を西から東に流れる石ケ瀬川の水系に立地し、上流域は知多半島につながる。１２～１３世紀の知多古窯群の燃料材樹種は、マツ属複維管束亜属もあるが、常緑広葉樹のシイノキ属・アカガシ亜属・サカキ・ハイノキ属などが多く、そのほかにもコナラ節・クヌギ節以外のクマシデ属・ミズキ属など複数種類の広葉樹が検出され、猿投山西南麓古窯群とはかなり異なる樹種構成である。距離的にも知多古窯群に近い森岡第１号窯群からアカガシ亜属・ミズキ属・エゴノキ属などの広葉樹材が検出されたことは興味深く、水系などを利用して知多半島から燃料材を入手していた可能性も、今後は考える必要があるかも知れない。また、深廻間Ａ古窯群の１号窯床面下施設に敷き詰められていた丸太材は、二次林要素でもあるクリ（９点）とマツ属複維管束亜属（４点）であった（植田、2005）。一方、知多半島常滑市の金色東Ｂ古窯群から検出された１号窯床下施設の材は、照葉樹林の主要素であるツブラジイ（２２点）やスダジイ（３０点）である（パリノ・サーヴェイ株式会社、2004）。大府市は知多半島の付け根に位置するにも係らず窯跡から出土する樹種構成からは、大府市は落葉広葉樹のコナラ節・クヌギ節やマツ属からなる二次林が想定され、知多半島では照葉樹林が想定され、燃料材や施設材が現地調達であれば、隣接地でありながら大府市と知多半島では大きく当時の植生が異なっていたことになる。この点についても、今後資料の蓄積や花粉分析の情報も含め検討してみる必要があるのではないだろうか。

引用文献

山口慶一・千野裕道、1990、マツ材の形成および窯業へのマツ材の導入について、85-114、図版1-10、「研究論集　Ⅲ」東京都埋蔵文化財センター。

城ケ谷和広、1992、小田妻古窯跡群出土木炭の樹種同定。71-75、図版43、「小田妻古窯跡群」、愛知県埋蔵文化財センター。

植田弥生、1998、炭化材の樹種同定、141-143、「大高南地区遺跡発掘調査報告書」、名古屋市教育委員会。

植田弥生、2005、深廻間Ａ古窯跡群出土炭化材の樹種同定、173-182、「深廻間Ａ古窯跡群」、大府市教育委員会。

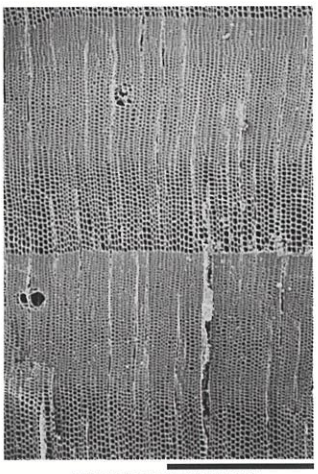
植田弥生、2001a、K-3・K-G-21の出土炭化材の樹種同定、108-114、「三好根浦特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」、三次町教育委員会。

植田弥生、2001b、K-G-66・96出土炭化材の樹種同定、82-86、「北部畑総南工区曽和地区内発掘調査報告書」、三次町教育委員会。

パリノ・サーヴェイ株式会社、2004、金色東Ｂ古窯群１号窯に関する自然科学分析、20-23、「金色東古窯群」、常滑市教育委員会。

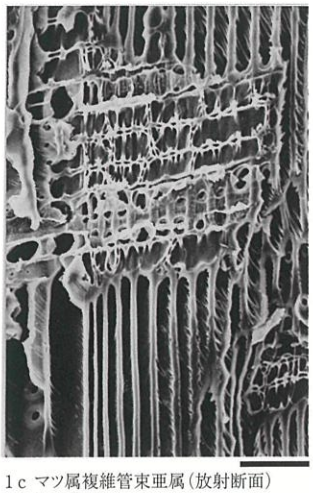
試料No	窯跡	地区	地点など	検出樹種		備　考
014	2号窯	ⅥE17q	焚口窯体内流入炭	クヌギ節	1	r:1cm　7年輪
017	2号窯	ⅥE17q	窯内流入	クヌギ節	1	φ:4cm 19年輪
051	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入	樹皮	1	厚み:5mm
052	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入炭1	コナラ節	1	r:2cm　26年輪
053	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入炭2	コナラ節	1	r:1.3cm
054	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入炭3	コナラ節	1	破片
055	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入炭4	コナラ節	1	破片
				クヌギ節	1	破片
064	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入炭6	コナラ節	1	φ:2.5cm 17年輪以上
				クヌギ節	1	r:0.8cmほか小破片複数
				樹皮	1	厚み:5mm
160	2号窯	ⅥE18p	焼成室	コナラ節	1	r:2cm 10年輪
166	2号窯	ⅥE19q	焼成室床面	クヌギ節	1	φ4cm 25年輪 樹皮付き
170	2号窯	ⅥE19q	焼成室遊離	クヌギ節	1	r:2cm
				クリ	1	φ:2cm 7年輪
177	2号窯	ⅥE19q	焼成室遊離	クヌギ節	6	φ1.5～3cm
190	2号窯	ⅥE18g	焼成室窯内流入炭	クヌギ節	1	φ1.8cm 13年輪
231	2号窯	ⅥE19q	焼成室遊離	コナラ節	1	φ3cm
				クヌギ節	8	φ1以上
462	2号窯	ⅥE18g	焼成室床面灰	クヌギ節	1	r:1.5cm 15年輪
464	2号窯	ⅥE18p	焼成室床直	マツ属複維管束亜属	1	φ4cm
610	2号窯	ⅥE18p	焼成室窯内流入	マツ属複維管束亜属	5	φ1～2cm 2～5年輪
				コナラ節	5	φ1～3cm 10年輪前後
				クヌギ節	5	φ3.5～5cm 20年輪前後

第76表　深廻間Ｂ古窯群出土炭化材樹種同定結果一覧



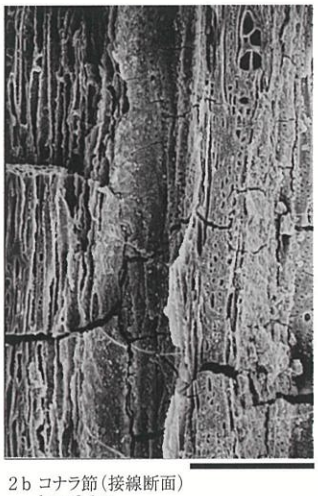
1a マツ属複維管束亜属(横断面)
No464　bar:0.5mm

1b マツ属複維管束亜属(接線断面)
bar:0.1mm

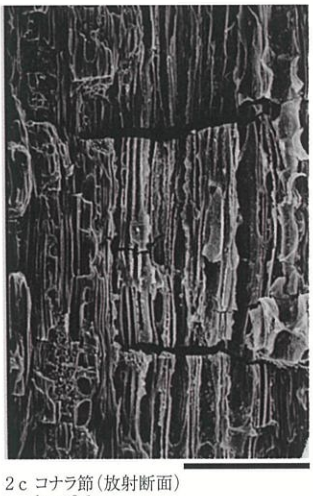


1c マツ属複維管束亜属(放射断面)
bar:0.1mm

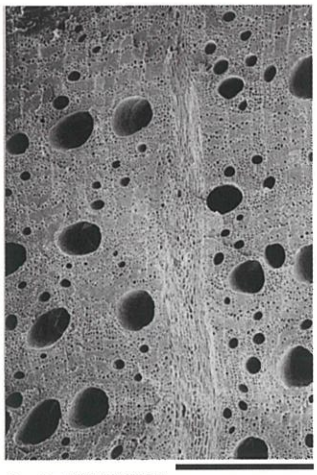
2a コナラ節(横断面)
No053　bar:0.5mm



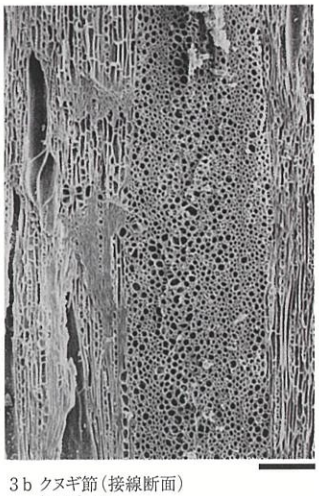
2b コナラ節(接線断面)
bar:0.1mm



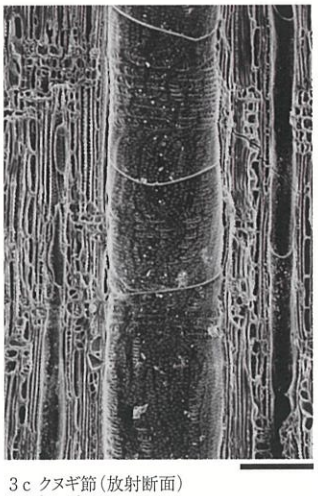
2c コナラ節(放射断面)
bar:0.1mm



3a クヌギ節(横断面)
No166　bar:0.5mm

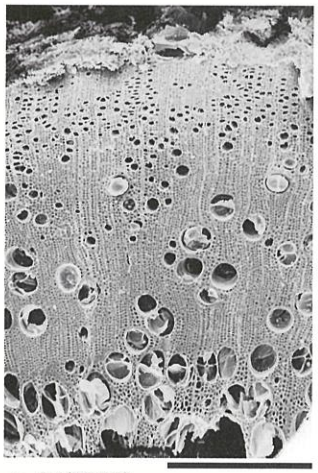


3b クヌギ節(接線断面)
bar:0.5mm

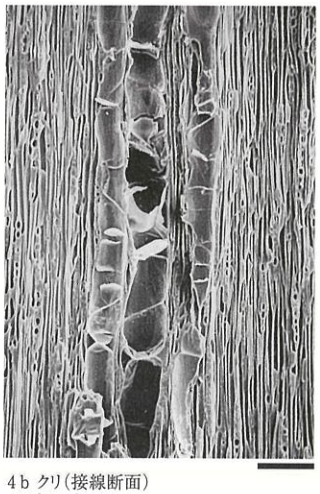


3c クヌギ節(放射断面)
bar:0.1mm

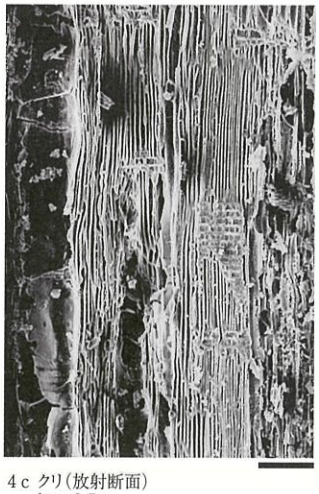
写真51　出土炭化材樹種1



4 a クリ(横断面)
No170　bar:0.5㎜



4 b クリ(接線断面)
bar:0.5㎜



4 c クリ(放射断面)
bar:0.5㎜

写真52　出土炭化材樹種 2

第5章　総　論

発掘作業風景

まとめ

深廻間Ｂ古窯跡群は、市内で１４例目の発掘調査である。窯業遺跡としては１１例目である。本遺跡は３基の窯体と灰原からなる古窯跡群である。窯体は１基（２号窯）は、焚口から煙道部の床面の一部までほぼ良好な残存状態であったが、他の２基は焼成室の上半部が削平されて消滅していた。前庭部は１基（３号窯）のみ残存しており、他の２基の前庭部は後世の土取りにより削平されて消滅していた。また灰原も一部が残存するものの、ほとんどが消滅していた状態であった。

深廻間Ｂ古窯跡群の立地する地域には、多くの古窯群が集中して築窯されている。本古窯跡群の北東約200ｍの地点に深廻間Ａ古窯群が、北に約300ｍの地点に深廻間Ｃ古窯群が位置している。また南に約200ｍの地点に柊山Ａ古窯群、東に約130ｍの地点に柊山Ｂ古窯群、約200ｍの地点に柊山Ｃ古窯群が位置している。この中で深廻間Ｂ古窯群は、同一丘陵上の別斜面に築窯された一連の山茶碗窯であるので、最近本調査が実施された深廻間Ａ古窯群と比較検討していきたい。

遺構について

３基の窯体の遺存状態は良好ではなかった。１基を除いて他の２基は焼成室上半部が消滅していた。焼成室は３基とも床面の改修が施されている。３基とも一次面を取り除いて二次面を築き、さらにその上に最終床面を築いている。しかし、３基とも改修の仕方は異なっている。２号窯では一次面の床面を20cm掘り込んで二次面を築いているのに対して、他の２基はこれほど掘り込まれていない。また３号窯では焼成室の上半分が大きく改修されているが、下半分には改修痕が見られないという特徴がある。深廻間Ａ古窯群の２基の窯体は、ともに焼成室の床面が20cm以上深く掘り込まれ改修されていた。深廻間Ａ古窯群の場合は、改修された床面下に碗などを伏せて並べた床面下施設と、それに続く排水溝が作られていたが、本古窯群の３基の窯体は床面の改修は施されていたが、床面下施設や排水溝などは作られていなかった。

焼成室についても、１号窯・２号窯とも焚口から分焔柱に向かって緩やかに下降しているのに対して、３号窯では分焔柱付近で22.5°の急傾斜で分焔柱に向かって下降している。このような例は知多古窯ではあまりみられないものである。

遺物について

本窯の出土遺物は、碗類と皿類の２種類が主な焼成器種で、他に鉢が数点出土しているなか、碗は５２８点、皿は２７８点が出土した。

碗類の平均値は、１号窯で口径16.0cm・高台径8.1cm・器高5.1cm、２号窯で口径16.3cm・高台径8.1cm・器高5.2cm、３号窯で口径16.6cm・高台径8.1cm・器高5.1cmである。

皿類の平均値は、１号窯で口径7.4cm・高台径3.9cm・器高2.0cm、２号窯で口径8.7cm・高台径4.4cm・器高2.6cm、３号窯で口径9.4cm・高台径5.2cm・器高3.0cmである。碗・皿ともに深廻間Ａ古窯群より若干大きくなっている。皿類については、高台を有するものと、高台の無いものがあり、その比率は高台を有するものが72%、高台の無いものが27%であった。深廻間Ａ古窯群では、高台を有するものが68%、高台の無いものが32%となっており、本窯の方が高台を有するものの割合が高い結果となった。焼成時期が下るにつれて、碗・皿ともに大きさがやや小さくなる傾向があり、また皿類では高台が無くなっていく傾向がある。このことからみると、深廻間Ｂ古窯跡群の方が深廻間Ａ古窯群より、焼成時期は若干古いものと考えられる。

炭化材について

本古窯跡群の１号窯と２号窯から炭化材が検出された。本古窯跡群から検出された炭化材樹種は、クヌギ節・コナラ節・マツ属複維管束亜属・クリの４分類群であった。この中でクヌギ節が２７点・コナラ節が１２点と多数を占めていた。深廻間Ａ古窯群では、１号窯からクヌギ節が多く検出され、２号窯からはマツ属複維管束亜属が多く検出された。これは１号窯で豊富に生育していたクヌギ節を主要燃料として伐採したため、マツ属複維管束亜属の分布拡大を促し、２号窯のときはなくなったクヌギ節のかわりに多くなったマツ属複維管束亜属を主要燃料としたと推定されている。本窯の場合はほとんどの試料が２号窯からのものであるため、深廻間Ａ古窯群のような結果は得られていない。しかしクヌギ節・コナラ節が多いことは、深廻間Ａ古窯群とは同じ丘陵であるため、この丘陵の植生に起因しているものと思われる。

築窯年代について

本古窯跡群では考古地磁気年代測定を行っている。西南日本版によると、１号窯はA.D.1210±30年、２号窯はA.D.1200±30年、３号窯はA.D.1200±20年という結果が出ている。これを東海版永年変化曲線に照合すると、１号窯はA.D.1150±40～70年、２号窯はA.D.1150±50年、３号窯はA.D.1140±30～70年という結果になる。このことから本古窯跡群の３基の窯体は、ほとんど同時期に操業されていたことがわかる。

次に３基の窯体の築窯順序についてみてみたい。遺構からみると、残存状態が良好ではないため詳しくは不明である。特に前庭部は３号窯しか残存しておらず、また窯体構造も若干の違いがあるものの、築窯順序については特定できない。出土遺物の形状からみると、碗・皿ともに平均値が３号窯・２号窯・１号窯の順に小さくなっている。

これらのことから、本古窯跡群の操業時期は１２世紀後半から１３世紀初頭で、３号窯・２号窯・１号窯の順に操業されたものと考えられる。また深廻間Ａ古窯群よりも若干早い時期であると思われる。

参考文献　『深廻間Ａ古窯跡群』（大府市教育委員会　2005年）

報告書抄録

ふりがな	ふかはざまびいこようせきぐん
書　　名	深廻間Ｂ古窯跡群
副 書 名	大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ
巻　　次	
シリーズ名	大府市文化財調査報告書
シリーズ番号	第７集
編著者名	古田功治、鈴木智恵、広岡公夫、植田弥生、近藤英正
編集機関	大府市教育委員会
所 在 地	〒474－0011　大府市中央町五丁目70番地
発行年月	西暦2006年

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 °’”	東経 °’”	調査期間	調査面積 m²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ふかはざまびいこようせきぐん 深廻間Ｂ古窯跡群	おおぶしながくさまち 大府市長草町 ふかはざま 深廻間28番地 ほか	232238	44067	35° 00’46. 1205”	136° 57’09. 7324”	991020 ～ 991221	1000m²	区画整理事業

遺 跡 名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
深廻間Ｂ古窯	古窯址	平安時代末期 ～ 鎌倉時代初期	窯体3基・ 灰原2・ 土坑3・ピット4	碗・皿・ 鉢・焼台・ 伊勢型鍋 など	

大府市文化財調査報告書刊行案内

	タイトル	刊行年	値段	在庫
第１集	大府市山車調査報告書	平成７年	３，５００円	在庫あり

大府市指定有形民俗文化財になっている藤井神社祭礼山車３輌と山之神社祭礼１輌の詳細調査の報告書で図面多数掲載。３分冊で構成。

第２集	海陸庵古窯址群・神明古窯址群	平成８年	２，０００円	在庫あり

平成６年から７年に発掘調査した前期中世山茶碗窯の遺構である。神明古窯址群からは大量の広口長頸壺が出土。

第３集	円通寺古墓	平成９年	１，５００円	在庫あり

平成６年に発見された江戸中期の経塚遺構。近世村落社会における庶民の信仰を探る資料。

第４集	ガンジ山Ａ古窯跡群	平成１２年	１，２００円	在庫あり

平成９年に発掘調査した中世山茶碗窯の遺構で、検出した窯跡１基から市内ではじめて床面下施設を確認した遺跡である。

第５集	深廻間Ａ古窯跡群	平成１６年	２，４００円	在庫あり

平成９年に発掘調査した平安末期から鎌倉初期にかけての中世山茶碗窯の遺構で、検出した窯跡２基に床面下施設を確認した遺跡である。

第６集	羽根山古窯跡群	未刊

平成１０年に発掘調査した鎌倉期の中世山茶碗窯で、市内で過去に確認された最大規模の窯跡である。

大府市文化財調査報告書　第７集

深廻間Ｂ古窯跡群

～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ～

平成18年3月31日　発行

発行　愛知県大府市教育委員会
住所　〒474－0011
愛知県大府市中央町五丁目70番地

印刷　株式会社 愛知印刷工業